

AMDA (アムダ) 令和 6 年
能登半島地震・豪雨被災者緊急支援活動報告書
～南海トラフ地震・津波に備えて～



AMDA

はじめに

特定非営利活動法人AMDA 理事長 佐藤 拓史

2024年元日に能登半島地震発災、誰もが元日にまさかと思わずにはいられなかったかもしれません。地震の発生直後から情報収集、翌日に調整員派遣、被災地支援のための迅速な行動をAMDAは開始しました。輪島中学校は最も多くの方が避難している避難所であり、ここでの救護所医療の必要性を考え24時間体制で医療支援を展開しました。現場では、避難者の健康状態の把握が急務でした。多くの方が地震によるショックや不安、冬の寒さから体調を崩されており、トイレでは断水により手洗いもできない状況でした。そのため感染症が避難所内ですでに蔓延しており、感染性腸炎、インフルエンザ、コロナのそれぞれの感染者の隔離と治療を最優先で対応する必要があり、これ以上の感染者を増やさない対策に追われていました。また、高齢者や持病を持つ方、子どもたちの急変には特に注意が必要でした。避難所で慎重に経過観察をするためには、やはり24時間体制で医療を担うことのできるAMDAのような医療チームが大きな役割を果たすと実感しています。



能登半島地震では医師として現場での医療活動をするだけでなく、同時に理事長としてAMDA全体の陣頭指揮を執るという点では初めての経験でもありました。

AMDAの被災地での活動を支えている支援者、有事に備え日頃より連携し全国に多く存在しているAMDAの仲間の存在や、直後から医療チームを派遣し共に現場での医療を担う医療関係者、不足する薬剤や医療資材の輸送対応に迅速に協力していただいた各関係機関、多くの方々に関わってもらえていることで医療チームの効果的な派遣、質の高い被災地医療、さらにはAMDAらしい心の通い合う避難所での多岐にわたる活動が出来たのだと痛感しています。

AMDA設立から40年を迎えますが、地球環境の不安定な状態変化の中で今後も国内外での医療活動、人道支援活動を継続していくことの意義は益々大きくなっています。日本にも世界で認められている人道支援団体が存在していることを多くの方に知ってもらい、AMDAの活動への理解を広めていきたいと考えています。能登半島地震と能登半島豪雨で被災された方々の支援活動は、まだまだ継続していく必要があります。現在もAMDAは輪島の関係機関と連携しながら、支援活動を続けております。被災地の方々が苦境を乗り越え復活していく未来を心から信じ、今後もAMDAの出来ることを考え継続していきます。



目次

(敬称略)

はじめに

特定非営利活動法人AMDA 理事長 佐藤 拓史	… 1
活動の記録 (写真)	… 3

第一部：AMDA令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動

1.活動概要	… 7
2.活動に対してのメッセージ	
・岡山県総社市長 片岡 聡一	…12
・組合立諏訪中央病院 統括院長 今井 拓	…15
3.輪島からのメッセージ	
・輪島市立輪島中学校 元校長 永草 正彦	…16
・ごちゃまるクリニック 院長 小浦 友行	…20
・輪島中学校避難所住民ボランティア 運営委員長 三谷 正寿、みはる	…21

第二部：AMDA令和6年能登半島地震復興支援活動

1.活動概要	…22
2.活動に対してのメッセージ	
・IPU・環太平洋大学 学長 大橋 節子	…24

第三部：AMDA令和6年能登豪雨被災者緊急支援活動

1.活動概要	…25
--------	-----

第四部：各活動へのメッセージ

1.支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ	
・地震被災者緊急支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ	…27
・地震復興支援活動に参加してくださった方からのメッセージ	…60
・豪雨被災者緊急支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ	…66
2.支援活動を支えてくださった団体からのメッセージ	…67

第五部：南海トラフ・津波に備えて

AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム最新概要	…72
---------------------------	-----

資料

・支援してくださった団体一覧	…77
・時系列でみる活動の動き	…78
・職種別派遣者一覧	…79

あとがき

・AMDA南海トラフ災害対応プラットホーム合同対策本部 本部長 大西 彰	…80
--------------------------------------	-----

活動の記録

～写真で振り返るAMDA令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動～

2024年1月1日午後4時10分に石川県能登地方の深さ約15kmでマグニチュード7.6（暫定値）の地震が発生し、能登地方の広い範囲で震度6弱以上の揺れを観測。

家屋の倒壊のほか様々なインフラに多くの被害が発生した。

AMDAは、地震発災直後から情報収集を開始し、2日に調整員2人を現地へ派遣し、石川県での被害状況の調査と現地関係者との支援に向けた調整を行った。

被災当時の輪島の風景

木造の家屋だけでなく
コンクリート造の建物なども
倒壊している様子が見られ
あちこちの道路が隆起していた

地震の大きさを
感じずにはいられない 光景



輪島医療活動拠点本部との調整により、
輪島市立輪島中学校を拠点に
医療支援活動をスタート
約1か月に及ぶ緊急支援活動となった

AMDAの医療支援活動の拠点となった
輪島市立輪島中学校避難所

厳しい寒さで
時にはうっすらと積雪が見られる日も



緊急支援活動中は、避難所の救護所での患者対応だけでなく、避難所での感染症対策にかかわるさまざまな活動に積極的に取り組んだ。また、被災地での活動に合わせて、医療支援物資などをAMDA岡山本部から陸路で届けるなど、連携の取れた支援体制で、刻々と変化する被災地の状況に合わせた支援活動に取り組んだ。

荷物を積み込み、AMDA本部から輪島へ
震災による悪路もあって
移動に長時間かかった



衛生的な避難生活を維持するため
土足厳禁とした輪島中学校内を清掃活動する様子



避難所の保健室に開設した
輪島中学校内救護所診療の様子
ピーク時には1日60人以上が診察に訪れた



救護所で患者を待つだけでなく
ときには避難所の中を巡回

顔を見て声をかけることで
体調不良の早期発見や
孤立を防ぐことにもつながった

避難所の見回りの様子

約1カ月にわたる避難所での支援活動の中で、避難所の状況も変化していった。
季節柄、感染症患者が増加傾向にあったため、専用部屋を設けるなどの対応をとった。
また長引く避難生活を余儀なくされる方々の健康を守るため、体操の時間を設けるなどの取り組みも行った。

季節柄、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザなどの感染症患者が増えたことから
感染症専用の部屋での診療の様子



感染性胃腸炎患者の診察の様子
強い感染力のある感染性胃腸炎患者のために
隔離室をもうけて
診療にあたるスタッフも感染対策を行い
避難所内で感染が拡大しないよう対応した



避難所での生活が長引くことで、
運動不足からエコノミークラス症候群などの
リスクが高まるため
AMDAの体操を実施
輪になって体操をおこなうことで、自然と笑顔があふれた



ピーク時には
542人が避難生活を送っていた
輪島中学校避難所体育館内の様子



震災から約半年のタイミングで、岡山のIPU・環太平洋大学のサッカー部の協力のもと、AMDAが緊急支援活動を行った輪島中学校で「復興支援活動」として清掃ボランティアと被災地の子どもたちとの交流を行った。

新学期のスタートに向けて
IPU・環太平洋大学サッカー部有志による
輪島中学校での清掃活動



スポーツを通じた心の交流が実現！
IPU・環太平洋大学サッカー部と
輪島中学校サッカー部のサッカー交流

震災から8カ月が過ぎた9/21～9/22。石川県能登地方で発生した線状降水帯の影響により、河川の氾濫など甚大な被害が発生。AMDAは再び被災地での支援活動を実施した。



発災当時の被災地の輪島の様子
地震の爪痕が残る被災地で
土砂と山から流れてきた木で埋もれた河川



ねぶた温泉へ物資提供

重なる災害に心身共に疲弊していた被災者の方々のために実施した
鍼灸支援活動の様子
自宅の片づけなどで悪化した痛みが和らいでいる様子が見られた



第一部： AMDA令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動

1.活動概要

2024年1月1日午後4時10分に石川県能登地方の深さ約15kmでマグニチュード7.6（暫定値）の地震が発生した。この地震により石川県羽咋郡（はくいぐん）志賀町（しかまち）で最大震度を観測したほか、能登地方の広い範囲で震度6弱以上の揺れを観測するなど、被害を伴った。AMDAは発災直後から情報収集を開始し、2日に調整員2人を現地へ派遣し、石川県での被害状況の調査と現地関係者との支援に向けた調整を行った。その結果、AMDAは1月8日より、輪島市立輪島中学校（以下輪島中学校）を拠点に医療支援活動を行った。



活動概要

活動期間	2024年1月1日～2月17日 (輪島中学校避難所内での医療支援活動は1月8日から2月3日まで)
活動場所	輪島中学校ほか
活動の種類	医療支援・物資支援・食料支援
派遣者数	AMDAからの総派遣者数のべ50人（1月1日～2月17日までの緊急支援活動期間中） 医師/18人 看護師/14人 薬剤師/2人 作業療法士/1人 理学療法士/1人 調整員/14人

活動のタイムラインと活動地、活動内容の推移

- 1/1
被災者緊急支援活動の実施を決定
- 1/2～1/7
石川県庁、市立輪島病院での情報収集、輪島市内の避難所調査、避難所への巡回診療開始
- 1/8～2/3
輪島中学校避難所内保健室に救護所を開設し、避難者への医療支援活動を実施
ならびに避難者を対象とした健康支援活動、物資支援を行った
- 2/15～2/17
令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動の際お世話になった関係各所と輪島中学校訪問

緊急支援活動内容の詳細

1月1日 午後4時10分ごろ

石川県能登地方を震源とする最大震度7の地震が発生。その後もしばらく余震が続いた。AMDAは発災直後から情報収集を開始。



1月2日

AMDAは調整員2人を現地に派遣。

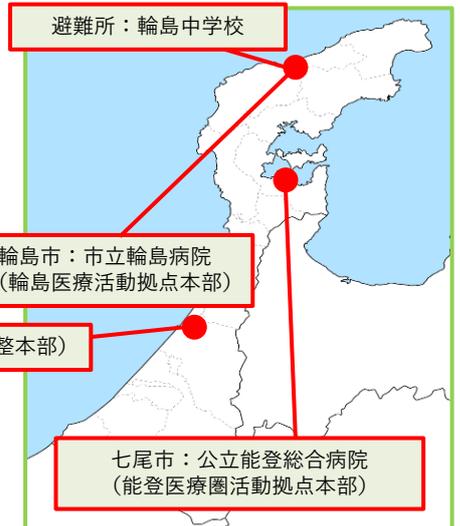
石川県庁に到着後、「石川県保健医療福祉調整会議」に参加し、石川県内の被災状況や支援状況について確認作業を行った。



1月3日

七尾市にある能登医療圏活動拠点本部（公立能登総合病院）にて登録をした。

情報収集を進めたところ、輪島市の輪島市立輪島病院に、輪島医療活動拠点本部が立ち上がったということが分かった。それを受けて輪島市を目指しさらに移動し、現地の状況や避難所に関する情報収集を行った。同病院では地震の影響を受けているもののロビー広場を活用し、多くの医療チームが集結していた。入院患者や救急患者が多数滞在中で、病院の機能は逼迫していた。



1月4日

高速道路の通行止め、道路の陥没や隆起、その他悪天候や余震の影響によって、大規模な渋滞が起こったため移動に長時間を要した。4日夜、大規模災害時協力協定を結んでいる長野県の組合立諏訪中央病院（以降諏訪中央病院）より派遣された第1陣医療チームと合流した。

1月5日

災害派遣医療チーム(DMAT)、日赤医療チームと共に輪島市内の避難所調査を行った。AMDAチームは輪島市門前町の避難所調査を実施。調整員2人は輪島市役所で行われた保健医療福祉調整本部会議に参加した。



1月6日

引続き避難所調査を実施し避難所調査と巡回診療のため輪島市河原田消防署（避難者250人相当）と三井公民館（詳細不明）へ向かった。医薬品などを積んだ車両にて、AMDA第2次派遣チームが岡山を出発。

1月7日

発災当初から続く断水により水洗トイレの利用や十分な手洗いができないため、これまでに調査を行った輪島市内の避難所では、嘔吐下痢や新型コロナウイルス等の感染症の流行が確認された。夕刻、輪島医療活動拠点本部より輪島市立輪島中学校（以降輪島中学校）にてAMDAが医療支援活動を行うことを打診された。それを受けてAMDA本部と協議の上、8日から輪島中学校避難所での医療支援活動を行うことが決定した。

1月8日

輪島中学校避難所内の調査をAMDA・行政・学校長の三者で実施し、輪島中学校の保健室に救護所を開設して医療支援活動を開始した。避難者の健康状態の調査を行い、感染症対策として土足厳禁エリアを作り、感染症患者専用の部屋を設置した。この日の同校の避難者数は、406人、救護所で診療を受けた62人のうち、感染者は32人。特に感染性胃腸炎の拡大が懸念された。



1月9日

避難者数は542人で、輪島中学校での最大避難者数だった。救護所での診療数は49人、内、感染症を疑われる患者は16人だった。感染症治療と予防に加え、上水道による手洗いが再開された。

1月10日

救護所で診療した36人のうち、インフルエンザ陽性者2人、コロナ陽性者1人、胃腸炎罹患者5人。その後、夜間に胃腸炎罹患者8人を診療した。車中泊されている避難者の診療を行った。



1月11日

避難所での診療と同時に、早急に段ボールベッドが必要な方を選定するため、輪島中学校の避難者を対象とする説明と聞き取り調査を、医師と薬剤師が実施した。体育館、アリーナ、全天候型広場、教室と避難者が分かれて滞在しており、12時間かけて3階まである施設のうち3分の2程度を巡回。

1月12日～16日

引き続き段ボールベッドが必要な人の調査を行った。

1月9日の上水道による手洗いの再開によって、救護所の受診者は減少傾向になっている。

1月17日

1次避難所の輪島中学校から2次避難所へ移動する動きもあり、避難所内の避難者数は少しずつ減少傾向であった。

1月19日

輪島中学校避難所では、高齢の避難者から順に段ボールベッドの設置が進められた。依然として道路の状態が悪く、大型のトラックで大量に物資輸送が行えないため、通行可能な車両での輸送が繰り返され、19日時点で419個が届けられた。輪島中学校は、高台にあり上下水道も大きな被害を受けた。下水を流すことができないため、トイレは凝固剤で対応。凝固剤の使用が必要ない仮設トイレは段差があり、くわえて極寒の屋外に設置されていたため、避難者の多くが屋内のトイレを使用していた。AMDAから派遣された看護師は、感染対策と衛生環境整備にも従事した。



1月20日

救護所を受診する人が多くいた。

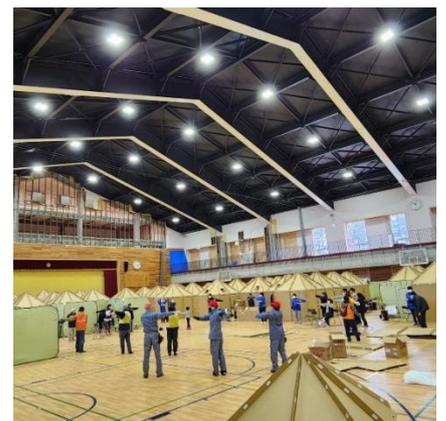
避難所の移動を考えなければならないことへの不安からくる、体調不良を訴える避難者もみられた。

1月22日

輪島中学校の避難者は450人を超えているが、感染者の数は3人まで減少。

1月23日

午後、避難所内で日課のラジオ体操が行われた後、諏訪中央病院内で通常行われている健康ストレッチをアレンジしたものをAMDAの体操として実施した。告知チラシなどを避難所内で配布し、こもりがちの避難者の方々に運動することを促した。その他にも、睡眠の改善や良質な食事、感染ならびに血栓予防、血圧の管理などの予防策を実施。



1月24日

救護所への来所者数は20人前後と減少してきた。緊急対応以外はかかりつけ医のいる病院へ家族同行で受診していただくなど、少しずつ地元の医療へとつないでいく。保健医療福祉調整本部の避難所救護班を担当する日赤医療チームと今後の輪島中学校避難所でのAMDAの活動について、ミーティングを行った。

1月26日

災害高血圧症なども心配されるため、AMDAでは避難者全員に血圧を測ることを推奨。血圧計を輪島市の協力を得て、施設内に3台設置した。24日に行った保健医療福祉調整本部救護所医療班とのミーティングを受けて、AMDAは、救護所での診療時間を、2月1日以降は短縮することを決定。その後は、緊急対応以外はなるべくかかりつけ医への受診と処方促す方向。これらの決定を保健医療福祉調整本部へ報告した。



1月28日

保険医療福祉調整本部救護所医療班との話し合いのもと、地元医療機関の診療再開に伴いAMDAの救護所での活動は2月3日をもって完了することに決定。その後の避難所における医療については、同本部からの医療者の巡回診療などで対応することになった。

1月29日

救護所での診察数が10人前後、避難所内の感染者数は6人となった。重傷者や搬送者はなかった。血圧の高い方は近隣の医療機関への受診を促した。夜間の診療はなし。リハビリの対応をした方は5人だった。

1月30日

診察の必要性は少なくなっているものの、AMDAは避難されている方々の体調管理、理学療法士によるストレッチや入浴介助など、様々な側面から避難者の支援を継続。また、地元医療機関、保健師を含む医療福祉関係者への情報共有なども行い、被災者を地元の医療、福祉につなぐ取り組みも開始。

2月1日

発災から1カ月。震災の発生した時刻に全員で黙とう。

2月3日

救護所の利用者数が1日平均10人前後となった。地元の医療機関が保険診療を徐々に再開し、加えて輪島中学校避難所と輪島病院を結ぶ巡回バスが5日から運行開始になるため、AMDAの活動は診療以外の支援活動に移行することとなった。

2月3日までの診察対応数 792件

2月5日

輪島中学校で開設していた救護所を閉鎖。



2月15日～17日

緊急医療支援活動の際お世話になった関係者・関係団体へ報告とあいさつ、輪島中学校避難所の現状と今後の支援のニーズ調査のため輪島中学校を再訪した。

避難者数は減少傾向にあるものの、依然として状況は厳しいことは誰が見ても明らかであった。輪島中学校の生徒が親元を離れ集団避難している白山市へ、岡山からの物資と寄せ書きなどを届けた。

時系列でみるAMDAからの派遣

派遣日	派遣チーム種類
1月2日	AMDA第1次派遣チーム
1月4日	諏訪中央病院第1陣医療チーム
1月6日	AMDA第2次派遣チーム
1月8日	AMDA第3次派遣チーム
1月9日	AMDA第4次派遣チーム
1月13日	諏訪中央病院第2陣医療チーム
1月15日	AMDA第5次派遣チーム
1月17日	AMDA第6次派遣チーム
1月18日	AMDA第7次派遣チーム
1月21日	諏訪中央病院第3陣医療チーム
1月22日	AMDA第8次派遣チーム
1月24日	諏訪中央病院第4陣医療チーム
1月28日	諏訪中央病院第5陣医療チーム
2月1日	諏訪中央病院より医師1人派遣
2月15日	AMDA本部より調整員2人派遣

AMDAからの派遣者数のべ50人 (2/17まで)



第一部：

AMDA令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動

2.活動に対してのメッセージ

救える命があればどこまでも

総社市長 片岡 聡一

私のモットーは、救える命があればどこへでも行く、ということだ。これは、AMDA代表 菅波茂先生の教えである。総社市は全国で唯一市長が救いに行くと決めれば、どこの被災地にも救いに行ける災害支援条例を有し、同時に公費として1,000万円の年間予算を議決し、持っている。

元日の夕方、能登の地震のニュースを見た瞬間、私は、総社市として能登支援に入る決断をした。決断するまで1分かからなかった。すぐさま、私は親交の深い小松市の宮橋市長と連絡を取り、震災による水道管の断裂などによる水不足を解消するために、七尾市、かほく市へ大量の水を送ることを約束。決断からわずか10時間後の1月2日の



早朝総社市支援隊を出発させた。最速スピードで行ったものの交通渋滞がひどく七尾市役所の勤務体制に加わったのが、1月3日の午前のことだった。多くの家屋が倒壊し、多くの尊い命を失った現場を職員たちが目の当たりにした時、ただただ立ちすくみ絶句した。私自身も、その報に接し、何とも言いぬ辛い気持ちになった。矢継ぎ早に入ってくる情報の中で、私は、もう一つ極めつけの問題点と直面することになった。それは寒さ対策だった。私は、カウンターパートである野口健氏に避難所の暖を取るために寝袋を一緒に集め、被災地に送るプロジェクトをやらないかと投げかけた。野口健氏の答えは、僕の呼びかけが終わるやいなや、「やろう」という一言だった。集める寝袋の数を目標は1万。即座にスタートした。寝袋はそんなに安いものではない。集まるだろうかという不安をよそに、「能登に寝袋を送ろう！！」と、僕と健さんが、SNSに出した瞬間、集まった集まった・・・。総社市役所に一日で400～500個の寝袋が集まった。結局、野口健チームと我々の間で集まった寝袋は9,560枚。いろんな方が寄付してくださったが、忘れられないのがCHAGE and ASKAのASKAさんが千個の寝袋を寄付してくれたことだった。ASKAさんは3,000万円を超えるご自身のお金でご寄付をしてくださっていたのだ。私はASKAさんに心から感謝をした。

私とその寝袋を持って初めて被災地に入ったのが1月11日、発災から10日後のことだった。かほく市長、七尾市長、そして輪島市長に会い、それぞれの避難所に寝袋を届けた。

輪島中学校では、いの一番に支援へ駆け付けていたAMDAのチームがすでに避難所を運営管理しており、ここでAMDAの佐藤理事長と合流。私が、AMDAチームに寝袋を500個渡した時、多くの避難者が集まってきて、これで今晚から安心して眠れると涙を流された。持って行ってよかった、寝袋支援活動をやってよかったと思えた瞬間だった。我々が約1万の寝袋を七尾市、輪島市、珠洲市、穴水町、志賀町、能登町に届けたことが、多くの人に安心した暖かい睡眠を取り戻す事になったことは、言うまでもない。

1月11日を皮切りにこれまで合計11回の能登入り、多くの寝袋を配った。それが現地に届き、そのことがいつしか感謝に変わっていった頃、野口健氏と私はともに一つの言い出せない、この能登の支援における大きな問題点を見出していた。それは現地にボランティアの方々が異様に少ないということだった。

なぜ能登にボランティアがいないのか！

これは明白だった。地震により、ボランティアが泊まる場所、居場所がないという状態だったからだ。そこで

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

石川県が考えた施策は、金沢を拠点としてボランティアをバスで奥能登までピストン輸送するというもの。石川県がボランティアを公募したところ、1万を超える方々が手を挙げ、マッチングされていたと聞いていた。

しかし、奥能登へつながる道は、一本道のため交通渋滞が発生し、輪島や珠洲に到着するまでに3時間。特に穴水町周辺の渋滞は深刻だった。したがって、活動場所まで往復で7時間かかるとすれば、実際に活動できる時間はごくごく短時間に限られる。そんな中でボランティアへ行こうとする方は極めて少ない。私は野口健氏と連絡を取り、思い切って2月の中旬から奥能登にボランティアを迎え入れるためのテント村を設営しないかと提案。すると野口氏は、またもやわずか5秒で即答。固い決意と共にふたりの心は一致していた。我々はその日からボランティアを迎え入れるためのテント村建設に向けて準備を開始した。しかし最初に立ちはだかった壁は場所の選定だった。当初、輪島市に声をかけたが、震災の傷跡が大きすぎて、テント村用地としての場所はなかった。そこで次の目標としたのが、七尾市だった。大雪が降る中を茶谷市長と七尾市営野球場の外周を歩きながら、直感的にテントを張るなら、この野球場の中の外野グラウンドにするしかないと思い、茶谷市長に決断を委ね、七尾市を後にした。茶谷市長からの答えを毎日待つ日々。しかし、なかなか返事が来ない。諦めかけた時、茶谷市長から、七尾市営野球場を全面的にお貸しします、という1本の電話。私は本当に嬉しくて、誰よりも何よりも早く野口健氏に、「借りられたよ、茶谷市長が大決断をしてくれた。」と連絡し、喜びを分かち合った。我々はすぐさま、テント村の建設に向けて準備を進めた。まずはテント村の規模。テントは100張、そのテントは野口健氏が責任を持って集める。その代わりに、建設と運営管理は、総社市が責任を持って行うという役割分担にした。一方で私は、私の盟友である、フランスで働いている前守山市長宮本氏に連絡し協力を要請。設計施工に長けている宮本前市長は、フランス時間の深夜にも関わらず「わかった、すぐに帰国し七尾市へ行く。」と即答。彼は帰国後、テント設営に向けてその手腕を発揮。そして同時に、様々な会社の協力を得て、テントの下に置くコンパネや寒さを凌ぐための断熱材などをすべて無償提供してくれるよう調整してくれた。実際に我々は、3月24日を開村日と決め、建設に入っていった。しかしその建設を進めかけていた矢先、次なる難敵が出現。それは予想だにしない石川県庁の反対であった。石川県民を助けようとして、石川県庁に反対される。その悔しさと怒りで、私はわなわなと震えていた。それでも、ここまでやってきたのだからと、茶谷市長に、石川県との再調整を依頼した。茶谷市長は、馳知事と侃侃諤諤の末、七尾市営野球場の使用許可及びテント村の運営を勝ち取り、総社市と野口健氏にすべてを委ねてくれたのだ。本当によく戦ってくださったと思う。

その後、3月21日から100張のテントを建設。残るは、その運営管理を共にしてくれる市を集めることだった。私が声をかけた市長は、東大阪の野田市長、和泉の辻市長、海老名の内野市長、赤磐の友實市長、南砺の田中市長。どの市長も快諾してくれた。そしてスタート直後鎌倉市長からも協力したいからと言って手を挙げて参加してくれた。これは本当に嬉しかった。ボランティアの募集は総社のホームページで公募。「七尾市営野球場のテント村ボランティアの募集!!」とSNSで全国発信した時に、信じられないくらいほど多くのボランティアの方々がエントリーしてくださった。

我々は3月25日から5月31日までの期間、延べ 5,234人のボランティアを迎え、そして986世帯のボランティアを完結させていった。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

テント村開設67日間には多くの物語があった。一番忘れられないのは、七尾市営野球場のご近所町内から久保えいみさん、平沼えいこさんお二人のご婦人が毎晩テント村に来てくれて、ベンチの中で全国から来たボランティアの方々に炊き出しを行ってくれたことだ。彼女たちが作った手料理で一日あった仕事をみんなで語り合う。その手作り料理を私も舌つづみを打ったが、まさしく愛あるボランティアを支えるボランティアであった。後で聞いてみると、そのお二方ともご自身の家は大きく壊れ、被災して居場所を失っていたという。彼女たちのテント村への愛を思うと返す言葉もない。多くの愛、多くの友情、それによって成り立ったテント村活動、私はいささかの後悔もしていない。多くの方々のご協力に心から感謝を申し上げている。

ここで、今後の活動のためにいくつかの私自身の思いを申し上げておきたい。

一つは、受援力。

支援を受ける力を各基礎自治体は鍛えておく必要があるということ。応援するよりも応援を受ける方が、当然のことであるが数段高度な実力を求められることになる。応援を受ける力、それは直接市民を守る力に直結していく。それを鍛え上げることに全力を尽くすべきであること。

二つ目は、権力の複数構造は災害支援を遅らせるということ。

国、県、市の複数構造の中で有事の際の中心的な役割を持ち責任を持つのは、当然基礎自治体であると私は思っている。国では、有事対応の地方自治法の改正により、超法規的な指示を国が自治体に対して命令するところがあるが、できる限り、基礎自治体のやり方を見守ってほしい。市が決めたことを優先的に行わせてもらいたい。それが復興への最短の近道だからだ。今回、石川県庁は七尾市の発言を許し、市営球場でボランティアを受け入れる活動を容認してくれた。私は、今回のミッションはその部分に尽きると思っている。

三つ目は、テント村という災害支援方法が、これからの地震などを中心とした災害には有益であるということ。そして寒冷地の避難所では、寝袋が有益であるということ。アウトドアグッズの用途が被災地を救うということ、我が国の被災地支援の一つの手段として考えてもらいたい。テント村構想が世界に通用するスフィア基準を満たす避難所になるべきだと考えている。

最後に私たちは報道のあり方やSNSの発信の情報量によって被災地への支援が増減する悪癖がある。実際、ここ数日間、日本のニュースは兵庫県に向き、能登は忘れ去られていた。報道されなくなった能登の方々は、地震後の大水害により復興の道が阻まれ、今も尚途方に暮れている。現場には食事を作ろうにも食材がない。そんな中で始めた「もっと野菜プロジェクト」。私と健さんが結束して輪島市の重蔵神社で毎週土曜日、被災者に野菜を無償で提供し続けている。能登の支援を終わらせてはいけぬ。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

AMDAの能登半島地震被災者緊急支援活動に参加して

諏訪中央病院 統括院長・能登半島地震支援チーム本部長 今井 拓

2024年1月1日午後4時10分に石川県能登半島を震源とする震度7の地震が発生しました。諏訪中央病院がある茅野市では震度4を観測。その時、業務で院内にいた私は病院内を見回り、被害が無いことを確認していました。今回、第1陣に調整員として参加してくれた臨床工学技士の松尾君もEMISで当院の状況を報告するために来院してくれており、「結構激しい揺れだったね。現地の状況はどうなんだろう。」と言葉を交わしたのを覚えています。



その後、徐々に能登半島の被害状況が判明し、1月2日には当院でも被災地への支援ができないかという話が、病院幹部も含めて自然発生的に持ち上がったことが強く印象に残っています。

今回特に対応が早かった背景には、故郷や出身大学が石川県や富山県の職員も多くいたことも関係したのかもしれません。

1月3日には病院内に能登半島地震支援チームを立ち上げ、知り合いの先生方に連絡をとり被害状況の収集にあたりました。その中で、恵寿総合病院が2日後の患者さんへの食料供給にも不安があることが判明し、同院へ支援物資を搬送することを決めました。また同日に大規模災害時協力協定を結んでいたAMDAからの支援活動の要請があり、医師1人、看護師1人、調整員1人の支援隊を1月4日から派遣する決定をしました。

その後のAMDAの下での支援活動に関しては、それぞれの報告の通りで、約1ヶ月に渡る支援活動に参加させていただきました。

地方の中規模病院の支援としては、かなり背伸びをした活動だったと思っていますが、「目の前に災害で困っている人がいれば助けるでしょう」という発想で、多職種で継続的に支援ができたことは、「諏訪中央病院という少し変わった病院の良さ」だと考えています。

そしてそれを可能にしたのは、支援に行ってくれた個人やそれを支えてくれた家族、支援に行ってくれた人の分まで病院に残って業務をこなしてくれた同僚の強い思いがあっただけだったと思っています。

全国的な災害支援組織の傘下でない当院が災害支援活動を行うことは通常困難ですが、今回の様に急性期から支援に参加できたのは、AMDAという組織と出会えたからだと思っています。国内外問わず災害支援の経験が豊富で、「困っている人を助きたい」という人間が持っている自然な感情を世界規模で体現しているAMDAと協力して支援できたことは当院にとっても財産になったと思います。また依田窪病院や富士見高原病院といった地域の他の病院とも連携し支援できたのも大きな収穫でした。

当院はAMDAの南海トラフ災害対応プラットフォームに参加し、現在、徳島県の阿南市と協定を結んでいます。今後、大規模災害が再び起これば、またAMDAと協力しながら可能な被災地支援を行っていかれたらと考えています。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

第一部：

AMDA令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動

3.輪島からのメッセージ

「令和6年能登半島地震」に係る避難所運営を振り返って

元輪島中学校長 永草 正彦

能登半島地震発生直後の学校状況

令和6年元日の夕方、帰省した実家の庭にいた私は、震度7の大地震に襲われた。揺れの激しさから身を守るために地面に這いつくばり、壊れていく家をただ眺めていることしかできなかった。辺り一面を覆う土煙の中、生徒や学校の状況が心配でならなかった。私は道路の寸断により孤立状況に陥り、二日間の車中泊を余儀なくされた。携帯電話も使えない私には、車中で聴くラジオ放送が唯一の情報源だった。しかし、そこから流れるのは校区を襲う凄惨な状況であり、私の焦りと不安は募るばかりだった。



避難所となった学校

学校に辿り着くことができたのは3日の正午だった。通常、30分のはずの移動時間は7時間を要した。新年を迎えて初出勤した学校は大勢の被災者が身を寄せる避難所となっていた。完成して7年目の校舎が、戦禍に見舞われた姿へと変貌しているのを目の当たりにして、思わず落涙した。校舎や体育館の割れたガラス窓はブルーシートで覆われてはいたが、校舎内には冬の冷たい風が容赦なく吹き込んでいた。



避難所での職員との再会

職員室に入ると、職員二人が毛布に包まりながらぼつんと座っていた。二人とも自宅が壊れて学校に避難して来ていたのだ。その職員から、私が把握できない発災後の二日間の様子を聞くができた。大津波警報が発令された後、多くの避難者が押し寄せてきて、誰かの許可や同意を得ることもできないまま避難所となっただけ。二つの体育館だけでは収まらず、職員室や校長室を除く殆どの教室は、避難者が身を寄せる場所となった。地震の大きな揺れによって、各教室にかけられていた施錠は壊れ、開放されていたのだ。

避難所運営への支援

高台に建つ学校には、家族と共に多くの生徒が避難していた。寒さに震え生気を失ったように床に座り込む子どもたちや避難者の姿を見るにつけ胸が痛んだ。校舎内は土足の出入りで汚れ、その泥だらけの床に避難者が横たわっている状況であった。水が使えないためトイレは不自由を極め、ノロウイルスやインフルエンザなどの感染症が流行していた。避難所を運営するスタッフが足りないことは明白な状況だった。私たち職員も、避難者を支援すべく、校舎内の清掃・片付けや支援物資の運搬を担当した。この日から、輪島中学校職員としての避難所支援が始まった。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

「集いの場」で耳にする生徒の不安

職員室の出入り口付近は、いつの間にか生徒が交流する場所となっていた。時折、教師と会話するために生徒が職員室近くに集まっていたのが、徐々に広まって「集いの場」となった。そこには、生徒の生の声を聞くことができた。「家も無くなったし、これからどうなるのか」「希望する高校に進学できるのか」「学校はいつ再開するのか」「早く友達に会って話をしたい」「思っきり運動がしたい」などなど。住む家や家族を亡くした生徒もいた。恐らく家族の前では、自分の不安や心配事を口にすることもできないのかもしれない。私は目の前にいる生徒の不安な姿を目にして、他の生徒の状況に思いを巡らせた。

困難を極めた生徒の状況確認

一刻も早く、他の生徒や職員の様子を確認する必要があった。しかし、学校から連絡メールを配信できたのは停電が解消した4日の夕方だった。保護者と生徒宛にそれぞれ一斉メールを送り、双方向型の受発信を行った。多くの生徒からは間もなくして返信があり、状況を確認することができた。しかし、数日待っても返信の無い生徒に対しては、職員が手分けして市内の他の避難所を回り安否調査を進めた。そして8日の夕方、ようやく生徒全員の無事を確認することができた。大災害にも関わらず、生徒全員が無事であったことを職員と喜び合った。震災でスマホ等の通信手段を失ったことや県外に帰省していたことなどが、早期の状況確認を困難なものにした。



AMDAとの協働による感染対応

道路修復が進むに連れて校内の避難者も徐々に減少していった。一方で、ノロウイルスなどの感染者数は依然として増加している状況だった。7日に医療支援としてAMDAチームが学校に入ることになり、到着後すぐに打合せを行った。翌日、私はAMDAスタッフと共に、避難者の健康状況を把握すべく聴き取り調査を実施した。「輪島中の校長です。調査にご協力ください。」と切り出すと、ほとんどの方が校舎を利用できることへの感謝の言葉を口にして、快く質問に答えてくださった。



車中泊の避難者も調査に加えることで、調査には三日程度を要したが、避難者の連絡先や既往症などの把握ができた。以降、この情報を基にして、避難者の健康を維持する活動を進めていくことになる。

見えない学校再開への不安

AMDAが避難所に入り、医療面・衛生面での改善が進んでいった。「校舎内土足厳禁」「自主的掃除の推奨」「簡易トイレの洋式化」「手指消毒と換気の励行」など、着々と衛生環境は整理されていった。そして、私たち職員は定時の見回りと校内放送を担当することになった。

避難所として環境が改善される中、私の頭を離れなかったのは、「学校再開」である。一日も早く、子どもたちの未来への希望を取り戻したかった。しかし、市役所や消防署から避難者が去り、本来の機能が回復される中であっても、学校としての「再開時期」や「再開に向けたスケジュール」は示されることは無かった。

9日は3学期始業式、13・14日には私立高校の推薦入試が迫っていた。「いつまで子どもたちに我慢をさせればよいのか」「子どもたちのために学校は何ができるのか」。校長としての悶々とした時間は虚しく過ぎていった。

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

集団避難の開始に向けて

9日、輪島市教育委員会から「生徒の居場所調査」実施の要請があり、翌日10日には「白山市への避難」に係る通知が届いた。「生徒の学習と生活の場を確保するため、17日に出発する」という内容だった。寝耳に水の感があったが、子どもたちの現状を鑑みたとき、この方法しかないのかと納得した。

早急に保護者に連絡するとともに、避難希望調査を実施した。学校には続々と回答が届き、最終的には生徒の約7割にあたる約230名が避難を希望した。残る1割の生徒は転出を、その他の生徒は自宅等でのオンライン学習を希望した。

この避難者数を受け、生徒が生活する施設は、1、2年生は県立白山ろく少年自然の家に、3年生は県立白山青年の家と決まった。また学習の場も学年ごとに白嶺小中学校、鳥越中学校、白山青年の家と分散することが決定された。

白山市における学びの準備

私は200名を超える大勢の生徒を引率する「白山市への集団避難」の責任者となった。すぐに取り掛かったのは、避難生活に同行する職員の調整だった。二つの施設での生活支援、三つの施設での学習支援を可能にする職員配置が求められた。しかし、被災した職員が多かったことと避難地が居住地から遠く通勤困難であることから難航した。それでも、何とか各教科の授業が可能な16名の職員を確保することができた。



次に取り組んだのは集団避難の準備である。生徒の下足箱には、多くの生徒の内履きが置かれたままであり、その袋詰めを行った。避難所となっている各教室には生徒の教科書やノートもあった。避難者の同意を得て教室に入り、クラス名が書かれた段ボールの中に詰め込んだ。宿泊施設での部屋割りや必要な係や当番。学習施設でのクラス分けや名簿の作成など、短い時間の中で互いの知恵を出し合いながら準備を進めていった。

友との涙の再開

白山市へ集団避難する17日の朝、私たち職員は生徒集合の1時間前に出発場所に集まった。準備した教材教具等をバスに積み込むためである。積み込み作業の終わりが見え始めた頃になると、一人また一人と緊張した表情の生徒が集まって来た。制服姿の生徒もいれば、私服の生徒もいる。大きなスーツケースを引きながら来る生徒もいれば、小さなリュックサック一つの生徒もいる。こうした様子からは、一人一人の被災状況の違いはすぐに見て取れた。

静かな集合の様子が見られたのは、ほんの数分だった。そのうち、あちらこちらから、歓喜の声が響いてきた。「久しぶり」「元気やった」「どこにおったん」「何しとったん」など。久しぶりに聞く生徒の元気な声と、互いに抱き合って再会を喜び合う生徒の姿を見て、私たち職員ももらい泣きした。テレビ報道では、「家族との涙の別れ」が話題となっていたが、私は、この「友との涙の再会」を一生忘れることは無いと思う。

この日から、生徒と共に過ごす「輪島市の中学生による白山市への避難生活」が始まることになった。そして、3年生は卒業式前日の3月8日に、1、2年生はその2週間後の22日に生活施設をそれぞれ退所して、長い白山市での避難生活にピリオドを打った。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

突然の地震と白山市への集団避難。ともに想定外の大きな出来事だった。私は3月31日、39年間の教師生活を定年退職した。「生徒の学習と生活の場の確保」という避難生活のミッションは、私の教員生活の最大かつ最後のミッションとなった。長い避難生活には、様々な難題が降りかかってきたものの、3年生全員が希望する進路に進み、1、2年生全員も元気に進級できたことは、何よりも私たち職員の喜びである。ただ、地震後の復旧・復興の道のりはまだまだ厳しい。私はこれからも、だれ一人取り残すことなく、生徒全員の「心の復興」を心から願って止まない。



最後に、輪島市の生徒や避難者に心から寄り添っていただいたAMDAの皆さんに心から感謝の意を表するとともに、今後のAMDAのご活躍とご発展を心から願い、この報告文を終わらせていただきます。ありがとうございました。



AMDAさんへ

ごちゃまるクリニック 院長 小浦 友行

令和6年1月1日の能登半島地震。発災直後、孤立した能登半島で私たち被災者は互いに支えあって未曾有の危機に立ち向かっていた。物資も人手も、知識も経験も何もかもが不足していた。私はかつて災害医療の支援者として活動した経験があり、応援が駆けつけてくれるその時までなんとかバトンをつなげたい、それこそ必死の思いで発災急性期を過ごしていた。1月4日以降、待ちに待った外部支援チームが次々に到着した。その中にはかつて一緒に働いた先輩、後輩達の姿もあった。AMDAチームには未熟な若手時代にお世話になった諏訪中央病院の先輩方もいらしかった。



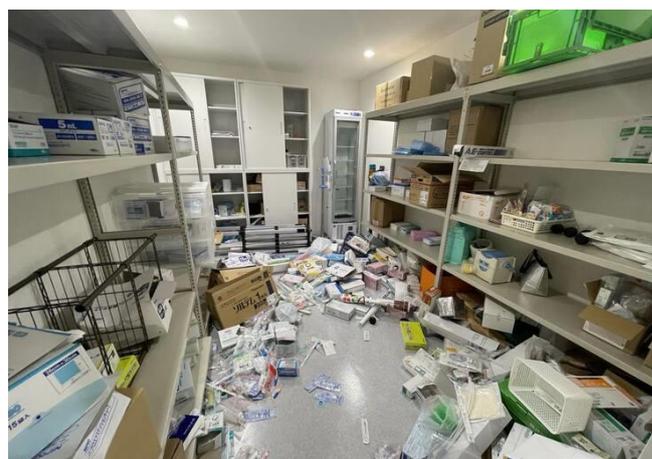
そんな皆さんと共に故郷の危機を支えられることに、頼もしさ、うれしさとともに、若干の誇らしさもあった。本当に辛い日々であったが、支援の皆様を支えられながら、目まぐるしく地域医療の復旧にいそしんでいた。

外部支援終了の3月、いよいよ地域の私達が自立して復興を歩む日々が訪れた。熱気にあふれかえていた保健医療福祉調整本部も空っぽになり、支援チームの皆さんがお別れのご挨拶に復旧途中のクリニックにお越しくださいました。AMDAチームさんにも「また何かあればいつでもお声がけを」と仰って頂き、大変ありがたかったことを覚えている。当時はまさか、再び被災支援として再開するとは思っていませんでした。

その後の復興は決して望むような速度ではなかったが、5月には診療所の修復も終了し、ささやかな明るい兆しを実感できる日々を過ごしていた。

9月21日、奥能登豪雨発生。当院は近隣河川の氾濫により床上1mの浸水で医療機関としての機能を再び失った。ほぼ全ての医療機器は水没し、汚泥にまみれた床や壁板は全てはがされ骨組みだけになり、復旧時期は未定である。浸水した診療所に初めて足を踏み入れた時、私の心は完全に折れた。かつて原動力となった地域医療への情熱もわかず、決定的な回復の機会に巡り合うことなく診療を継続していた。しかし、わずかにできること、日々のちょっとした会話、様々な方々との直接・間接的な関わりあいを通じて、徐々に気力が戻ってくることを実感した。

かつて私は地域への強い愛情を糧に災害下の復興地域ケアに従事してきた。しかし、奥能登豪雨では心境が若干変化した。今回の二重被災では、直接被害の有無に関わらず、この土地や人にご縁のあるたくさんの皆さんが、再びより深く心を痛める結果となってしまった。復興の日々の物語は決して被災地だけのものではない。懸命に生きる被災地の姿にかえって励まされる、との感想を頂いたことがある。そうであるならば、被災地で懸命に過ごす我々の姿は、ご縁のある全ての人々が、困難の中日々を懸命に過ごす姿そのものであるとも言える。私たちは決して一人で歩んでいる訳ではない。まだまだ大変な日々であるが、応援者である全ての皆さんに、心からの愛情と感謝を改めてお伝えしたい。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

ゾーニングの大切さを教わる

輪島中学校避難所住民ボランティア 運営委員長 三谷 正寿、みはる

今回の能登半島地震で私達夫婦は、地震発生当日から約5か月間、輪島中学校避難所にお世話になりました。

当初は避難者が500～600名もいるにもかかわらず、係員が輪島市役所職員数名しかおらず大混乱状態でした。そこで私達も何かお手伝いすることはできないかと、その補佐役をつとめていましたが、素人で何の予備知識もなく、日に日に感染症患者も増えてきて、どうしてよいか分からずに右往左往していました。

そんな時に岡山県からAMDAの皆さんが支援に駆けつけて下さり、すぐに避難所内のゾーニングを始め、建物内は土足禁止にしてスリッパを使うことによって内と外の分けをするのを教えて下さいました。また、新型コロナウイルスやインフルエンザ、ノロウイルスなどの感染症患者の隔離方法や対応の仕方などを指導して下さいったお陰で、感染症を最小限に抑えることができ、保健・衛生面でより安全・安心な環境を保つことができました。



そして、AMDAさんが輪島中学校避難所に派遣されていた期間中は、高齢者や慢性疾患を持っている方など弱者への配慮にも気を配って下さり、きめ細かな所まで指導・助言を下さったお陰で、大人数の避難所であるにもかかわらず、一人の死者も重症者も出ませんでした。本当に感謝の言葉しかありません。



また、個人的に私自身も1月中旬に過労で倒れた時に、避難所内に常駐しているAMDAの医師に診断していただき、すぐに点滴をして薬を処方してもらったお陰で数日後に回復して動けるようになりました。避難所内に医師や看護師などの専門家がいるということのありがたさを身をもって痛感しました。

今思い返すと、AMDAの皆さんが輪島中学校にいらっしゃったのは約1か月間という短い期間でしたが、震災後初期の混乱した状態を専門的立場から冷静にいろいろとアドバイスいただいたお陰で、大きな避難所も沈静化できたのではないかと考えています。

1月という厳寒期で、雪が舞い降る厳しい寒さの中、そして能登半島の先端という遠方まで、地震で道路状況も悪い中を多くの方が支援に駆けつけて下さったことに、改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

第二部：

AMDA令和6年能登半島地震復興支援活動

1.活動概要

活動概要

活動期間	2024年4月24日～8月7日
活動場所	輪島中学校ほか
活動の種類	復興支援
派遣者数	AMDAからの総派遣者数のべ27人（4月24日からの復興支援活動として） <ul style="list-style-type: none">・看護師/2人 調整員/5人・IPU・環太平洋大学サッカー部/コーチ1人・IPU・環太平洋大学サッカー部/学生19人



活動のタイムラインと活動地、活動内容の推移

- 4/24～4/26
輪島中学校を訪問し、情報収集を行う
- 7/9～7/11
輪島中学校訪問。輪島市教育委員会を通じ、輪島中学校の復興支援活動をAMDAで行うことが決定
- 8/5～8/7
AMDAと連携協定を締結しているIPU・環太平洋大学のサッカー部有志による協力のもと、輪島中学校復興支援活動を実施

活動の詳細

4月24日～26日

輪島中学校を訪問。中学校再開を受けて校舎にいた避難者はすべて体育館とアリーナに集約され、教室には集団避難から帰ってきた中学生が戻ってきていた。しかし、近隣小学校の仮設校舎が完成するまでの間、小学生が中学校の空いている教室を利用している様な状況であった。地域の復興状況は完全では無いが、水道においては主要箇所を中心に復旧が徐々に進んでいた。

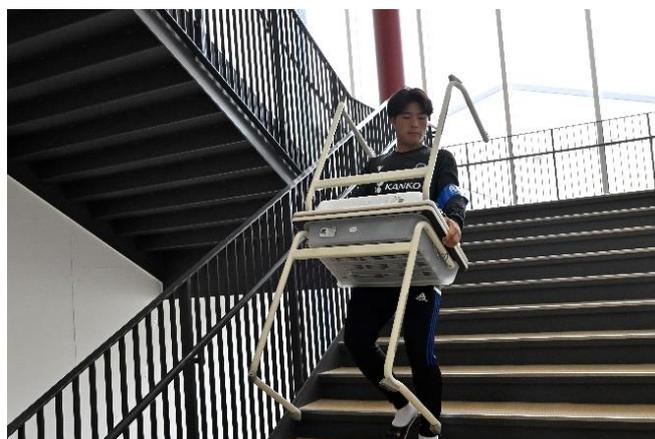
7月9日～11日

前回輪島中学校に訪問したときの話を聞き、輪島中学校の校長先生と面会してその後の状況を伺った。現在輪島中学校の空き教室を利用している小学生たちが、2学期からは各小学校の校庭に出来る仮設校舎に移動する予定とのこと。これを受けて、輪島市教育委員会を通じ輪島中学校の復興支援として教室の掃除や机の移動などを行うボランティア活動をAMDAで行うことが決まった。

8月5日～7日

AMDAと連携協定を締結しているIPU・環太平洋大学のサッカー部の学生19人とコーチ1人の20人と、AMDAから看護師2人、調整員1人の総勢23人で、5日にバスで岡山を出発し輪島中学校へ向かった。6日朝から、小学生たちが使っていた教室の掃除と、2学期から中学生たちが使う教室の準備のため、机の移動などの作業を行った。

作業は6日午前中で終わり、午後からは輪島中学校のサッカー部と今回活動に参加しているIPU・環太平洋大学の学生によるサッカー交流を行った。



第二部：

AMDA令和6年能登半島地震復興支援活動

2.活動に対してのメッセージ

AMDAとの活動にあたって

IPU・環太平洋大学 学長 大橋 節子

AMDAの「救える命があればどこまでも」というスローガンを共に実践したいと、IPU・環太平洋大学は立ち上がりました。

今はまだ「出来る事を全力で」という段階ではありますが、日本で、世界で起きている「辛い出来事に寄り添う行動」をAMDAからの情報や要請をもとに活動しようと決意しています。

2024年1月1日「1年の計を家族揃って」との願いに溢れたその日に多くの生命、財産を失った石川県輪島市へのボランティアへ赴いたIPU学生達。被災状況を目の当たりにし声も出なかったと報告してくれました。

天変地異があらゆるところで起きています。物資の供給では補えないのが「心のケア」です。

IPUでは「学生の笑顔と体力」で被災地の方々を支えることを念頭にしています。被災地の皆様が「期待する活動」は何かをAMDAとも協議させていただき実施しました。結成40周年を迎えられ多くの成果を残しておられるAMDAとの連携をより強固にし、どんな困難があっても「笑顔」で過ごせる日常を取り戻せるよう全力で継続的な活動を続けたいと思います。今後とも「人の道」を学生にお伝えいただけますよう心からお願いいたします。



2024年9月4日
IPU・環太平洋大学にて行った活動報告会の様子

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

第三部：

AMDA令和6年能登豪雨被災者緊急支援活動

1.活動概要

活動概要

活動期間	2024年9月21日～10月1日
活動場所	輪島市内老人介護施設ほか
活動の種類	鍼灸支援・物資支援・食料支援
派遣者数	AMDAからの総派遣者数のべ4人 ・鍼灸師/2人 ・調整員/2人



活動のタイムラインと活動地、活動内容の推移

- **9/21～9/22**
石川県能登地方で発生した線状降水帯の影響により、河川の氾濫など甚大な被害が発生
AMDAは地元関係者と連絡を取り、情報収集を開始
- **9/23**
職員2人が石川県に向けて岡山にあるAMDA本部より車両にて出発
- **9/24～9/26**
輪島市での活動を開始。関係各所を通して、水などの物資支援を行う
輪島市保健医療福祉調整本部、現地関係団体等と支援の可能性について協議
- **9/27**
AMDA災害鍼灸プログラムより鍼灸師2人が、岡山にあるAMDA本部より石川県へ向け車両で出発
- **9/28～10/1**
輪島市内の福祉施設において鍼灸支援活動を実施

活動の詳細

9月21日～22日

AMDAでは、21日気象庁から大雨特別警報が石川県に発令された直後から情報収集を行い、状況を注視。被害の状況と支援の内容を判断するため、AMDA職員2人を輪島に派遣することを決定した。現地からの情報に基づき、派遣者と本部で支援内容については協議を行う。

9月23日

現地の被害状況と支援の内容を判断するため、AMDA職員2人が岡山より出発した。
午後8時頃、石川県庁の中にある医療福祉調整本部に到着するが、夜遅いため明日再度訪問予定。

9月24日～26日

石川県庁の中にある医療福祉調整本部へ行き、到着の報告を行う。その後、輪島市へ向かい、輪島市医療福祉調整本部の会議に参加したり、関係各所と連絡を取ったりしながら、AMDAからの今後の支援内容の判断を行う。同時に、豪雨の影響で断水をしており、水が不足しているとのことから能登半島地震被災者支援活動で知り合った関係各所を通して、水などの物資支援を行った。

輪島市医療福祉調整本部より、現地の医療機関で診療ができていないことなどの理由から、今回はAMDAからの医療支援は不要と回答があった。しかし、1月の地震に加え、今回の豪雨災害による被災者でもあり被災者を支援する側でもある支援者（職員など）を支援するという内容であれば、活動が可能とのことだった。その内容を踏まえ、支援者の支援を行うということでAMDAから鍼灸師派遣をし、災害鍼灸を行うことを決定した。



9月27日

午前9時頃、岡山にあるAMDA本部よりAMDA災害鍼灸プログラムのメンバーである鍼灸師2人が、水などの支援物資を積み込んだ車両にて現地へ向かった。



9月28日～10月1日

輪島市保健医療福祉調整本部より紹介のあった市内の施設において、鍼灸活動を開始した。28日は、「グループホーム ひなたぼっこ」にて施術を行った。29日と10月1日には、輪島市内の「養護老人ホーム ふるさと能登」にて、30日には、「地域密着型特別養護老人ホーム 輪島荘」にて、職員の方を対象に施術を行った。ひとりひとりの声に耳を傾け、丁寧に施術を行っているため、1日に対応できる人数は10人程度。肩こり、腰痛の他、片頭痛を訴える方もいた。施設での断水が続いている、または水が出ていてもにごりがみられるため、給水場所まで水を取りに行くなど、多くの場面でいつもより職員の身体への負担が大きくなっている。身体的疲労以外にも、度重なる災害を経験したことによる、心理的な負担も多く見られた。今回、鍼による施術を初めて受ける方がほとんどだったが、「気持ちよかった」、「身体と気持ちが軽くなった」という感想がきかれた。



AMDAは輪島市保健医療福祉調整本部に、10月1日をもって活動を終了することを報告し、地元の鍼灸師に今回の活動の情報を共有した。

今後も地元の方と連絡を取りながら、状況を注視していく。



第四部： 各活動へのメッセージ

1. 支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ

【地震被災者緊急支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ】

初めての調整員としての活動

西明堂林鍼灸院 鍼灸師 林 篤志



今回の活動では発災翌日から6日間と、医療支援活動の最後2日間を現地で活動させていただきました。元日の夜に連絡をいただき、翌日に被災地に向かうことが決まりました。その時の心境として、被害状況が見えないことや自分に何ができるのか、初の調整員業務はどのような動きになるのか、といった様々な想いを抱き現場に向かったことを今でも覚えていています。

私が住む倉敷市では西日本豪雨で洪水被害を受けました。その時の全国の温かいご支援に少しばかり恩返しができると思い、今回の活動に参加させていただきました。

被災地の現場は一日一日と状況が変わるということ聞いていましたが、前日は通れた道が翌日は通れなくなったりと状況の変化に追いつくことが難しく、電波が切れ切れになり、本部との連絡が困難な状況に調整員の業務の難しさと大切さを痛感しました。

最初は本部の組織図のことや担っている業務などが分からず、今いる場所がどのような業務を行っている場所なのか分かっていないことも多くありました。

また、普段の生活では聞き馴染みのない専門用語が飛び交う現場で、得られた情報が必要な情報なのか不必要な情報なのかも分かっていなかったのが反省点です。

被災地で活動しても報われることは決して多くなく、気持ちが減入ってしまうことの方が遥かに多いのが現実なのだと思います。しかしそんな中で、一時でも苦楽を共にしてチームとして活動する方々との活動は私に活力を与えてくれました。

今回の活動でも多くの医療関係者との活動がありました。チームで活動する皆を励まし合いながら協力する姿を目の当たりにして、私が思う理想のチーム医療を垣間見た気がします。

そして、今回の活動を通してサポートして下さった多くのAMDAの関係者の皆様のおかげで安心して活動を行うことができたことも感謝せずにはいられません。

今回の活動では発災翌日、1週間後、1か月後の被災地の状況を見るという経験になりましたが、一日一日と復旧・復興に向けた多くの変化を垣間見た気がします。

これからも続く復興への歩みに、この活動だけで終わりではなく、この先も自分にできる支援を考えて行動し続けていきたいと思います。

能登半島地震で被害を受けた多くの方々にも一日も早く平穏な日常が訪れること、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2024年9月能登豪雨被災者緊急支援活動での活動報告

今回の活動では、支援者の支援という任務となりました。ご自身も被災しておられる方ばかりで、今にも折れそうな心をかろうじて繋げておられる方もいらっしゃいました。家と職場の往復で、吐き出す場所がない支援者の思いを、鍼灸施術を行うことで支えることが出来たことは、かけがえのない体験になりました。

鍼灸を必要として下さり、支援を受け入れて頂いた施設と活動の場を与えて頂いたAMDAや支援機関など全ての方々に感謝の思いでいっぱいです。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震緊急救援に参加して
諏訪中央病院 総合診療科 齋藤 穰



1月1日の発災時は日直業務中でした。緊急地震速報がそこかしこで一斉に鳴り始め、直後に諏訪地域も地震で揺れました。大きな地震であることはすぐにわかり、AMDAから派遣の要請が来るのかなと思っていたら予想通り要請があり、院内の仕事をいろいろ調整し1月4日に出発しました。1月7日までは市立輪島病院に滞在し、DMATの指示のもと避難所のスクリーニングや医療ニーズへの対応を行い、1月8日からは輪島中学校の避難所の医療支援を行ないました。ウイルス性腸炎、新型コロナウイルス感染症、インフルエンザなどが流行し始め、その対応が主な仕事でした。

今回の救援で感じたことは、阪神大震災以降幾つもの災害に対する支援の経験の蓄積から、急性期のDMATを中心とした活動、AMDAが得意とする避難所での活動などの医療に関する支援は比較的スムーズに行えているという印象でした。まだまだ改善する余地はあると思いますが、それ

なりに対応できていたと思います。

今回AMDAが医療支援に入った輪島中学校は輪島市内では最大級の避難所でしたが、AMDAの活動を支えて下さっている皆様の協力のおかげもあり、医療ニーズにはある程度応えられたと思います。今回の災害における避難所の医療支援でのAMDAの存在意義は大きかったと感じています。

一方、行政や保健についてこれまでの災害の経験が蓄積され共有され、次の災害に生かされるというシステムが日本にないため、被災した地域の職員に大きな負担がかかり大変そうでした。こちらへの対応が急務だと思います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震災害AMDA医療支援に参加して 長野県諏訪中央病院 看護師 宮澤 英典



今回の災害に際し、医療支援第1陣メンバーとして参加させていただきました。多くの課題や至らない部分も多々ありましたが1陣を担当したメンバーが台風19号豪雨災害にて支援参加経験のある医師、看護師、ロジであり、当院のAMATチームスタッフであったため、機動力のある活動展開ができたと思います。初日から3日間は災害対策本部に入り、DMATと共に避難所スクリーニング、情報集約、応急処置の活動展開する事ができました。寝泊りもDMATと共に輪島市立病院の外来にて自給自足の経験を積むことができました。

今回、災害対策本部の傘下では、AMDAの大西調整員のもと活動させていただきました。大西さんも台風19号豪雨災害支援から我々メンバーとは顔の見える関係でありました。お互いに信頼をおき我々の活動についてはチーム判断にゆだねていただけたところも多々あり、結果的にスムーズな活動展開ができたと感じ、感謝の意をお伝えしたいとおもいます。

今回の支援を経験し、超急性期の活動については、すべての参加スタッフが同様の活動を展開できるわけではないことも加味し、安全面と活動範囲を考え事前にAMDAの活動方針とプランを当院の災害対策本部との共有することが必要であると感じました。現場のニーズとAMDAの活動指針に従い、当院支援スタッフの人選もより効果的に行うことができるのではないかと感じるところもあります。

当初の情報で、1,000名弱の避難者がいる輪島中学校避難所を我々AMDAスタッフ5名で統括をするといったミッションについてですが、今回1陣のチーム内では「やるしかない」と腹をくくりました。在籍する学校の先生をはじめ、自衛隊隊長、ボランティア団体、多方面から支援部隊との調整等非常に時間とマンパワーを要した為、振り返ると本部でのミーティングにてAMDAチームをもう一チーム導入するかDMATの1チームとペアを組むことができれば、安全かつ無理のない対応ができたのではないかと反省点があげられます。

今後の避難所支援ではコロナ、ノロウイルス、インフルエンザが広がっており、実働的に感染管理としてのゾーニング、マッピング、衛生管理（清掃、消毒）を行う事が急務でした。看護師としての介入視点として、避難所スペースの土足エリアを土足禁止にするための周知、清掃を第一選択しましたが、実際には山村さんと私の2人で実施しなければならなかったことは非常に膨大なミッションであったと感じており、実際に山村さんには大変な負担をおかけしたと感じております。また、このような大きなミッションにタックを組み協働できたことに感謝しております。同時に、本来であれば医師と看護師が行う避難者スクリーニングを頼藤先生、斎藤先生、大西さん、松尾さんの4名で行っ

た事も同様であり、超急性期では否めない状況がありました。結果的にスクリーニングの際に医療的、二次健康被害予防の側面を看護師の視点からのニーズを見出せない現状でありました。優先順位をたどると看護師が居住スペースの衛生管理を担うことが責務であった為、やむを得ない状況ですが、もしDMATチームを導入し協働する事ができていれば、結果的に被災者へのさらに行き届いた初動が取れたのではないかと反省し、今後の支援対策として胸におきたいと思うところであります。（災害が起こらない事が一番ですが・・・）我々チームとしてはやるべき事をなす状況でありましたが1000人規模の避難所をAMDA単独で担うにはスタッフ数が少なすぎであり、統括しきれないリスクも背負っていたのではないかと今振り返るとそう感じます。

又、今後の課題として支援チームの活動プランを明確にし、プランの範囲を活動基準とし、そこからの活動許容を示唆しAMDAとして支援の質を担保することが必要であると考察しております。

長期にわたる支援では急性期の訓練や支援経験があるチーム構成、亜急性期から中、長期の支援を行う支援では、フレイル予防や生活援助に対応できるコメディカルの介入など災害発生からの時間軸での人選も一医療施設の判断だけではなくAMDA組織として関連施設全体からの選択ができると被災地のニーズにより近づけることができるのではないかと感じました。

能登半島地震で被災された皆さまの一日も早い復興をお祈りし、今回の支援にあたり、活動を共にさせていただいたAMDAの佐藤理事長をはじめ大西調整員、AMDA他関係者の皆様、当院スタッフの皆様へ感謝の意を表し、今後の活動でのさらなる協力をお願いする次第であります。有難うございました。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震発災後から1ヶ月間の輪島市

諏訪中央病院技術部臨床工学科 主任 臨床工学技士 松尾 昌



1月1日16時10分、石川県能登地方でマグニチュード7.6の大地震が起きました。私は、業務調整員として、直ぐに情報収集を始めました。被害が大きく、情報が錯綜している事がわかりました。私達は、AMDA本部との連携の下、第一陣として4日7時30分に病院を出発しました。道路やインフラ状況を現地にいるDMATスタッフや現地病院から情報を提供いただき、輪島病院へ向かいました。石川県七尾市辺りからは、道路の崩落や崖崩れ、家屋の倒壊などがあり、輪島市へ近づくにつれ状況が悪化していきました。携帯の電波が途絶え、暗闇の中、道路崩落や亀裂が目立ち、渋滞車両の灯が一本の道を照らしておりました。「ここは、何が起こったの？ゴジラでも通ったの？」と想像するほどの被災状況でした。輪島病院に到着後、翌日から私達は、100箇所近くある避難所スクリーニングを他のチームと協力して実施しました。そこでは、集落毎の強い結束力を感じました。若い方からお年寄りまで、住民全員で協力し、お正月の食材を各家庭から持ち寄り、暖を取りながら避難生活をしておりました。

1月7日夕方からAMDAチームは、避難所の一つである輪島中学校を任されることになり拠点を移動しました。輪島中学校は、輪島市内で一番大きな避難所であり、ピーク時は660名前後の避難者が、体育館と3階建ての校舎の各教室に避難されておりました。校舎内トイレは、大変綺麗な状況に保たれており驚きました。それは、避難住民間で作られた自治組織の方々のお陰でした。ただ、足りない物資もあり、エプロンなどは、ゴミ袋を切って作られておりました。

た。第一陣として、医療支援の他に、避難所の現状把握、環境整備を優先的に急ぐ必要がありました。医療救護所には、感染症症状の方々や昼夜問わず大勢こられました。避難者は、徐々に疲労とストレスが蓄積されているのがわかりました。そんな中、自衛隊のお風呂が設置され、「お風呂はスッキリしていいわ」という声を聞くようになりました。

私は、23日から再度、輪島市へ入りました。避難生活が一ヶ月を経過しようとしている時、医療支援の他には、移住空間の整備、避難所巡回など、避難者一人一人に目を向けていく時期になり、さらに、ストレス発散、適度な運動が重要になっておりました。任務完了時期が明確になっていく中で、まだ何かできるのではないかと感じる時期でした。輪島市を救うということは、少しずつ地元にかえていく事も重要だと思い活動していきました。ただ、ここにいるすべての人が被災者であり、避難している人のみではなく行政職員、学校職員、働いている方々、みんな被災者でした。私達支援者は、帰る家がありますが、輪島市の方々には仕事が終わって帰れるのは避難所、全ての被災者の皆様が快適にストレスない日常が早く迎えられることを今でも願っております。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

避難所内での診療所の運営・診療を通して

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・衛生学分野 教授 頼藤 貴志



活動の初期に短期間しか参加できなかったが、今回の災害の特徴として、寒さ、能登半島の先というアプローチにくい立地、そしてそれによる情報把握や対応の遅れというのが挙げられるのではないと思う。

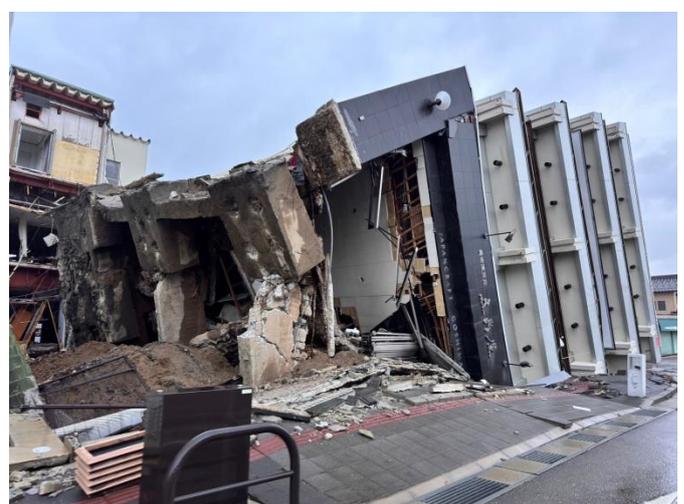
これらの特徴と相まって、医療に関するところで、参加時には、次の問題点が生じていた。これらの問題点は今でも続いているのではないかと危惧している。

1. 道路、水などのインフラの機能不全
2. 地元の保健医療福祉機能低下
受診・入院の難しさ、薬剤取得の難しさ（薬局やアクセスの問題）、保健所機能の脆弱さ、地元自治体のマンパワー不足
3. 避難所内での衛生環境維持の難しさ
三密状態、手指衛生用のアルコール不足、トイレ用物品（ゴミ袋、凝固剤）の不足、生活用水の不足、プライバシー確保の難しさ
4. 情報共有不足
市・避難所・保健所などでの協議・情報共有不足
5. アプローチにくいところで全てのこと（医療、介護、復興、支援など）をやることの難しさ

特に、3の衛生環境維持の難しさは痛感した。1月7日に輪島中学校に到着し、診療所開設前に避難所内の状態を把握するため避難所内を巡回していると、至る所で嘔吐したり発熱したりしている方がおり、腰を落ち着ける間もなく診察し続けることとなった。翌日の診療所開設後も、多くの避難者の方を診察したが、急性胃腸炎、新型コロナウイルス感染症、インフルエンザ感染症の患者さんが多かった。新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、流行が落ち着いてきたとはいえ、今回の状況は、今後の災害時の避難所における感染対策の必要性を如実に示したと思われる。

更に、個人的には、AMDAのように機動性があるNGOと、岡山県内にある自治体が協働し、お互い得意不得意なところを埋めながら、災害現場の支援を行っていくのも今後考える選択肢ではないかと思った。また、災害支援を行いたいと思っているが、DMATなどにも関わっていない県内の医療関係者が、現場で活動する機会としてAMDAの場を活用させていただくという選択肢があれば、今後AMDAと県内の医療関係者の関係を構築することができ、新しい展開が期待できるのではないと思う。また、詳しくは分からないが、能登の保健所でも、保健所長が兼務のため対応が遅くなっているという声を現場で聞いた。公衆衛生医師や人材の確保も必要になってくると思われた。

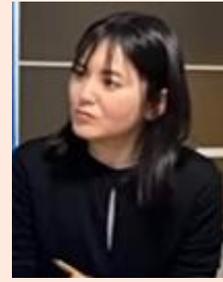
今回の災害は、被害の大きさがじわじわと効いてくる災害のような印象がした。なかなか現場の声が届かない難しさを感じたが、AMDAのような団体がその声を拾い上げていくのは必要だと思われたし、そのAMDAの活動に参加する機会をいただき感謝している。一日でも早い復興を祈っている。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震の避難所立ち上げに参加して

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・衛生学分野 看護師 山村 容加



2024年1月6日～1月10日までの派遣にて1月7日から輪島市に入り、輪島中学校で避難所での救護所の立ち上げを行った。被災地はアクセスが悪い場所であり、被害状況の情報が少なかったが、実際に被災地に入ると道路や水道などのインフラも寸断されており、想像していたよりも被害は甚大であった。

実際の活動で感じたこと3つをお伝えしたいと思う。まず1つ目は、市の保健所の機能が低下していたということである。避難所の数が多いことも今回の災害の特徴の一つであり、市の職員が各避難所に配置されていたため、市役所の人員が不足していた。そのため、保健所の機能が低下し、県なども情報共有ができていなかった。情報共有ができないことは大きな問題であり、必要な物資についても伝わらず、明日にはトイレに必要な黒い袋や水も無くなるという状況であった。支援が遅れている中で、AMDAとして被災地に入ることは直接的な情報収集と必要な物資や支援への介入ができ、行政からの介入では難しかった迅速な支援に繋がれたのではないかと感じた。2つ目は、感染症の拡大を防ぐために衛生環境の整備が必要ということである。被災地は水道が寸断されているためトイレを流すことも手を洗うこともできない環境であった。また、トイレや体育館内が全て土足の状況であったため、嘔吐下痢や、インフルエンザ、新型コロナなどの感染症が多くなっていた。感

染症拡大予防の対策として、体育館をハイターなどで清掃をして土足禁止にし、トイレの清掃や、感染症が拡大しないためのルール作りなどをAMDAのメンバーや避難所の方達と一緒にやった。活動後、感染症は徐々に減ったという報告を聞き、取り組みが感染症拡大予防に繋がったと感じた。3つ目は、今後の課題として、プライバシー確保や安全面確保の難しさがあったことである。支援が遅れて物資もないため仕切りがなく、着替えなども困難な環境であった。しかし、被災状況を慮ってか、プライバシーの問題について被災者、特に女性が声を上げる様子は見受けられず、悩みとして抱えているようであった。今後の被災地支援の課題として取り組みが必要であると感じた。

今後も、能登半島地震へどのように関わっていくのが良いか考えながら、復興の過程に携わっていきたいと思う。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震緊急救援支援活動を通して

正看護師 横谷 勇紀



新年間もなく震災により凄惨な状況が映し出されるニュースを見て、自分にも何か力になれることはないだろうかと思い、AMDA緊急支援活動に参加させて頂きました。雪が降る中、地震により隆起した道路を慎重に運転し、窓ガラス越しに見える被災した能登の景色は想像を優に超えるものでした。中学校の避難所はグラウンドや通路は隆起し、校内の壁や屋根、窓ガラス等も破損し被害の甚大さを物語っていました。

緊急支援活動は、避難所内での仮設診療所の運営や医療的支援、感染症への対策、物資の管理、瓦礫の片付けや避難所の運営支援など、取り組みは多岐にわたりました。特に到着時は感染症の拡大時期にあり、早急な感染症対策が必要とされていました。手洗いの方法や感染症対策についての啓発を行うなかで避難者ひとりひとりに声を掛けさせて頂く機会がありましたが、個々のお話を伺っていると、今回の震災で親族を亡くされた方、家が全損壊し着の身着のまま避難されてきた方、福祉避難場所に行くことが出来ず福祉的支援を受けられない方、様々な背景を持つ方がいらっしゃいました。精神的負担は計り知れません。どのように声を掛けたいかと模索しながら慎重に取り組みましたが、「来てくれてありがとう。」「他の人にも伝えるね。」等、輪島の皆様は一様に温かく受け入れて下さいました。

今回の活動を通し、AMDAの方針である「現地で迷惑を

かけない。他者の否定をしない。医療事故を起こさない。それ以外のことで被災者の方、現地のためになることならなんでもする。」という理念は各メンバーが持つ被災地を思う気持ちと掛け合わせり柔軟な支援を産むものであると感じました。困難な局面を乗り越える。そのために、学校職員、避難所の有志ボランティアの方々、行政職員の方、自衛隊職員、AMDAメンバー等、職種の垣根を超え皆が同じ目標に向かって突き進む姿に、本当のチームを感じることができました。そのメンバーの一員として参加出来たことを有難く思います。

今後の能登の復興に向け、これからも自分ができることを考えていこうと思います。ありがとうございました。



輪島中学校緊急派遣

長崎大学大学院熱帯医学 グローバルヘルス研究科大学院生1年生 薬剤師 谷口 あゆみ

この度は能登半島地震の緊急派遣に行く機会をいただき本当にありがとうございました。震災は起きないことがベストですが、これから先も日本で生きていく上で避けては通れないことだと思います。そういった非常事態に緊急援助の経験がこれから先も役に立つと信じています。



輪島市へのメッセージ

輪島の方々是我慢強く、心優しい方が多かった印象です。自分は震災直後3陣で派遣されましたが、現場まだ整っておらず混沌とした状態にも関わらず、避難者さんは私たちの提案する感染症対策にとっても協力的で嬉しかったです。

自分自身、阪神淡路大震災を経験しており、その際は他県から救援・救護などたくさんの援助をしていただいたことで長い年月をかけて今の神戸があります。その際の恩返しを込めて、輪島の支援に少しでも貢献できればと思い活動させていただきました。

中長期に向けて、生活がまだ以前のような暮らしを取り戻すには時間がかかり、精神的にしんどい、辛く感じることもあるかと思います。しんどくなる前に他県の人にいつでも頼ってください。みなさんの支援や何か小さなことでも役に立ちたいと考えている人たちは沢山います。神戸から心より輪島の復興をお祈り申し上げます。

(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

2024年能登半島地震支援活動に参加して

坂本病院 医師 鈴記 好博



私の現地での活動は、発災10日目からでありました。現場の環境は、予想していたほど劣悪なものではありませんでしたが、避難されている方々の避難環境は雑魚寝の状態が続き手洗いもままならない状況でした。

感染性胃腸炎の爆発的な流行もあり、水供給量と避難者数とを鑑みて、ただちに手洗いのための水道使用の解禁に踏み切ってよかったと思います。そのおかげか、数日中に感染性胃腸炎で救護所に訪れる方は激減し、流行を抑え込むこともできました。避難スペースが広がったおかげで、きちんと新型コロナ、インフルエンザ、感染性胃腸炎の3つの感染部屋を分けられたこともよかったと思います。

避難環境改善のための段ボールベッド確保やトイレの水道利用において、行政側と食い違いが出たことは反省点がありました。市とのコミュニケーションをより繊細にすることができていれば、という思いと、被災後の対応に切羽詰まっている市側の足並みに、もう少し寄り添いながらの環境改善を私が促進できるよう勤められていたらという思いがあります。現場の避難環境と弱っていく高齢者を目の当たりにして、私の気持ちに少し焦りがあったと反省しています。

私が介入していない、他の避難所のこととしてお聞きした窃盗、性加害問題や、災害ごとに格差のあるなか、なかなか進歩していかない災害対応など、クリアの必要な課題はいっぱいである、という事が再確認できた現場でもありました。

日本の災害対応の方針を被災自治体主導から国主導に早く切り替わるべきであると痛切に感じています。

輪島中学校避難所に避難されていた輪島市民の皆さまは、我々の支援活動に大変協力的で、被災されながらも他を思いやる素晴らしい人たちでした。

最後に、被災された皆さまの支援へのご協力に感謝申し上げます。1日も早く日常の生活が戻りますことをお祈りしております。



能登震災支援報告

諏訪中央病院 国保依田窪病院 総合診療科医師 池田 大岳



今回の能登震災支援が初めてだったので知識不足のまま行くことに不安があった。ニュースや諏訪中央病院からの申し送りでイメージしていたが実際に現地を見た風景は想像以上に過酷であり、そのような中でも生活をしている被災者の助けになればと思い支援をした。私は保健室での被災者の健康管理をした。派遣されて序盤は感染症の人数がとても多かったが徐々に人数も減っていき感染拡大を食い止められたので良かった。しかし精神面でのケアが必要で平時よりは暖かい診療をこころがけたものの十分にケアはできていなかったと思う。

4日間だったが被災地支援に実際に行けたことで自分が被災したときや再度このような甚大な災害での支援をする上で個人や病院としてどのように行動したらよいか自問する機会にもなった。一日も早い復興を祈ります。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

避難所での感染爆発をいかに抑えるか

諏訪中央病院 総合診療科医長 玉井 道裕



今回の災害支援は熊本地震の時以来の活動でした。私は能登半島の付け根にあたる石川県の内灘町で育ち、能登にはドライブや釣り、温泉に行ったり、私の人生の中で思い出深い土地です。そんな大好きな能登が大変な状況に陥ってしまい、居ても立ってもいられず災害支援を志願しました。

私は総合診療科という肩書きで感染症をはじめ内科全般の診療を普段は行なっております。コロナ禍ではイラストを用いて、一般の方への情報提供も行なっておりました。普段から行なっている診療が、今回の災害支援に活かされたと思っています。

今回の活動内容は、AMDAの一員として当時、輪島の中で最も大きな避難場所であった輪島中学校の支援でした。超急性期のDMATが活躍するような瓦礫の下の医療ではなく、第二陣として避難所内の感染症との戦いのフェーズで関わらせていただきました。第一陣の時にすでにコロナやウイルス性胃腸炎が大流行しており、隔離するための感染部屋が3階に作られておりましたが、そこは中学校内で最も苦しい場所でした。高熱や咳、嘔吐・下痢で苦しむ人たちが、家族と離れて見知らぬ人と寝食を共にしており、これはどうにかしないといけないと感じました。感染対策に隔離は必須ではありますが、感染された方にしっかり納得していただく必要があります。まずはわかりやすく隔離の理由を説明し、感染された日にちや隔離解除の日を記載した紙を作りお渡しました。これまでは、どの部屋に誰がいるか、感染から何日目なのかが不明な状態でしたので、こちらで全て把握するように努めました。また毎日、全ての感染部屋を周り、辛い症状に対する薬をお渡しして回りました。そこで一人一人の方とお話することで、困っていることや辛いことがないかを聞いてまわりました。そうすると、あの人が苦しそうとか、あの人とあの人が喧嘩している

か、食事があまり提供されていないとか、いろんな問題が浮き彫りになりました。食事や生活用品は1階、2階には潤沢に用意されていましたが、3階の隔離部屋には不十分でした。そこで行政の方に協力を依頼し、3階にもそういった食事や支援物資を提供できるスペースを確保しました。ある時、夜間に倒れてしまった方がおり、診察にいきました。幸い大事には至りませんでした。夜間のトラブルにうまく対応ができていないことが気がつきました。何かあった時にわざわざ3階から階段を降りて、1階の我々に会いに来るのは大変です。そこで3階に常にスタッフが寝泊まりすることで、困ったことがあればそのスタッフに伝えてもらうようにしました。

まとめますと個人としての活動は、感染し隔離を余儀なくされた方のQOLの向上を目指しました。常に問題が発生し続ける現場で、問題の優先順位とアウトカムが最も良くなる解決策を考え、その解決策を実行するためにはコミュニケーションが重要であると感じました。

至らぬ私をサポートして下さった第二陣のAMDAの皆様、感染隔離に同意し辛い時間を過ごされた被災者の皆様、私の提案を快諾して下さった大阪府の行政の方々、ご自身が被災されながらも我々と共に支援の側で尽力されたボランティアや輪島市の行政の方、本当にありがとうございました。9月には能登で大雨の被害が出ており、誠に心苦しい限りではありますが、被災された方々が一刻も早く、平穏な生活にお戻りになれるよう願っております。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

はじめての災害支援活動

諏訪中央病院 看護師 江森 敦子



私の主な活動は薬剤師の方から業務を引き継ぎ、教室・アリーナ・全天候広場のマッピングや早期にダンボールベッドが必要な方の選定、アリーナや全天候広場への移動の予定、ダンボールベッド、ダンボールハウス導入の説明を医師と同行し行いました。体調はどうか、困っていることはないか、高齢の方がいる場合には生活に介助が必要か、飲み込みづらさの有無の確認を行いました。起き上がりや移動に介助が必要な方もいましたが、家族の介助もあり生活ができていました。そして学校の子供たちのために移動を拒む人はおらず協力的でしたが、家が壊れて使える家財を車につめ、入りきらないものは避難所に持ってきて保管して荷物が多いことを心配される方、オープンスペースではなくなり、ハウスは暗くなってしまうため、ダンボールベットもハウスもいらないという方、動物嫌い、アレルギー体質からペットを連れてきている方と離してほしいと話す方もいました。親族で1部屋を使用している方は、気持ちがギリギリで、不自由だがやっとな落ち着いたところでまた移動というのは辛いと涙される方もいましたが、話の最後には子供のためなので協力はしますと答えられました。避難者さんの言葉を傾聴するしかできませんでした。また、後陣で支援に行った看護師と支援について振り返る中で私が訪問し話をした方がケガをして放置していたことが分かりました。私自身も沢山避難されている方を把握しなくてはいけないという焦りもあり、「困っていることはないか」という質問でしか聞いていなかったことを反省しました。避難者さんは大変な状況の中で我慢したり、このくらい大したことじゃないと思っている方も多いだらうと思います。内服薬を持ってこられているか、お薬手帳はあるか、避難するときにケガをしていないか、医療機器や酸素の使用、ストマがある等、聞き忘れてしまわないように、経験に関わらずどんな職種でも避難者の状態を把握できるように、後陣の支援に繋がられるようなアセスメントシートがあるといいと思いました。気がかりをできるだけ早く把握し解決できるように支援していくことで少しでも安心して過ごせることに繋がれたらいいなと思いました。



次に感染性胃腸炎で3階へ隔離となり、もともと自分で動いているが筋力低下から動けなくなっていた女性の方がいました。体格が大きい方で前日はオムツ交換を行ったそうでしたが、どうしてもトイレに行きたいと言ったため医師と介助し車いすへ移乗しトイレへ行きました。早期にダンボールベッドを入れましたが、人がいない中でいつも2人では介助に入れず、時間をみて飲水や食事の介助を行いました。ベッド柵があれば本人に捕まってもらえますが、捕まるところがなく自力座位保持は困難でした。起こせば、水分はむせなく飲め、自分で紙コップに入った味噌汁を持ちながらスプーンで口に運べて食べられるため、二人羽織りのような体制で体を支えながら介助を行いました。側臥位で服を整えるのも難しく、踏ん張ったときにダンボールベッドが動いてしまい介助する体制も崩れ、ダンボールベッド周囲のパテーションも倒れてしまい、羞恥心の配慮に欠け介助がしにくい状態でした。手すりがあれば、介助者の少ない状況下で本人の力も借りながら生活の援助ができ、自分で可能な限り動けるため機能低下が予防できるのではないかと感じました。そして、この方は着替えがなくオムツだけでズボンをはいていない状態でした。避難所の中の物資を探したが大きいサイズのズボンはなく、そばにいた杖歩行の夫の夏用の薄いパジャマのズボンを履いてもらいました。感染性胃腸炎の流行もあり、突然嘔吐し汚れた服は破棄していたため、着替えの洋服の不足がありました。物資は物によっては十分揃っているものもありましたが、あるものしかない状況ということを実際に感じました。

活動中、避難者さんに声を掛けられることが多くありました。避難所運営や2次避難について等知識が少なく、分からないことも多く答えられずに困りごとを活動メンバーのもとに持ち帰り、確認して戻すことの繰り返しでした。活動に参加させて頂き、災害支援看護師としての知識技術をもっと身につけて災害の状況、避難者さんのニーズに合わせて支援できるようになりたいと思いました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

1月14日から石川県輪島に医療支援に行って
さかい内科・胃腸科クリニック 医師 酒井 太郎



4日間の医療支援活動を終えて感じた事は、一概には比較できないが、今まで同時期に医療支援に行った東日本大震災や熊本地震に比べ圧倒的な人手不足、物資不足のため避難所の生活環境も悪く、それが全て避難者の負担となってしまっていた。避難者が二次避難所に移動しようと思っても情報不足から躊躇してしまい移動する人が頭打ちになり悪循環になっていた。

詳しくは分からないが僕個人の印象としては、今回、早期に二次避難所に移動するという方針を出したため、そちらの調整などに重点が置かれ、情報共有や一次避難所の環境整備まで手が回らなかったのではないだろうか。

僕も早期に二次避難所に移動することは、最善の選択肢だと思うが、避難している人達への情報が不十分で、費用がどれくらいかかるのか、どこに行くのかも分からず、避難者の中には「ミステリーツアー」と言っている人もいて、一人一人の不安に答え、寄り添いながらすすめていく必要性を大いに感じた。

被災地での、最上位目標は「助かった命を守る」ことで、二次避難所に移動することは、そのための手段の筈だが、現地では、二次避難所に移動することが目的になってしまっているように感じた。

今後の震災でも、このような対応が増える可能性があり、これからの災害医療を考える上で、きちんと検証しないといけないことだと思っている。

この報告書を書いている時点でも、まだまだ沢山の方が大変な生活を続けている。被災した方々に寄り添いながら早く日常に戻ることを祈り、これからもできることで応援していこうと思っている。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島地震救援支援報告書

看護師 岡野 亜香

看護師として輪島中学校の避難所に派遣されました。派遣前は、診療所にて診察介助や健康管理を行うのが活動であると考えていました。しかし、実際は健康管理だけでなく、避難所の方々の居住環境を整える、ケアが必要と思われる人の割り出しを中心に活動を行いました。毎日、各教室などを巡回し、声をかけ、各家族、住民の方のそれぞれの問題を抽出していきました。また、看護ケアが必要な方へのケアに関してはAMDAだけでなく、協力してくれたDC-CATのスタッフとともに、ケア計画を立てました。ケアが必要な方すべてに行き渡るように、また交代する後任のどのスタッフもすぐに住民の元に行け、継続的にケアが行え、関われるように避難所のマッピング作成も行いました。

活動の中で、避難所は病院ではないということ、住民の方が生活をしていると言うことを一番に考えなければいけない、私たちが中心となって考えるのではなく、支援的な存在であるということ考えなければいけない事を痛感させられました。

また、スタッフ間の連携がとても大事であることも考えさせられました。我々支援側は数日でどんどんメンバーが入れ替わりました。その交代する支援者は災害支援という熱い思いを持った人が多く、それぞれの価値観を持っています。また、避難所での活動は、何をしないといけないという活動計画はなく、個々人がそれぞれに考えた支援を行うことができました。その中で、しっかり連携、情報を共有していかなければ、避難所の方たちのためにという思いでそれぞれが動いても、結局は住民の方を振り回してしまっているのではないかと感じる事が多くありました。

被災してから3週間も経とうとしていた頃に、被災時に怪

我をされ、その後の処置を行っていない方など、医療処置、看護ケアが必要な方が数名おられました。毎日、巡回をしていたが、そのようなケアが必要な方が見つけ出せなかったことが本当に悔やまれました。これも、結局はスタッフ間の連携が取れ、毎日、お互いの情報のや行動計画が明確に共有できていれば、もっと早くに全体像の把握、処置、ケアが必要な方が見つけられ、適切な処置が早くできたと思います。

災害派遣の経験も少なく、助産師である私は、実際に何ができるのだろうか、とても不安な気持ちで活動に参加しました。現地に到着後も、何ができるのか、どう動いていいのかかわからず、戸惑うばかりでした。自分では問題を見つけることも、目標を見つけることもできず、本当に自分が派遣されてよかったのかと思う事もありました。しかし、住民の方から「ごくろう様です。ありがとうございます。」と言われ、心が救われました。すごくありがたく、感謝の気持ちでいっぱいになりました。一緒に活動させていただいた皆さんや被災者の方に「ありがとう。」と言ってもらえただけで、参加できて本当によかったと思います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

なぜAMDAの活動なのか

福岡国際医療福祉大学 看護学部 教授 堀内 美由紀



支援に入って最初の朝、「皆さんおはようございます。・・・新しいお医者さん、看護師さんが先日入れました。アムダの皆さん、今日もよろしくお祈りします。」という住民の方の声で放送が流れて胸が熱くなり、頑張るぞ!と改めて誓いました。

私たちが入ったのは、発災から2週間が経過した夕方。住民の方々が、主体的に避難所運営をされていました。何よりキレイに管理されたトイレには驚きました。手指消毒も徹底されていました。3年以上にも及ぶ新型コロナ感染症流行で、一般住民の方々（被災者の方々）が感染症に対する予防行動や意識が高かったことは、感染症拡大予防に貢献したと思います。実際にインフルエンザも新型コロナ感染症も一定数で押さえることができました。避難所での健康管理には、医療者だけの力では限界があること、避難されている方々自らの行動が重要であることを再確認しました。

応援に入っていた他県の行政職員の皆さんも、日ごろから行政としての「支援の準備」をされているばかりではなく、しっかり被災者の方に寄り添って活動されている印象でした。たとえば、感染症を発症した方々が療養する3階に待機し、食事や必要なものを届ける支援をされていた若い大阪府の職員の方から、（支援物資のブースを一般の方々と同じ2階に集約するといった意見が会議で出されたそうで）「被災された上に感染症で隔離されて、しんどいのに、必要なものを下の階に取りにいかないといけないのはかわいそうだと思う、看護師さんはどう思いますか?」と声をかけられ、こうした支援側の姿勢や気持ちが被災された方々には大きな力になるし、共に活動している医療チームの私たちの活力にもなると思いました。

一方、輪島市に勤務する女性職員の方が、発災後、避難所に配置されて2週間も子どもに会っていない、二次避難を一緒にするか、両親にこのまま子どもたちを預けるのか悩んでいる、と涙を流しながら話してくれました。被災県、被災地の「受援体制」は、まだ発展途上で、もっと進めるべきだと感じました。

活動後半は、全天候スペースにテントを張っている方々の環境整備を担当しました。青年海外協力協会ボランティアの方が、掃除をしている私に「看護師さんは掃除などしなくていいのではないかと声をかけてくれました。「衛生的で安全な生活環境を整えることは看護師の仕事のひとつ」と、我ながら「なかなかいい返事をした」（笑）と思いましたが、こうした「自分が必要と考える支援を実践できる」機会が与えられるのがAMDAの活動の魅力と考えます。この後、子どもさんを含む住民の方々が「私たちも手伝えますか?」と段ボールベッドを組んだり、クッションマットを敷いたりする作業を手伝ってくださり、活動中には、二次避難への期待や不安など住民の方々の思いを聞く機会にもなりました。住民の方は「いい運動になった」と、子どもたちからは「楽しかった」という声も聞かれました。避難されている皆さんと一緒に考え、意見を聞きながら生活環境を整え、一緒に小さなことを喜び、そんな体験にはいつもパワーをもらいます。

今回、熊本地震、西日本豪雨に続く3回目の参加でした。「なぜアムダの活動なのか」、いつも新しい発見があり、たくさん感じ、考えながら活動できる、そうした機会が与えられる活動だからだと振り返りました。



合同会議の後、他のNPOチームと情報交換



電源車が到着し、掃除に燃える!?

(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

薬剤師としての救護所活動を通して

国際緊急援助隊事務局 第1課 西村 亜希子



私とAMDAとの出会いは東日本大震災だった。大槌高校内の救護所に大阪府からの医療チームとして入ったがその時の統括がAMDAだった。その後AMDA緊急救援ネットワークに登録していたが、今回薬剤師の要請が出たため、私でなければ誰がやるのだという想いで参加を決心した。

被災地に入る前まではニーズは全く分からなかった。薬剤師として何が出来るのかを考え、臨機応変に対応した。活動した内容は大きく2つであった。1つ目は薬剤師として救護所内・避難所内での薬剤業務、外部との連携。2つ目は業務調整員としてクロノロジー、議事録作成、内外部での会議参加など。救護所活動という立場において強く感じたのは、内部・外部との情報共有と連携がいかに大切かということであった。

合間に避難所内の巡回も行い、こちらからの声掛けで戻ってくる新たな情報や気づきもあった。もっと避難者と関わる時間を持てたらよかった（巡回、お薬相談など）と心残りもあるが、救護所内での活動、外部との連携など、薬剤師としての活動はある程度できたかなと思う。薬剤師会との連携をうまくとれたのはよかったと思う。がもう少し深く掘り下げられれば良かった。

フェーズ・ニーズはどんどん変わっていくことも活動を通して学んだ。私たちが入る前は①環境整備や決めごとの整備が必要であったと思われる。そして私たちが入った期間はやっと②整理、状況把握（避難者リストなど）、声掛けのフェーズへ。今後は③快適性やりハビリ、心のケアへの介入、ボランティア受け入れに移る段階であった。

AMDAとカウンターパートの輪島市職員、大阪府職員、DCCAT、は上手く連携が取れていたため、避難所にとってより良い活動ができたのではないかと感じた。こまめな情報共有ができていたからではないかと思う。

1次避難所の輪島中学校での生活が快適になると2次避難に移る意識が低くなるのではとの意見もあったが、やはり今のこの生活を快適に過ごしていける環境をつくるのが私たちの役目ではないかと思った。

今回、AMDAから薬剤師として初めて参加させていただいた。NPOという立場での活動は初めてであったが、自分たちとカウンターパートとで問題抽出・連携し、活動を進めていく、そんな貴重な経験ができたと思う。

様々な立場で応援、助け合い、活動、連携、できることをする、できることはある、と活動を通して知ることができた。避難所の中だけでも、炊き出し（避難者有志・キッチンカー）、避難所管理（避難者）、お風呂（自衛隊）、トイレ（AMDA・保育士・環境整備）、給水（市・自衛隊）、通信（KDDI/DOCOMO）、物資供与（さまざま）、その仕分け（市・JOCA・さまざま）、段ボールベッド・ハウスの設営（名古屋大学）、散髪（避難者）、そして医療（さまざまな団体）、がお互いの立場で熱い思いでやっていた。そしてそれは別々の動きではなく連携となっていた。避難者の方たちにとってはどうだったのだろうか。それを検証し今後の活動にもつなげられたらと思う。輪島の方達にとって私たちの活動がより良い方向に向かっていけるお手伝いが出来ていたなら幸いだ。輪島の方達の我慢強い精神にこちらも力をもらえた。これからもどんな形であれ寄り添っていきたいと思う。

最後に、避難者の統括にあっていた代表の方は自身も避難者の身でありながらもリーダーシップをとられていたこと、更には、校長先生、教頭先生は、学生のこと、避難者のことで懸命にも冷静に動かれていた。その姿に私は一番こころを打たれた。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

活動から学んだこと

調整員 安森 泰謙

輪島市の輪島中学校の避難所で調整員としてお手伝いさせていただきました。初めて避難所の中の状態を体感し、避難所の運営の難しさや避難されている方の不安や辛さを肌で感じて参りました。何か被災者の方々のお役に立ちたいという気持ちで参加させて頂きましたが、もっと色々できたのではないかと、という気持ちが残りました。避難所をまとめていらっしゃる被災されたご夫婦の姿を見て、若し自分自身が被災してもお二人のように避難された方々の為に避難所の運営ができるだろうかと感じるくらいご尽力されていたのが印象的でした。この経験は、自分自身の防災意識を高めてくれました。被災された皆様のご健康と心の安穩並びに被災地の早期復興を祈っております。



第6次派遣チーム20240116-0125

湘南おおふなクリニック 医師 長谷川 太郎

1月17日到着時に鈴記・酒井先生から引き継ぎを受けたが、他の方々は西村ロジ以外初対面だった。500名近くの避難者がおられる状況で、感染性疾患まん延も予断を許さない状況であったため緊張したことを覚えています。

AMDA内の情報共有・会議進行について、皆の思いを傷つけないよう配慮していたが、避難所の状況が切迫しており、効率的な話し合いができなかった。立場上は現場管理者であったが、まずはAMDAスタッフとの信頼関係を構築することを最優先とした。

想定される避難者集約に関して困難状態を想定し、(1月20日に60名避難者増加+200名の新規受入)準備を行い、ダンボールハウス設置とともにペット避難者の移動・集約、感染症増大に備えた空き教室準備など実施した。全天候型運動場の壁面落下の危険性発覚・校舎内中央階段使用禁止などあり前述の準備は白紙になった。一つ一つ先読みせず、目の前のことをできる範囲で行っていく謙虚さが足りなかったと反省している。



活動内容

2024/1/17

- # TMAT (ふれあい健康センター)、ジャパンハート (輪島高校) との連携確認
- # 北川啓介教授へダンボールハウス運用相談 (たたき台の作成)

2024/1/18

- # WOTA設置場所調整
- # 全天候型広場への迂回アクセス経路の評価・確認 (正面出入り口使用中止の可能性)
- # ペット同伴避難者の所在状況確認
- # ふれあい健康センター (福祉避難所: COVID・認知症対応)・輪島高校 (子供支援 (NPO法人KATARiBA)・ペット避難・看護師主体の運営) への見学

2024/1/19

- # 避難所入退出の管理を依然として市民が実施→改善方向へ
- # 大阪府リエゾン対応 (危機管理室災害対策課・課長補佐3名): 要配慮者への生活支援について入浴に限らないことを説明 (排泄・食事など)
- # 全天候型運動場へのコルクマット設置開始 (ブルーシート側より順次・追加避難者受け入れに向けた準備・ペット同伴者避難区域の設定)
- # ペット同伴避難者家族との関係性づくりの開始

2024/1/20

- # 子どもの遊び場・勉強の場作りについて協議 (輪島市社協児童福祉課マツダ氏)
- # 徳島県保健師チームへの状況報告
- # 支援物資備蓄の確認@文化会館 下着220枚搬入

(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

- # 輪島市総務部ナカマエ部長（当避難所職員の上司）に要配慮者について報告をかねてご挨拶@市役所2階DMAT事務局前
- # 18:00全天候型広場壁面崩落の可能性が判明→10m避難者を移動・すべての引っ越し計画を中止し当該者へ説明
- # メイン階段・アリーナ側階段の使用を全面禁止（除く緊急時）
- # 避難所会議にて避難者の新規受け入れ中止を決定
- # 避難所縮小のため要配慮者をリストアップ（本人9名家族12名）し福祉避難所への搬送依頼の準備→内々に調整DMATへ連絡し下準備

2024/1/21

- # 7:00DMAT調整班が状況確認・避難所状況の説明→福祉避難所への搬送依頼（正式）→6名を搬送 3名は1/22自家用車で移動予定
- # 壁面落下の可能性があり、全天候型運動場避難者へ留まることのリスク程度の説明・場所変更の意向を確認
- # 福祉避難所ウミーデュソラ見学 オレンジクリニックにより医師1名常駐 35名程度受け入れ 介護職多数勤務

2024/1/22

- # 調整会議にて当避難所の状況説明・避難者の退避処置はしていない、全壊リスクはない・AMDA1/31医師終了予定をDMATへお伝えした

2024/1/23

- # キッズスペース（3階被服室）運用開始
- # DC-CAT代表山岸暁美氏と団体設立意義・DMAT展開地域の避難所状況・病院・社会福祉法人運営状況の共有

活動終了日2024年01月24日 朝の校内放送

「今日は雪景色です。

私たち北陸人の強みは、辛抱強く忍耐強いことです
雪のあとに咲く、市の花、
雪割草の咲く春を心待ちにして
一日一日を前向きに暮らしていきましょう。
AMDAの皆さん、大阪府の皆さん、
足元にお気をつけください。」

この経験を地元でも活かし、今後の活動に役立てなければならぬと感じています。AMDA支援者の方々、AMDA事務局の方々に感謝いたします。



輪島中学校での出会い

湘南鎌倉総合病院 医長 堀田 和子



この度の能登半島地震で被災された皆様へは心からお見舞いを申し上げます。

また被災地への支援活動への参加へのご許可をいただきありがとうございます

能登半島へ向かう初日の朝、澄み切った空と七尾湾の海に立ち上る幻想的な景色をみました。そのまま能登半島へ車を進めるにつれて、倒壊した建物が増えていきました。皆様が生活しておられた、大切な家屋の倒壊を目の当たりにし、とても心が痛みました。美しい海のお話をすると、地元の皆様が、能登は美しいところだ、きれいな時に来てほしかったと口をそろえておっしゃいました。

2024年1月17日に輪島中学校避難所へ到着し業務を開始しました。インフルエンザ、腸炎、COVIDへ感染した患者さんの病状把握から任務が始まりました。そして救護所の診療業務を行いました。

発災から約3週間が経過しようとしており急性期の疾患は減少傾向で、発熱や上気道症状が主でした。診療業務そのものは日常の病院での診療と大きく違いはありません。ですができるだけ丁寧な声をかけ、既往を聞き、基礎疾患が悪化していないかなども把握するように努めました。

普段は自動血圧計を使用しますが、聴診器で血圧を測り、救護所に来てくれた方の手をとって診察をさせていただきました。雑談の中でやっと、お話をしてくださる方もいます。実はてんかんを患っている、気分が落ち着かない、咳が周りの人にわるいのだ、食事は塩分が高く血圧が上がっている、そのような悩みをひとつずつお聞きしました。

救護所に来ていただける方は医師が医療介入できます。一方で高齢の方も多く避難されており、体育館、教室と寝所へ伺い声をかけると見過ごされていた医療ニーズが見えてきます。医者力は微力です。一緒に支援に入らせていただいた看護師さんたちが次々と困っていらっしゃる方を報告してくれました。

発災直後に受傷した傷をそのままにしている方、発災後の混乱のまま、入浴や着替えも進まない方、認知症があって周囲の方の力を借りて生活している方など救護所に来れない方など、実は避難所内には支援を必要とされている方が多くいらっしゃいました。

高齢の方だけではなくありません。避難所から仕事に行かなくてはならない若い方もいます。病院へ行けず、血圧が上がっていたり、片頭痛が悪化していたり声をかけなくてはみなさん我慢のままに日々をすごしておられました。

主に救護所での外来業務、被災された方のニーズ調査、環境整備を中心に1週間活動しました。トイレ介助や、手洗いなど衛生指導、感染者の隔離や診察、慣れない避難生活での慢性疾患から、ショックを受けた子供たちのケア、そして要配慮者のピックアップ、入浴介助、常用薬の災害

処方などを行いました。車中泊者の健康調査も行いました。

避難所の中学校は、体育館の一部の壁は倒壊の恐れがあり、築10年の校舎もコンクリートの壁が剝離するなど安全性も懸念されました。盛り土をしたグラウンドも液状化で地割れしていました。電気は市内でほぼ復旧していましたが、水道は給水、下水道が破綻しており現在もトイレは使用が不可能の状態です。復旧めどが立たない状況でした。それでも輪島市内で最大の避難所で、一時期は520人余りが避難されていました。

避難所は、輪島市職員、行政補助として大阪府職員、学校代表として教頭先生（校長は中学生の金沢への避難に同行して不在）、避難者代表者、医療班としてAMDAが参加し運営を行いました。

輪島市の職員さん自身も被災しており、現場は大変混乱していました。大阪府からの行政支援の方々のきめ細やかな配慮にも頭が下がりました。特にトイレ運営に行政の方々がここまで気を配ってくださるのかと驚きました。

発災から3週間でしたが、現場ではインフラがストップしていました。2次避難をすすめても、2次避難先も搬送先で決まるという何とも言えない不安定な状況下に住民の皆様はおかれていました。そしてその何割かは高齢者です。能登空港から金沢や、小松へ飛行機や、マイクロバスで移動しそれから避難所を割り当てられると聞き、多くの方はトイレを使えない状況でも輪島にいたいという思いが強いようでした。それは強く共感できることなのですが、『健康を守る』という観点からは、2次避難をしてほしい、せめてインフラ復旧までは温かい住居で過ごしてほしいと思いました。医療的な観点から、ご本人の思いに反して福祉避難所への避難を進めさせていただいた方もおりました。正しいことなど被災地ではないので、それが良かったのかどうか帰京してからも自問自答しています。

東北の震災時より、DPAT、介護ケア、薬剤師会など様々な団体が早期から連携されていました。精神科の先生方はお願いすれば翌日に来てくださいます。また、救護所とは別に薬剤師会が巡回し処方済ませてくれます。各団体が各避難所へ応援に来てくれ、避難所の評価が本部へ伝達されます。一方で福祉ケア、リハビリのJRAT、保健師会、市民ボランティア、子供のケアの活動が遅れており、医療で福祉をカバーする必要性がありました。

話しかけて、血圧計で血圧を測ってあげると、みなさん堰を切ったようにお話を始めます。がれきから救出された

ことなどを聞かせてくださいます。このような活動を通して避難所の住民の皆様とあいさつをし、声をかけるという日常のなかで忘れていた医師の初心を思い出したような気がいたしました。

とても印象的だったことが2つありました。

1つは住民代表の三谷さんの熱い思いです。ご自身も被災されながら、避難所の運営に心を尽くしていらっしゃいました。毎朝、7時に校内放送があります。『おはようございます』から、避難所の皆様への連絡事項が始まります。『避難所を住民で美しく保つことが輪島の復興につながる一歩だ』とスピーチされていました。

支援者の言葉ではなく、当事者の言葉で、能登の言葉で毎朝かわらぬお話をされていました。そのスピーチを聞き、自分自身が励まされました。

もう1つは、輪島市役所の職員さんと、学校の職員の皆様です。皆様、ご自身も被災されています。中には自宅には怖がっていらっしゃるお子さんがいらっしゃるのに、避難所の夜勤もこなしているかたがいました。教頭先生も避難所での寝泊まりをされているのに、いつもユーモアを忘れず支援者を笑顔にしてくださいました。

力強く日々を生きる皆様に、またお会いしたいと心から思いました。

不勉強でできなかったことや、もっとできたかもしれないことなどを考えながら、新幹線で帰路にきました。現場で活動できたことは、AMDAへ支援を行ってくださる方、事務局の皆様のご尽力によります。ありがとうございました。



被災地における感染症対策の重要性

岡山大学病院 感染症内科 准教授 萩谷 英大



私は岡山大学病院で主に感染症診療・感染制御を専門とした医療を実践している臨床医です。普段、災害とはあまり関係のない領域で活動していますが、これまでの大規模災害で発災後の感染症蔓延が一つの問題になっていることを認識していました。今回の能登半島地震では、これまでに培ってきた感染対策の知識・経験を生かせる可能性があると考え、AMDAの緊急救援活動に参加させていただきました。

AMDAの活動拠点となった輪島中学校は輪島地区最大の避難場所であり、約500人前後の被災者が教室や体育館に身を寄せている状況でした。1月という時期もありインフルエンザ・新型コロナウイルス感染症・ノロウイルスなど様々な感染症が流行しており、1日30名前後の救護所受診者の多くは、発熱・呼吸器症状・嘔吐下痢症状が主訴でした。私が派遣されるよりも前に現地活動をしていた医師・看護師の指示・指導のおかげで輪島中学校避難所内の感染対策の意識は高く、土足禁止・感染者のコホーティング・手指衛生／マスク着用の励行などが徹底されていました。また、排泄物の適切な処理も感染対策の上では重要な事項になりますが、下水道が使えない状況が続く中、被災者全員が適切な排泄物処理を行っていたことは避難所での感染症蔓延対策として非常に重要なことであったと感じています。後日談として、各所の避難所で感染症患者の報告が増加していた一方で、輪島中学校では比較的感染者の数が少なかったと聞いており、これらの基本的感染対策の実践が何よりも効果的であったと考えています。感染対策において自分自身が貢献できたことはあまりなかったかもしれま

せんが、被災地支援者への手指衛生・個人防護具の指導、AMDAスタッフ・被災者からの感染対策に関する質問への対応、ポータブル流水手洗い器の設置検討、施設内の足ふきマットの廃止などを挙げさせていただきます。

被災地における医療支援の在り方は多種多様ですが、三蜜環境（密閉・密集・密接）となりやすい避難所では感染症対策は重要案件の一つになります。災害関連死につながる可能性のある感染症蔓延を防止すべく、被災地における感染対策のさらなる実践と改善が期待されると考えています。



能登半島地震、忘れません！

E R ネットワーク 調整員 三宅 孝士

1月1日夕方、NHKの女性アナウンサーの緊迫感溢れる避難呼びかけの放送を聴いているうちに、今回は只事ではない、と怖くなったのを思い出します。

富山県高岡市から車で、大渋滞の中6時間かけ輪島市へ到着しました。

輪島市内へ入ると、「・・・街が壊れている。」と感じ、思考が止まりました。通り過ぎた後に存在がわかった点灯をやめた信号機、点灯はしているけど大きく傾いて車両に当たりそうになっている信号機や道路標識・道の真ん中で1m近く飛び出したマンホール・1階部分がつぶれ、道の半分以上に鎮座している、あまり壊れていない2階部分・破れたように波打っている道路・・・

今後、ライフラインの復旧はとても時間がかかると思われます。1日も早くライフラインが整い、被災した皆さんが復興のス



タートラインに立てることを願ってやみません。私は、決して今回の地震のことを忘れません。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

AMDAでの活動を終えて

組合立諏訪中央病院 医師 植木 一陽



能登半島地震による被災地への支援の募集がかかり、自分も新潟県出身であり、少しでも北陸の方の力になればと考え、志願した。

それ以前に現地入りした方々の尽力により、私が派遣された期間には輪島中学校の感染対策が形になっていた。私はAMDA活動開始後の診察記録をまとめたが、コロナ、インフルエンザ、胃腸炎の流行のピークは過ぎており、診察した回数は多くはなかった。当初十分に洗浄することができなかつたであろう創部の化膿は複数診察した。処方できる抗菌薬はサワシリン、フロモックス、クラビットの3種類と限られていた。

第一陣、第二陣で入られた方々の記録を見ると、ピークにあった当初の感染症の数や、受傷直後の外傷への対応など、診療に必要な物品もさらに揃わない中で対応され、体制を整えられたことに驚いた。

私が診た中には、震災前から患う病気への不安や、被災直後の生活の様子・思いを語り涙される方や、診察中に一言も話せない子もいた。北陸の厳しい冬に住まいを失い、避難所で段ボールベッドに毛布を敷き、プライバシーも保護されない環境でいつまで続くかわからない不安やストレスは、私にはとても想像できないものであった。

1/24まで滞在の予定であったが、大雪の予報で輪島から戻る道が通行止めになるとの情報があり、1/23の夜に急ぎ帰ることとなった。第四陣からはリハビリを含めた慢性期のサポートへ移行した。被災地の需要は日に日に変化していき、次の者への現状の伝達、適切な引き継ぎが重要であった。

苦しい状況にありながら温かく迎えて下さった能登の皆さん、派遣を許可して下さった病院、サポートして下さった関係者の方々へ、心から感謝申し上げます。



被災地での活動報告と感想

諏訪中央病院 医師 渡辺 慶介



場所：輪島中学校 避難所

内容：輪島中学校には470名程度が生活。発災からは既に20日程度が経過。保健室には19日ごろまでは1日30-50名程度が受診していたが、20日-23日は10-15名程度に減少。他方、我々が現地入り時点では介護や医療必要度の高い方が10-20名程度おられこの方達のケアや福祉避難所移送の手配、周辺病院への搬送などが我々が行った時期に多くの時間を割いた部分であった。

印象に残った被災者の方：

85歳女性：元々独居で財布以外何も持ち出せず、頼れる身内もなく、途方に暮れておられた。この方は「手の甲が痛い」と行って連日診察室を訪れる。逃げるときに擦りむいた傷がある。「手に包帯を巻いて欲しい」というので連日包帯を交換し話を聞く。話をすると気持ちが落ち着いて居住スペースに戻っていく。

65歳男性：前立腺がん・肺転移、化学療法中。副作用によると思われる四肢のピランがひどい状態。最初に見たときは広範に皮向け、出血もあり、巻きつけたティッシュが血餅で固まったような状態であった。洗うこともできておらず（断水のため）感染創に移行することが懸念された。連

日洗浄とワセリン塗布をおこなった。継続的な周辺医療機関でのケアが望ましかったが輪島病院は対応難しく、最終的に金沢大学の泌尿器科が入院で診てくれることになった。**感じたこと・考えたこと：**

我々のフェーズではすでにシステムがある程度できており、数的に言えば多くの方の健康維持がまずまずできるようになったが、そこからこぼれ落ちる方達がおられ、少数ながらお役に立てたという実感があった。いつも以上に丁寧に話を聞く、なるべく慌ただしくせずにゆっくり動いてくださいという長谷川太郎先生の指導がありそれを心がけました。今回初めての被災地での医療支援参加であった。行く前の緊張はその時は自覚なかったが、振り返ってみて大きかった。無事に戻って来られて本当によかった。同行者の植木先生や伊藤看護師をはじめ、当院やAMDAの方に助けをいただき心から感謝しております。

能登半島地震緊急支援活動報告

諏訪中央病院 看護主任 伊藤 さち子



私は、長野県災害支援ナースに登録をしていましたが、なかなか災害現場で活動する機会がなく今回初めて参加しました。活動を通して感じたことは、災害時の看護の本質は平時と変わらないが、限られる資源の中で看護を実践するため方法などには創意工夫が必要だと感じました。震災後は医療のニーズも増大しているが資源（人、物、水など）ニーズは低下している。だからこそ同じ活動する仲間のチーム力を発揮するためには、否定するのではなくお互いを認めあい、より蜜にコミュニケーションをとることの大切さも学びました。

長野県に戻ってからも、毎日石川県の方々はどうしているのかなと思いつつ生活をしています。現地で活動できなくても、こちらからでも石川県を支えられるような活動をしていきたいです。

今回災害支援活動に参加させていただき、本当にありがとうございました。



医療支援に参加する葛藤、参加しない葛藤、そして感謝

湘南藤沢心臓血管クリニック 医師 安西 兼丈

この度は、能登半島地震において被災されました皆様に、衷心よりお悔やみを申し上げるとともに、お見舞い申し上げます。令和6年1月1日、自宅で娘と過ごしていました。テレビを見ていると地震発生および、津波警報、輪島朝市の映像が流れ、どんどん被害が拡大していくのを、何もできずに歯を食いしばりながら言葉にならない声を発して観ていました。

今までの災害支援に携わってきたことのある私は、被害がすくなく願う気持ちと、すぐにでも現地に行きたい気持ちがあったのですが、私の仕事の調整や活動手段を頭の中で巡らせながら重くのし掛かり、ただただ、悔しい気持ちで待ち尽くす日が続きました。

2週間が過ぎ、DMATの任務完了を間近に来るのを感じながら、これからは、予防できる災害関連死を防ぐことが重要であることを頭に入れながら、AMDAの災害医療支援にタイミングよく応募しました。医師になったのだから、できることをしたい気持ちと、自分のクリニックにかかりつけの患者様のことが気に掛かり、手術で待っている患者さんにお電話をし、ご迷惑をかけることをお伝えし、手術日の延期をしてもらいました。患者様にありがたい気持ちでいっぱいでした。

日本全国から集まったAMDAのチームが発災直後から活動され、私のmissionは、第8陣の責任医師として、輪島中学校にいる避難者さんの災害関連死の予防対策の構築、健康管理を行うことでした。

現地で活動していた責任医師と申し送りをして活動を開始しました。AMDAのスタッフは、みな同じ気持ちで参加



しておりすぐ、ワンチームで活動することができました。参加しているスタッフの意識の高さ、能力には非常に驚かされました。避難所を巡回しているときに、ある看護師は、「先生、ちょっとあの方の横にいる方、顔色悪いんですけど。。。」「先生、先ほど巡回して声をかけた方、1人で会話もしておらず孤立して、周りとのコミュニケーションが取れていないんです。」と、報告してくれました。その方は、発災以前より行方不明になっていた方だったことがわかり、看護師さんのおかげで、すこしずつ、周囲の方とお話することができるようになり、被災者さんに起こりうる孤立感などをすくっておりました。

AMDAは、全国から、熱い思いを秘めたスタッフが集まり、機動力があり、専門性も持ち合わせ、何より、避難者さんに寄り添える優しいスタッフの専門集団であり、一緒に活動できて、温かい気持ちになりました。

私は、避難者さんと出会うことで、医師になったときの初心を思い返すことができ、やさしい気持ちで日々の診療に役立てることができております。

今後も、被災されました皆様が、早く復興できるように何かお役に立てることを考え続けたいと思います。

輪島中学校での支援報告

諏訪中央病院 医師 中村 考志



1月23日から1月27日にかけて、医師2名、看護師1名、作業療法士1名、臨床工学技士5名での支援活動を行なった。これまでの活動で、避難所環境は格段に整備され、流行感染症の発症数、隔離者数は激減していた。しかし、先発隊からの申し送りでは、下水機能が回復されておらず、衣類は使い捨て、排泄は水洗トイレが使用できない状態、食事は基本的に自衛隊から支給のおにぎり、味噌汁、副菜やインスタント食品、防災食が続いていた。食事は塩分過多となり野菜や果物などカリウムの多い食品の不足、就寝環境が整わない状況での不眠、プライベート空間がないことによる精神的ストレス、仕事や役割を喪失したことによる活動性低下がみられ、災害関連循環器疾患の発症リスクが上昇していた。また、地域としての保険診療がほとんど再開しておらず、避難所に保健師が駐在できていない現状で、地域での連携は進んでいない状況であった。我々の支援機関では避難者診療、感染対策に加え、災害関連循環器疾患への介入、リハビリ導入を行うことを目標として支援を開始した。

災害関連循環器疾患のリスク評価として、保健室診療所受診者、要配慮者に対して災害時循環器予防（DCAP：Disaster CArdivascular Prevention）リスクスコアを評価し、ハイリスク者を同定した。介入としてはDCAP予防スコアの8項目（睡眠の改善、運動の維持、良質な食事、体重の維持、感染症予防、血栓予防、薬の継続、血圧管理）に基づいて、ハイリスク者へのチラシを配布し必要な項目を伝えるハイリスクアプローチと、避難所へ自動血圧測定器を導入し避難者自身での血圧測定習慣の推進、良質な食事のためにカリウム食（野菜ジュース、トマトジュース、牛乳など）の周知・導入、体重の維持のため体重計の設置、薬の継続のため、地域の病院との連携のためのチラシでの情報提供などの避難所全体へのポピュレーションアプローチの介入を行った。

その他JRAT（Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team）の支援が当避難所では始まっていなかったため、運動の維持の目的もあるリハビリの導入を行った。リハビリは個別、集団を対象を分けて介入を行なった。個別リハビリは、対象者のスクリーニングを災害時におけるリハビリテーショントリアージを用い、対象者を選別した。これにより、当避難所は福祉避難所ではなく、介護度が高い避難者はほとんどおらず、要介護最大2の比較的ADLは自立した75歳以上の後期高齢者が1割ほどの、老若男女幅広い避難者が生活をしており、個別リハビリの長期的なニーズはないことが判明した。また、リハビリとしての専門的介入ではなく、腰痛・肩こり・転倒予防・快眠・便秘体操など個別に行うことができる体操・ストレッチを紹介、説明し、運動の習慣を推進した。集団リハビリは、毎日避難所で行われているラジオ体操への参加者が少ないことが問題となっていたため、医療者が進める体操として当院リハビリ考案の体操を避難所でも行った。

これらの活動の評価としては、支援者チームからは、避難所生活、支援の上で意識すべきことが明確になったと意見があった。後発隊からは血圧測定をしている避難者の様子や血圧相談が増加していること、我々が導入した体操を避難者が行っていることなどの報告を受けた。1ヶ月の任務支援完了時には、住民の方々から、AMDA、諏訪中央病院スタッフに対して感謝の言葉をいただいた。具体的なアウトカムは評価することはできなかったが、上記を良好な結果として考えた。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

被災地支援を通じて

諏訪中央病院 医師 星野 諒

諏訪中央病院医師の星野諒と申します。

私は2024年1月23日から1月27日までの5日間、輪島市での被災地支援に参加させて頂きました。

輪島中学校にて、避難所の感染症対策継続に加え、発災から約3週間経過していたことから災害高血圧、深部静脈血栓症などの亜急性期の合併症予防に取り組みました。同じチームで病院のリハビリスタッフが参加しており、避難者の方々と体を動かす機会を作ることも目標としました。

しかし避難所は普段接している患者さんが相手ではなく、余儀なく辛い生活を強いられている避難者の方々と接する場所でした。

また、実際に見る自然災害による被害は、人間の力ではどうすることもできないように感じられるほどでした。

個人的に災害支援の経験がなく知識や技量不足であったという面はありますが、医師という専門職としてできることはさらに限られていると感じられました。しかしそこには辛い中懸命に生活をしている方々がたくさんいらっしゃり、避難所の方々とお話をすることや、避難所の掃除やダン

ボールハウスの組み立てなどできることを行い、一時的にでも少しでも辛さの緩和につながればという思いでした。

短期間で何ができたのかは分かりませんが、これまで災害支援の経験がない私に参加する機会を与えて下さったAMDA、病院の方々をはじめ周囲の方々に感謝を申し上げます。

なかなか復興が進まない状態で現地での生活をされている方、慣れない別の環境に移っての生活を送っている方、ご家族が被災された方などまだ災害は続いている中で活動を離れてしまい大変心苦しく思います。

まずは今の身の回りの仕事をしっかり行いながら、被災地のことは忘れず、今後も間接的にでも支援に参加させて頂きたいと思います。

AMDAでの活動と能登復興に向けて

AMDA緊急救援ネットワーク 調整員兼看護師 菅原 久美子

AMDA緊急救援ネットワークの一員として、これまでに国内外の被災地で活動させていただきましたが、能登は思い入れのある地であったため、今回参加させていただけたことに大変感謝しております。

能登の避難所では、状況が目まぐるしく変化し、次から次へと起こる問題を解決していく必要がありました。過去の他の被災地より様々な分野からの支援団体が増えており、それら多職種を巻き込みながら業務を分散し、協力してより良い支援を進められるように心がけました。AMDAの活動として避難所の環境整備から医療支援まで様々な活動をさせていただきましたが、感染症拡大を防ぎ、災害関連死予防の活動を引き継げたことは、大きな成果だったのではと感じます。

メンタル面の支援では十分に対応できたかはわかりませんが、平常心を保っているように見える避難者に声をかければ、涙を流して発災時の恐怖や不安や心配事を話す方や、「泣いてしまうと負けだから絶対に泣かない」と言いながら溢れる想いを話される方もいました。みんな辛い気持ちを表に出さないように我慢して避難生活を送っているのだと気づき、時間が許す限り一人一人の想いを傾聴するように心がけました。限られた支援活動の中でしたが、「話を聞いてくれるだけでも本当に有り難い」と言われたことが救いです。



輪島朝市周辺は、地震や火災で伝統的な歴史ある街並みが崩れ焼け野原となり、そこで先祖代々から続いていた輪島の方々の営みを思うと、とても切なくて涙が止まりません。奥能登の被害は深刻でインフラの復興も時間がかかり、輪島中学校では、発災から2ヶ月以上経っても300人以上が避難されている状況です。AMDAの緊急医療支援は任務完了となりましたが、AMDAの活動で培った経験をベースとして、3月は輪島市内で個人的に炊き出しの支援を行ないました。引き続き被災地のニーズに合わせた活動を、輪島そして能登が復興するまで続けていきたいと思っています。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

輪島中学校避難所での支援報告 諏訪中央病院 看護師 中山 秀明



諏訪中央病院 第4陣として、支援活動に参加した。先陣からの情報や災害フェーズから想定される医療ニーズを総合的に検討し、リハビリの導入を大きな目標として現地入りした。避難所の環境は先陣までの活動により予想以上に整備されていた。避難者の診療システムや感染対策はすでに構築され、医療的な介入が必要な避難者数は減少している状況にあった。そこで派遣期間中、チームと協力して看護師として主に下記の活動を行った。

- 保健室/救護所の診療補助：既に避難所の診療システムは構築されており、診療システムの継続を実施した。
- 創傷処置：創傷処置の継続、処置が継続できていない被災者の発見と対応、安静時間増加に伴う褥瘡発生に対する処置と家族への処置指導を実施した。
- 要配慮者の抽出：避難所ラウンドにて日数経過に伴い発生する要配慮者の抽出を行った。
- リハビリトリアージ：ラウンド実施時、要配慮者抽出と同時にリハビリが必要な避難者を確認し、林OTに評価への介入を依頼した。また、ラウンド時に健康相談を受けた。
- 入浴介助：入浴設備は構造上安全に入浴することが困難な避難者が数名いた為、入浴介助が必要な避難者の入浴介助を行なった。

- 災害高血圧の診療体制構築、運用、啓蒙活動：現場では多くの避難者に高血圧が確認された。血圧計の設置、積極的な内服処方体制、内服処方内容をかかりつけ医へ繋ぐためのカード作成、注意喚起ポスター等の作成を行なった。また、避難食の状況を確認し栄養面でのアプローチについても検討した。
- リハビリ、体操の啓蒙：廃用予防やDVT予防等、避難所生活で起こり得る身体不調や災害関連死の総合的なアプローチとして当院リハビリ考案の体操実施をアリーナで実施。また、林OTを中心に紙面による体操の解説を作成し、避難所に設置した。

活動期間中、治療が必要な避難者の増加も見られず、日々変わる災害フェーズに合わせて必要な介入を検討・実施することができた。これも、発災直後から適切な対応を的確に実施してきた先陣の活動があったこと、また被災された輪島の皆様の前向きで、他者を思いやる姿勢が輪島中学校避難所の安全な運営につながっていたと強く実感しています。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

コミュニケーション

AMDA緊急救援ネットワーク 看護師兼調整員 東 千織



地震発生から4週目、看護師兼調整員として参加させていただきました。現地へ向かうまでの道りは、倒壊した家やビル、飛び出たマンホールなど、地震直後のまま、まるで時間が止まったかのような状態でした。震災の悲惨さと、復興のための人手が足りていないことに痛み震える胸を抑えながら活動場所の輪島中学校に到着しました。

到着してすぐに活動は始まりました。活動拠点である救護所に入り、前任者から引継ぎを得て活動を開始。同時に約500人の避難者がいる3棟の建物の巡回で避難者に声をかけをしながらニーズの把握、検討、対応を行いました。はじめ多くの住民は「大丈夫です」と口数が少なかったものの、徐々にお互いの顔が見慣れてくると、巡回している時に自ら気になることを報告しに来てくれることも出てくるようになりました。「あのおばあちゃん、高齢で独り身だから気にかけてあげて欲しい」、「あのおじいちゃん、体調がイマイチのようなので声をかけてあげて欲しい」といった周囲を気遣う声や、支援者同士でもメンタルサポートの必要性を気遣う声、安否確認がとれておらず行方不明届けが出ている方の発見につながったケース等々、ニーズの種類は多岐に及びました。お互いに必要な情報が必要な所へ届きやすくなり、顔の見えるコミュニケーションの大切さを実感しました。

災害派遣の経験豊富な医師のリーダーシップのもと、『災害時循環器疾患の予防・管理に関するガイドライン』に沿って、睡眠の改善、運動の維持、良質な食事、体重の維持、感染症予防、血栓予防、薬の継続、血圧管理の8項目に焦点を当て、チーム協働で改善に努めました。いつか、わたしたちAMDAがこの避難所での任務を完了した後も避難所の皆さんが自分たちで継続していけるような工夫を試みるなかで、ガイドライン導入には住民や支援者の方々との協働が必要不可欠でした。活動を行う中で様々なハードルが次々に出てきましたが、都度、共に模索しながら歩むために一つ一つ会話を積み重ねていきました。

今回の派遣では、目の前のニーズへの対応、そして自分たちがいなくなった後のことを見越した対応を同時進行で行いましたが、どちらもコミュニケーションの大切さをひしひしと感じながらの活動だったと振り返ります。被災者の皆さんたちは、今でも現地で戦っています。被災地の一日も早い復興を心よりお祈りするとともに、自分にできることを引き続き考えていきたいと思えます。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

心にとめたもの

AMDA 看護師 藤本 智子



今回自分にできることがあるならば、看護師として医療面から命だけでなく生活を支えることが少しでもできたらという思いがあったのはもちろんですが、災害医療支援の経験豊富なメンバーと一緒することで多くの学びや経験を得られると思い、またいつ自分の身に起こるかわからない災害は支援という立場でなく被災者の立場になる可能性もあり、現場を自分の目で見て感じることで今後どんな立場になっても動けるようになりたいという思いから活動に参加しました。

私が活動したのは震災発生から3週間後の支援のため、徐々に通常の医療体制に移行する時期であり、被災者の方たちが、環境が大きく違う中でも日常生活が送れるように医療面から支援する必要がありました。被災者同士や支援者間など人間関係に問題が生じることも出始める中、基本的に感謝の言葉をいただくことが多く皆さんご自身の事も大変なのに本当にあたたかい方ばかりでした。けれど遠慮して言えない気持ちもまだまだあるのだと思い、病院ではなく生活している場なので入り込みすぎないようにしながらも巡回を多くしコミュニケーションを図ることにしました。今必要としているニーズが何であるのかを得たり、話すことでストレスを逃がしてあげることや別の支援に引き継ぐために必要な情報を得ることにもつながると思い、実践してきました。急性期とはまた違う医療の関わり方で、正解が何であるのか分かりませんが、環境が大きく違う中でも徐々に日常の生活が送れるよう、予防できることは予防し、万が一の時はつながる医療体制、その必要性を大きく実感した1週間でした。防げるはずの病気やケガ、QOLの低下にどう関わっていかねばいけないのか考えさせられる活動となりました。

災害支援の急性期に焦点がいきがちで今回のフェーズでの関わりがどういったものなのか知識として乏しく、自発的なアプローチがはじめからできず、言われて気付いて行う事が多かったです。今回は経験豊富なスタッフと一緒できていたため、動き方であったり事の進め方であったり、導いて下さったから私は活動できたとも言えます。災害はないにこしたことはありませんが、いつかはまた起こりうるのだと思います。ニーズに合わせた支援を現場に入ったらすぐに対応し行動にうつせるようこの経験を学びにし今後活かしていこうと思います。

そして何よりも皆さんが笑顔で過ごせる日が多くあることを願います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

1次避難所でのリハビリテーション

諏訪中央病院 作業療法士 林 耕平



1/24よりリハビリとしての活動を開始しました。まずは前日までにAMDAメンバーにピックアップしていただいた方の評価に加え、学校内を巡回し福祉避難所への移動対象者やリハビリ対象者の搜索を行いました。個別でのリハビリ対象者はそれほどいらっしゃいませんでした。しかし今までは問題がなかった方でも長期化する避難所生活によって腰痛や便秘、災害高血圧の方が多く見られていました。また発災から1ヶ月後程度から心血管イベント（脳卒中や心不全、突然死）が増加すると教えて頂きました。災害高血圧のリスク後和として体重の維持や良質な食事などの8項目があります。その中で運動の維持や睡眠の改善にリハビリとして関われるのではないと考えました。運動機会増加の為他のスタッフに協力いただき集団体操の実施、運動の重要性の啓蒙活動などを行いました。

災害支援活動は永続的ではない為、自分自身やコミュニティの中で健康を維持していくことが必要になります。個人個人でのニーズに合わせて選んでいただけるよう紙面での体操の配布ブースを設置しました。

今回発災後より3週間後に支援させていただきました。自治体も立ち上がり運営が進んでいる中で1次避難所としてのリハビリ介入はかなり短期間であると感じました。その中でリハビリとしてはやはり災害症候群の予防とコンディショニングの促しが重要であると感じました。専門職として個別に対応したい気持ちもありましたが、継続的に実施できないものは適応ではないと痛感しました。自分達がなくなった後の事もいつも以上に考えさせられました。

今回本当に貴重な機会をいただきありがとうございました。まだまだ復興までに時間がかかり、被災された方々は大変だと思います。1日でも早く日常が戻ることを心よりお祈り申し上げます。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

輪島への想い

AMDA副理事長 難波 妙



能登地震の発災は、元日だったということに加え、地理的な制約も加わり、被災地の状況は不明瞭なままでしたが、これまでの災害支援の経験から、大きな被害がでていることは、想像に難くなく、AMDAは即座に調整員を2名送ることを決定しました。

1月2日、現場に向かった大西調整員、林調整員の無事の到着を願いつつ、AMDAが大規模災害に備えた連携協定を結んでいる諏訪中央病院に協力を要請。新年早々にもかかわらず、迅速に対応していただきました。

緊急救援活動の後方支援を担うAMDA本部での調整業務は、まるで一本、一本の糸を織りなすように慎重に進められます。情報と可能性という糸を手繰り寄せるこのプロセスにはかなりの緊張状態を伴います。どこか一つでも糸の掛け違いがあると、活動全体のスピードが落ちてしまうばかりではなく、派遣者を危険にさらすことにもなりかねません。真冬の能登半島、雪が崩れた道路を覆いました。寒さが被災者、派遣者の体力を奪います。昼夜を問わず、地元からの情報を頼りに、派遣人数、交通手段、宿泊施設の調整を進め、関係者との連携を緊密に行いました。そのような中で、諏訪中央病院ならびにAMDA ERネットワークから参加された方、お一人、お一人に、「被災者の力になりたい」という強い想いがあったからこそ、1か月、感染症との戦いであった支援活動を共に乗り切ることができたと、心底、実感しています。この活動の背景には、派遣元の病院や職員の支え、そして派遣者家族の思いもあったことを、後に関係者のお話から伺い知ることができました。同時に、日本青年会議所医療部会、岡山市市民病院など、様々な医療機関からの協力とともにAMDAの事務所にも多くのご支援が届けられました。

「能登で最大震度7の地震」の第一報に接したとき、私の頭には、熊本地震がよみがえってきました。2016年、私のふるさと熊本は、震度7の地震に2回も見舞われました。その時、ふるさとが「被災地」としてのみ語られ、惨状ばかりが報道されることがとても悲しく、そのたびに、私は、「もっとうつくしい景色があるのに」と心の中で叫んでいました。

1月中旬から半月、私も輪島での活動に参加しました。輪島朝市の火災現場に立った時、そこには、人々の息遣いや暮らしの痕跡さえも焼き尽くされ、ただ、鼻を突く何とも言えない匂いだけが残っていました。しかし、そんな中で私は輪島中学校での活動の合間に、美しい輪島の風景を探し、写真に収めることで少しずつ現地の人々の息吹を感じるようになりました。復興に向かう兆しをわずかに感じた矢先、9月にまたもや豪雨災害が輪島を襲いました。「なぜまた輪島なのか」と誰しもが思ったことでしょう。これは、誰にも、何処にも「想定外」はもはや存在しないことを思い知らせました。

AMDAの活動理念である、「困ったときはお互い様」——それは「想定外」に直面した時こそ、その真価が問われると思います。輪島が、美しい能登半島が、再び日常を取り戻すために、AMDAができることをこれからも探し続けたいと思います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

輪島中学校災害派遣活動

金沢大学 国際学類 2年 学生 竹原 旺佑



私は災害派遣活動というものはこの輪島中学校への派遣が人生で初めてでした。調整員として現地に入り、私の主な仕事は金沢―輪島間で車を用いての人、物資の移動や現地での医師、看護師さんたちのサポート、避難をされている方の問題解決を行うことでした。派遣期間は決して長いものではありませんでしたが、活動で得た経験は私に大きな影響を与えるものとなりました。災害支援活動は一個人、一団体だけでは行うことはできません。実際私が派遣された輪島中学校の避難所では私たちAMDAの他に大阪府の派遣救護職員、全国各地からの自衛隊の方達、他にも多くの有志の方達の支援が集まっていました。しかしそれらの支援が同じ方向を向かなければ支援活動はうまく機能しません。今回、輪島中学校での支援は大きく機能していました、それは各支援団体のリーダーが毎日、数回にわたるミー

ティングを行い、改善を施してきた賜物だったと思います。私が避難をされている方から頂いた要望がすぐにミーティングで挙げられ、次の日から要望が実現していたことがありました。そのような迅速で、的確な修正が避難所の方達にとって大きな安心を与えていたのではないかと思います。

最後にはなりますが今回の活動にあたり共に支援活動にあたったAMDAスタッフ、大阪府職員、自衛隊員、その他支援をしてくださいました方達に深く感謝申し上げます。



寄り添うということ

諏訪中央病院 総合診療科医長 胡田 健一郎



1月27日～1月31日で活動を行いました。私が現地に伺った時は物資やインフラの整備もわずかながら進んでおりましたが、それでもまったく十分とは言えず、苦しい状況が相変わらず続いていました。色々準備をしていきましたが実際に目の当たりにしないとわからなかったことが多く、広い視野で全体を見据えつつ、ミクロにも見落としがないかをまなざすことも必要でした。

自分がやりたいことではなく、求められていることをしないといけない。一方で管理と支援のバランスの中で、過度な自立の促しも暴力になりうるというところに、心身両面に寄り添うことの難しさを改めて痛感しました。

引き続き力になれることがないか模索しつつ、今回自らが得たことを身の回りで役に立てるように、活動を進めていきます。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

活動を通し多くを学び経験し書ききれないほど感謝しています

諏訪中央病院 統括診療部長 兼 東洋医学科部長 永田 豊



活動時期：

参加させていただいた時期は、「AMDAの任務完了がいつになるか、どのように医療支援を引き継ぐか」を検討している時期でした。感染症症例数が減り、フレイル予防や災害時高血圧への対応を継続するフェーズでした。避難者の方も避難所生活に慣れ、受診の際も比較的落ち着いてお話しされていた印象でした。

活動内容：

- ① **要配慮者のPick Up：**AMDAスタッフの常駐がなくなる時期に備えて、要配慮者情報をDMAT巡回診療チームや本部に申し送りました。実際に体育館に独りで過ごされていた統合失調症の方は、行政の保健師に報告したことを機に、担当ケアマネジャーと再会させることができました。看護師の方々のご尽力で次第にご本人とのコミュニケーションが増えたことが印象に残っております。その方に自衛隊風呂への入浴を促した結果、寒い体育館と熱い風呂の寒暖差もあってか、のぼせて浴室で意識レベルが低下し救急要請の寸前までいたったことが最も大きなイベントでした。
- ② **段ボールハウスの医学的メリットについてアナウンス：**ダンボールハウスへの移住促進のため避難所会議から依頼を受けました。チーム内で協議し、「隔離による感染対策や体温調整、睡眠の質向上、プライバシー確保」の面で有意義であると、貼り紙でアナウンスしました。
- ③ **避難所支援食材の改善：**輪島市担当者に進言しました。

多職種協働：

AMDAのチーム内でも、避難所の運営の中でも有効に機能していたと思われ、その中で自分自身も業務を分担させていただいたことを嬉しく思っております。

初の医療支援：

諏訪中央病院のメンバーは、第1陣以外は多くのメンバーが初の参加でありました。避難所運営会議や、輪島市の対策本部会議などに参加できたことは今後の支援活動につながります。各種の体操や段ボールハウスの作成を通じて、避難者や支援者の多くの方と過ごせた事も、医療支援に参加することが初めてであった自分自身の経験になりました。自分たちの過ごし方（寝袋での睡眠、保存食、少ない入浴など）は想定内でしたが、教職員の苦勞（連続勤務・発熱欠勤）、輪島市職員や支援に来た行政職員や各種支援者の疲弊は、想像以上でした。

今後の目標：

病院内で報告会を開催しながら振り返り、次回の支援につなげます。
温かく迎えて下さったAMDAの皆様、支援して下さいる方々に感謝申し上げます。

避難所でも可能な範囲で家族の関係を継続したい

組合立諏訪中央病院 副技術部長兼栄養科長兼経営戦略室副室長 杉田 勇



理学療法士として参加させていただきました。私が派遣させていただいた時は、命の危険も過ぎ、感染症の管理も行えるようになっていた時期となっていました。避難所では、不活動の避難者も多くいて、自主的にできる運動と一緒にを行いました。中でも、便通トラブルを抱えている方が多くいて、便通によいと考えた運動は大変好評で、一緒に運動して良かったと感じました。

避難所の中で、福祉避難所に移るべきかと議論になった高齢の女性がいました。ご本人・娘さん夫婦・お孫さんとも一緒にいたいとの気持ちが大変強かったです。ベッドの環境を少しでも動きやすいように調整し、トイレまでの移動時の手のつなぎ方などをお伝えすることで、ご本人もご家族も安心してこの場で避難生活を家族と一緒に過ごせると喜んでおられました。家族が離れ離れになることなく、

避難生活を継続することとなりました。避難所でもリハビリ専門職の役割は重要と感じました。大変良い経験ができたことに感謝です。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

発災から1ヶ月という時間

あん訪問看護ステーション 管理者 長谷川 舞



発災からおよそ1か月が経過しようとしている期間に、支援活動に参加しました。輪島市を訪れたのは、初めてのことでした。静かな波音と潮の匂いの中に、トラックや緊急車両、重機の作業音が重なるも、多くの建物が被害の傷跡をそのまま残していました。

避難所となった輪島中学校でも、多くの方が避難生活を継続しており自宅の片づけに手を付けられない状態が続いていました。「正月でご馳走があったけどもう腐ってるな。このまま避難所で暮らしたい。」「家がどうなっているか、数回見たきりです。あとはもう見れないなって。」「高齢者が多いからね。家を建て直すかどうか家族で話したけど、もう建てる気力が出ないね。」と何人かの方がお話をされました。同時に「こうやって生きている。皆様のおかげで生活ができています。前を向いていきたい。」と静かに力強くお話をしていました。発災から支援者が繋いできたバトンを受け取り、さらに託していく活動は、課題も多く残りました。しかし、声を掛け合いながら粘り強く生活している方々の姿に、私自身も勇気づけられました。発災から1ヶ月

という月日は、戦いであったと話す方がいました。そして、まだ癒えぬ中その戦いが継続しています。避難生活から復興へ、また一緒に隣で力を併せていきたいと思います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

輪島の関係者の皆様、お元気でしょうか

長崎大学生命医科学域保健学系 看護師・助産師 神徳 備子



私の被災地での活動は東日本大震災から始まりましたが、AMDAでの活動は、熊本地震、沖縄県の新型コロナウイルス感染症支援に続いて今回が3回目となりました。日程調整が必要でありいつも発災から1ヶ月以降に入ることになりますが、今回も同様に発災から30日目の現地入りでした。羽田空港から金沢駅まで約4時間、そこから在来線に乗り換え、元気な高校生の集団に混ざりながら2時間かけて七尾駅へ。七尾駅でお迎えの車と合流し約2時間。唯一輪島に繋がる道路は、多くの支援関連の車が走り、景色は徐々に震災の影響が見えるようになってきました。輪島市街に到着した時はすでに辺りは暗くなっており、遠い遠い、閉ざされた世界に来たように感じました。活動中は輪島中学校の敷地外に出ることがほぼなく、また活動終了後の帰りも早朝の薄暗い時間に出発したため、行き車から見たほんの少しの景色だけが私の直接見ることができた能登でした。それでも、不思議な世界に入る感覚と自然に対する畏敬の念を抱かずにはいられない雰囲気があるところはあり、気が引き締まる思いで向かったことは今でも忘れられません。

活動先の輪島中学校では、震災から数週間以内の急性期への対応や公衆衛生・感染症への迅速な対応をしていただいた前任までのAMDA派遣チームの皆様から大切なバトンを引き継ぎ、震災後1ヶ月というまた新たな視点での活動へと展開していくこととなりました。

活動中は、ここでは伝えきれないほど様々なエピソードがありました。認知症の方、精神疾患の方、夫婦や親子の関係性、子どもたちの心、被災者としての思い、避難所運営側の思い…。被災から1ヶ月という時期は、避難所内でお互いのことが色々と分かる時期であり、ストレスが体調面に少しずつ出てくる時期でもあります。また、たとえば毎日飲んでいた薬が手に入らずとも仕方ないと様子を見ていた方に不調が出てくる時期でもあります。様々な言葉と言葉にならない思いを受け止めることが必要な時期だと考えています。話したい、気づいてほしい、という思いの方の気持ちに寄り添い、身体の不調や集団での不和が生じるほどの症状が出る前に心理的なフォローを行い早期発見と予防に務める・・・そのためには少し内側に入る必要があるのにも関わらず、活動としては徐々に離れ撤退を進めていく必要がある、という難しい時期でもあります。

そして今回最大の特徴だと感じていることとして、輪島の皆さんの強さがありました。外部の人に甘えてはいけなく、自分たちでなんとかしなければいけない、という気持ちがとても強いように感じ、短期の現地入りでは見えづらい部分が非常に多くありました。その強みが輪島全体を支え、そして私たち支援者側をも支えてくれていた感覚すらあります。外部支援撤退の時期もメンタルヘルスのサポートが必要な時期も、恐らく現地入りしていない外部の方々

が想定しているよりもはるかに遅れて必要となることが予想され、外部支援の調整の難しさも感じました。

派遣中は、帰ることができる安全な場所がある自分が被災地に入る、ということがどのような意味を持つのか、避難所でAMDAの青いジャケットを着て活動することが何を意味するのか、常に考えながらの作業となります。今回も、派遣期間中の1分1秒を本当に貴重な時間として使わせていただきました。限られたほんのわずかな任期の中で自分のできることをただひたすら行い次へ紡ぐ…。正直な気持ちとしてはもっともっとできることがあったと思います、ただ、その時その場で出来る最大限のことに向き合うことは出来たのではないかと感じています。最終的には医師1名、看護師1名体制となりましたが、今回ご一緒させていただいたAMDAメンバーの皆様のお力にて、どんな時も方向性を見失わずにすべきことに集中できました。少数精鋭のチームに入らせていただきいつも大変恐縮ですが、今回も本当に最高のメンバーでした。即席なのに抜群のチームワークで活動できたのは、何よりロジの皆さんの存在がとてもとても大きいと思っています。

今、この感想は活動を終えてからだいぶ月日が経ってから書いておりますが、輪島を離れた時の寂しさは今でも心の中に残っています。輪島の皆さんがお話しして下さった内容、写真で教えて下さった震災前後の街並みが私の中の輪島のほとんどを占めています。たくさんの輪島の皆さんからいただいた「元気になった輪島を絶対見に来て」という言葉は、今も私の中で輪島との繋がりを保ってくれている気がします。

まだまだ残る震災の余波、度重なる自然災害に心が張り裂けそうになります。動けるときは、動きたい。現地に行かなくても出来ることはたくさんあり、自分に出来ることなどあるのだろうかとも思います。ただ、毎度のことですが、「行くことに意義がある」、それだけが自分の中で確信となっていることも事実です。全ての出会いと経験を、必ず、次の活動へと繋げていきます。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

AMDAの一員として「任務完了」を経験して
 組合立諏訪中央病院 医師（乳腺・血管外科部長） 貝塚 真知子



2月3日に任務完了、4日に片付け、5日に帰路に着くということが既に決まっていた状況で輪島に入らせていただきました。諏訪中央病院からの参加はこの期間においては1人で、使命感と不安の中で到着したものの、他のチームメンバーの温かさ、今までのチームが作り上げてくださっていた住民や行政との信頼関係の中で、全力で職務に就くことができました。

今回のチームの目標は、輪島中学校の住民の医療面における安心感を次の他の団体に繋げることにありました。そのために前のチームが奔走して道筋を立ててくださっていましたが、日々変わる市対策本部下の支援体制の中で、4日以降医療者の常駐は無くなり、巡回診療のみとなる可能性があるとの話になりました。「震災前でできていたことは住民自身でさせ、甘えさせない支援を」との方針に、まだ被災後1ヶ月しか経っていないのにと憤りを覚えつつ、どうすればそれでも住民の安心をできるだけ確保できるか、日替わりで来る巡回診療チームにどう住民の情報を引き継ぐか

をメンバーみんなで検討し、行政と相談し仕組みを再構築しました。

最後の3日の調整会議で本部から「今から常駐Nsを派遣します」と言われた時には本部に、また本部を動かしてくれた他のメンバーの熱意に感謝の涙が出ました。

5日間の経験では得たものばかりで、第一にはAMDAの一員として活動できたことそのもの、次いで輪島で起きていることは決してこの地域固有の問題ではなく、現在の日本の地方の縮図であり、高齢化の進む地域で暮らす者として決して他人事ではないという気付きでありました。ありがとうございました。今後ともよろしくお祈いします。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

優しさと相互扶助

調整員 平野 晃

実際に被災地に行かせて頂き、メディアで見聞きする情報だけではわからない甚大な被害の全貌を目の当たりにして、自然災害の厳しさ、怖さをあらためて感じました。私自身初めての調整員業務でしたが、自分のすべきことがあまりわからず、終始受動的な行動になってしまったことが反省点です。今後活動に参加させていただく機会があれば、より広い視野での判断と、積極的な行動を心がけ、他スタッフの業務が円滑に進むようにサポートできたらと思います。

また自分自身に余裕がなく、避難者の方々とあまり交流をもてなかったのが心残りの一つではありますが、住民代表として避難所運営にご尽力されていたあるご夫婦との出会いはとても貴重なものでした。ご夫婦の御自宅は全壊してしまい、計り知れないほどの辛い状況にもかかわらず、『私たちにできることは何でもさせてもらおう』、『今こそ輪島の皆さんに恩返しをしたい』と奮闘されているお姿にとっても感動いたしました。

また、これは以前熊本の支援に参加した時にも感じたことですが、AMDАの活動は単に医療を提供する支援ではなく、避難者の生活背景を把握し、一人ひとりの『心』に寄



り添うことだとあらためてわかりました。

また活動に参加された方々は、家族や職場に無理を言って、何とか家庭や仕事の都合をつけて来られている。その熱意に感銘しました。最後一緒に活動を終えた看護師の方が言いました。『一度でも被災地の支援に入ってその現状を知ってしまうと、次にどこかで被災があったら居ても立っても居られないんです』と。被災を我が事と行って行動できるその姿に強く心を打たれました。被災がないことが最も良いことですが、そんな考えを持った人が世の中に増えていけば、紛争や争いのない平和な世界になると感じました。

この度の地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、今後も自分にできる支援をさせていただきたいと思います。

第四部： 各活動へのメッセージ

1. 支援活動に参加して下さった派遣者からのメッセージ

【地震復興支援活動に参加して下さった方からのメッセージ】

IPU・環太平洋大学サッカー部 坂手 雅斗コーチ

まず能登半島地震で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。私自身が輪島中学校復興支援ボランティア活動に参加させていただき、感じたことを述べさせていただきます。

輪島市に行かせていただき、被災地はまだまだ復興といえるほどの状態ではないと感じました。道路横には倒壊した家、下敷きになっている車、高速道路は崩れて通行できないなどが当たり前のように目の前に広がっていました。テレビで間接的にしか見たことのない景色を実際に観ると、衝撃を受けました。その大変な中自分たちがボランティアに参加させていただき、中学校の復興を手伝わせていただいたことに感謝しております。

実際に活動としては各教室の復興作業(机や椅子の運搬)、輪島中学校のサッカー部さんとの合同練習をさせていただきました。この地道な一步一步が復興へと繋がっていくと

思います。微力ではあると思いますが、少しでも復興の一步の力になれば嬉しく思います。

災害というのは起きないことが一番ですが、何かあった際はまたAMDАさんの活動で、お役に立てることがあれば参加させていただきたいと思っております。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

IPU・環太平洋大学4年 井ノ口 彰梧

ずっと被災地での復興支援を行いたいと考えていました。そんな時に能登半島でボランティアをやりませんかというお話を聞いて迷わず行きますと答えました。実際に行ってみると道路は崩れていたり、割れていたり爪痕が残っていました。中学校のグラウンドは半分が地割れして崩れて

いました。その中でもできることをやって先生たちからの「ありがとう」さらに、中学校のサッカー部の子どもたちとサッカーをすることで笑顔を見ることができたのでやってよかったと思いました。

IPU・環太平洋大学4年 宇田 尚立

このたび、輪島中学校の復興支援活動に参加し、地域住民や学校関係者の皆さまと共に貴重な時間を過ごすことができました。活動内容としては、校舎の清掃や修繕作業、地域の伝統文化を取り入れたイベントの企画・運営、生徒との交流会を行いました。これらの取り組みを通じて、地域の方々との絆を再確認するとともに、未来を担う生徒たちに元気を届けることができたと感じています。

特に印象的だったのは、地域住民の皆さまの温かい支援と生徒たちの笑顔でした。復興への道りは決して平坦ではありませんが、地元の方々の「この場所を守り続けた

い」という強い思いに触れるたびに、私たち自身も大きな力をもらいました。また、生徒たちが真剣に未来を語る姿からは、この地域が持つ可能性と希望を感じました。今回の活動を通じて、支援とは一方的なものではなく、互いに学び合い、励まし合うものであると改めて実感しました。

今後も継続的な支援が必要であり、私たち一人ひとりができることを考え、行動する重要性を感じています。輪島中学校とその地域の未来が明るいものであることを心から願い、今回の報告を終わります。

IPU・環太平洋大学4年 友成 翼

AMDA能登半島のボランティア活動リーダーさせて頂いた友成翼です。

今回はこのような貴重な機会を経験させて頂き本当にたくさんの方に感謝しています。能登半島ボランティアに参加してもらい、まだまだ復旧途中の所はたくさんありこれからまだ多くの人の協力がなくてまだ先は長いなと思いました。だけど自分自身も何か被災地の方への力になれるように1番に誰よりも動き活動に取り組む志で行いました。まだ復旧まで長い道りになるとは思いますが、現地の多くの方にもお世話になり言葉で言うのは簡単ですが心の底から早く能登の綺麗な街に戻る事を願っています。ありがとうございました。



IPU・環太平洋大学4年 綱島 基起

能登半島地震の支援ボランティアに参加して、被災地の状況を実際に目にし、支援の重要性を強く感じました。現地の方々が不安や疲れを抱えながらも前向きに生活を再建しようと努力している姿に感銘を受け、自分が微力ながらも役に立てることにやりがいを感じました。また、チームワークの大切さを再確認し、現地の方々と協力し合うことで、少しでも早く復興出来るよう努めました。この経験を通じて、人と人とのつながりの力を実感し、今後も地域社会への貢献を続けていきたいと思いました。



IPU・環太平洋大学3年 松瀬 大河

テレビや新聞で日々報道されており、震災にあった地域のことはよく分かっているつもりで望んだボランティアでした。しかし、石川県的高速道路に入った時点で、私がテレビ越しに見ていたのはほんの1部に過ぎなかったんだと痛感しました。ひび割れた地面、崩れた土砂、もう使えないであろうグラウンド。全てに衝撃を受けました。子どもたちが普段通りに生活できていたらもっと色んなことができ、かけがえのない子供時代をもっと華やかなものできていただろうと考え、胸が苦しくなりました。

私は少しでも楽しい時間にしてもらおうと一緒にサッ

カーをすることを心待ちにしていました。グラウンドに向かったら、想像もつかない辛い震災を乗り越えた後とは分からないほど、楽しそうにサッカーをする子どもたちの姿がありました。サッカーを通じて助け合って、乗り越えている姿を見て、私の方が元気を貰ったといっても過言ではないと思います。今回の活動に参加させて頂き、初めての経験や体験が多くありました。日本は災害大国で、またここで、災害があるとは予測できません。そんな中で、1人でも多くの力になれる人になりたいと感じました。

IPU・環太平洋大学3年 塚越 柊太

被災地支援活動に参加させていただき、輪島中学校サッカー部の子どもたちや地域の皆さんと共に作業をすることで、改めて災害の影響と地域のつながりの大切さを実感しました。特に、校内清掃や机・椅子の運びなど、日常の環境を整える作業を一緒に行う中で、子どもたちの明るさや前向きな姿勢に励まされました。また、彼らが未来に向かって進もうとする姿勢に感動し、少しでもその力になれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

災害はいつ誰に降りかかるか分からないものであり、支え合いの精神が何よりも重要だと感じます。復興には長い

道のりがあるかもしれませんが、被災地の皆さんが少しでも安心して過ごせる日が早く訪れることを願っています。そして、また同じ地域で力を合わせられる機会があれば嬉しく思います。



IPU・環太平洋大学3年 富山 慈温

私は輪島中学校の復興支援活動に参加させて頂いて、被害の大きさに衝撃を受けました。能登半島地震が発生してから時間が経過しているのにも関わらず、校庭の一部が崖から崩れており、地面が割れているのを見ました。また、街ではいまだにビルなどの建物が倒れているままでした。そして、私たちは輪島中学校で校舎内の掃除や運搬作業を

手伝ったり、サッカー部の生徒と一緒にサッカーをしたりして楽しみました。私たちがしたことは些細なことではありますが、少しでも助けになっていた、子どもたちに元気を与えることができたら嬉しいです。まだまだ復興に時間がかかると思いますが、気持ちで負けないように元気に過ごして欲しいです。

IPU・環太平洋大学2年 江上 竜汰

僕が今回この能登半島ボランティア活動に参加してみて感じたことは、まず能登半島に行く道が崩れていたり割れていたりしたのを見て鳥肌がたちました。今までそのようなのを見たことがなくテレビやニュースでは見たことがあるけれど自分の目で見るのは初めてでとてもビックリしました。また、輪島中学校復興支援活動では、学校へ行きたいのに行けない小学生の教室作りで、机などを運んだのですが、もっときつい作業でも良かったなと思っていました。でもその作業が終わって先生方からお礼を言われて、皆さんの笑顔を見られて、やって良かったと思いました。その作業が終わりサッカー部のみんなとサッカーをしたのですがみんなサッカーをやっている時がいちばん楽しそうで逆

に自分が元気をもらいました。すごく楽しかったです。被災地が少しでも早く復興してくれることを願っています。



IPU・環太平洋大学2年 森江 颯斗

まずは輪島中学校復興支援活動に参加させていただき誠にありがとうございました。私は岡山県出身で能登半島災害はニュースでしか知らず実際に赴いてみて、荒れた道路や倒壊したままのビルなど、半年程経っていても復興するのが困難だということが分かりました。私たちが宿泊した

ホテルもまだ断水している部屋や壁が少し崩れている所があったりして多くの人が寝食をする場所なのに、そこに住む人たちの悲しみや苦しみが伝わってくるようでした。私は大した助力は出来ませんでした。IPUサッカー部の一部員として一日も早い再建をお祈り致します。

IPU・環太平洋大学1年 平野 剛輝

能登の復興に協力しました。

IPU・環太平洋大学1年 森口 修都

今回の石川の能登半島ボランティアでは、学校の机や椅子重い荷物を運び、先生達だけでは丸々1日かかっていた所を、自分達の力で3時間くらいで協力して終わらすことができました。大変でしたが、このような活動が今後の人生に繋がって行けばいいなと思いました。また、石川の能

登半島の中学生の子供達とサッカーで触れ合う事ができました。このような自分達の行動が被災地の子供達の勇気付けになればいいなと思います。また、このような被災地に直接行くようなボランティアがあれば積極的に参加させていただきたいと思います。

IPU・環太平洋大学1年 内山 陽太

能登半島の現状を自分の目で確かめたい、困っている人の助けになりたいと思い、この能登半島のボランティアに参加しました。実際に能登半島に行くと潰れたままの家屋が残っており地面がひび割れたままの箇所ばかりでとても驚きました。そこで学校の掃除や地元中学生と一緒に

サッカーをしたりしました。自分たちが元気を与えなければいけないのに、逆に自分たちが元気を貰えるくらい輪島中学校の生徒はサッカーを楽しんでいました。今の自分たちがどれだけ幸せな環境にいるのかを改めて感じさせてくれるボランティアになりました。

IPU・環太平洋大学1年 杉森 心相

僕は、この能登半島ボランティアを通して色々なことを感じました。僕は石川県出身なので、この活動募集があった時に絶対行こうと思っていました。現地に着いてみて、一番最初に地面が隆起していたり、陥没していたり、家が崩れていたり、僕が聞いていたよりも酷い状態でした。

自分たちは輪島中学校の椅子、机を運んで掃除をし、サッカー部の子達とサッカーをしました。グラウンドは半分陥没していて、半面だけ使える状態でした。はやく復興して当たり前の生活に戻って欲しいと思います。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

IPU・環太平洋大学1年 中村 勇太

今回能登半島輪島中学校復興ボランティアに参加させて頂きとても貴重な経験ができました。私自身、熊本出身で熊本地震を小学校6年生の時に経験し、小さいながらもとても怖いと思ったし本当に死を考えるような状況になったことがあった。そんな中で支えになったのは、避難所で食料支給をして下さるボランティアの方々や自衛隊、また民間で参加して下さった企業などの周囲の人々の力で時間をかけ、建物も精神面もゆっくり建て直すことができました。今回、能登半島のボランティアの募集がサッカー部で行われた時に、熊本地震の経験が頭をよぎりすぐに参加したいと思ったし、私が力になって支える立場になりたいと思った。現地では中学校の中で椅子、机などの運搬作業や清掃などを中心に活動を行った。学校内の壁や床にヒビが入っていて地震の怖さを改めて実感した。また、輪島中学校の生徒とサッカーをして一緒に楽しむことができた。最初は少し大人し

く、心を開いてくれているのか不安だったが、自分から積極的に話しかけ気持ちを打ち明けることでサッカーを通してコミュニケーションをとることができた。最後の写真撮影では生徒達の楽しそうな笑顔を見ることができ、楽しんでもらえて良かったと思ったと同時に自分が力になれる実感も沸いた。

輪島全体、また能登半島全体が完全に復興するまでにこれからかなりの時間がかかると思うが、自分が被災者の力になったことが1番嬉しかったし、被災者の立場から支援する立場に変わったことで相手の心を思いやる力がつき、より他者視点になって考えることができるようになったと感じた。輪島中学校、輪島市のいち早い復興と精神面での安定が確立するように願って、今ある状況に感謝しこれからの学業や体育会部活動に精進していきたい。

IPU・環太平洋大学1年 松本 風馬

AMDA輪島中学校復興支援ボランティアに参加してたくさん初めての経験をさせていただきました。ボランティア活動自体はやったことがあるのですが、災害系のボランティア活動は初めてで不安な気持ちがありました。まず、目的地に向かう道は近づいていくごとに、道路はがたがたで建物は崩壊しているところがたくさんあり、地震の爪痕というのは深くついているのだなと感じました。また、輪島中学校に着いて周囲を見渡すとグラウンドがほとんど崩壊し、崖のようになっていました。そこで自分たちがグラウンドを広く使えること、サッカーができることは当たり前ではないことを改めて感じさせられました。ボランティ

ア活動での作業は主に中学校の机や椅子の運搬をしたり、掃除などをしたり、最後に中学生と一緒にサッカーをやらせていただきました。被災しても少しでもうまくやりたいという思いでプレーしている中学生の姿に尊敬すると共に、中学生と仲良くサッカーができて良かったです。これからはよりたくさんの方のボランティアに関わり、少しでも様々な地域で貢献していきたいと思いました。



IPU・環太平洋大学1年 松村 直紀

私は、今回能登半島の復旧作業で石川県の輪島市にある輪島中学校の方にボランティアで参加させていただきました。まずこの活動に参加した経緯としては、所属している部活動で参加する人を募集していたのでこれは自分にとって必ずプラスになると思い、自ら参加させていただきました。ボランティアとして行った作業としては、被災にあい、避難所となった輪島中学校の掃除や地元の子供たちがまた学校に行けるように教室の準備として机やイスを運ぶ作業、そして輪島中学校のサッカー部との交流を行いました。正直なところもっとなにか力になりたい、まだまだ出来ることはやりたいという気持ちになりました。今回のボランティア活動で特に印象に残っていることは、サッカーを通して被災された子供たちの顔が笑顔でいっぱいだったことです。その笑顔を見ると自分としてもやりがいや達成感などを感じました。今回の活動のおかげで、支え合う大切さや助け

合う大切さなどが深く学びました。この学びはこれからの人生でも絶対生かせると思うので、今回の経験を無駄にせず自分の成長に繋げたいと思います。このような経験をさせていただきありがとうございました。そして被災された方々が1日でも早く元の生活に戻ることを願っています。

IPU・環太平洋大学1年 橋本 翔人

私は今回の輪島中学校復興支援活動に参加して、改めて今の環境が当たり前ではないんだと強く感じました。地震があり酷いことは知ってはいましたが、テレビで見ると実際の目で見るとでは震災の恐ろしさというのは全く違い、心が痛くなるような場面を目にしました。ですが、地域の方に話した際には、とてもショックを受けてはいましたが、すぐ前向きな姿勢でこれからの復旧作業に取り掛かりたいと言っていた言葉が今でも忘れないくらい響きました。テレビで見ていると、大変そうだな、やばいね、みたいな感じで見ていましたが、焼け野原になった地域、崩れ落ちた家などが今になってもあり続けている現状をみ

ると何か少しでもできることはないのかななど考えるようになりました。中学校で一緒にサッカーをしました、コートが半分が崩れ落ちている状況にも関わらず、端っこの狭いコートで楽しそうにサッカーをしている子供達が印象的でした。自分たちには照明もあり、芝生のグラウンドで毎日サッカーができていたことは当たり前ではなく、とても贅沢なことなんだと感じました。こういった中々ない経験を今回させてもらって、今後の人生にとても欠かせない経験になったと思いました。大学生活でも活かされることは活かしていきたいと思います。

IPU・環太平洋大学1年 若尾 以心

能登半島でのボランティア活動を終えて、地域の人々の温かさと強さに深く感動しました。震災後の復興支援に携わる中で、住民の皆さんが見せる不屈の精神と共に、地域コミュニティのつながりの大切さを実感しました。どんなに困難な状況でも助け合い、支え合う姿勢があふれており、

自分が少しでもその一助となれたことに大きな意味を感じました。また、自然災害の恐ろしさとともに、それに立ち向かう人々の力強さに勇気づけられました。今後も地域復興の一端を担いたいと感じ、学んだことを胸に、次のステップへとつなげていきたいと思っています。

IPU・環太平洋大学1年 大江 凌駕

今回のAMDAさんの輪島中学校復興支援活動に参加して思ったことは、私の地元である阪神・淡路大震災もすごい被害だったのかなと改めて思いました。この地震で祖母は片目を失い、今はほぼ見えない状態で暮らしています。普通だった暮らしが急に奪われてしまうという苦しみや悲しみもすごく今回のボランティア活動で感じるものがありました。

たところ。絶句でした。後から聞いた話で家の中にいた人がなくなってお父さんだけが生き残っているという話を聞いて心がキュッと引き締まる思いにやられました。普通に楽しく暮らしていた日々がほんの一瞬で無くなってしまふのは、体験した人にしかわからない思いがあると思います。これから地震が起きた時に自分がどこに逃げてどう対処して行くべきか考えようと改めて思いました。

1番印象に残っているのは家の上にビルが横たわって



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

第四部： 各活動へのメッセージ

1. 支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ

【豪雨被災者緊急支援活動に参加してくださった派遣者からのメッセージ】

能登豪雨災害支援活動を通して

朝日医療大学 教務部長 山口 大輔



今回、能登豪雨災害で被災した石川県輪島市で、AMDAの一員として老人保健施設のスタッフを対象とした鍼灸施術による支援者支援活動に参加しました。2024年元日に地震で被災した地域が、復興もままならないまま水害にて被災したことを知り、何かお手伝いできることがないかと思っていたところ、AMDAの調整員から災害支援活動の打診があり、参加を決めました。

岡山から支援物資を積んだ車で輪島市に入りました。輪島市が近づくにしたがって、川沿いに数多くの土砂崩れがあり、河川にかかる橋の欄干や橋脚に引っかかったままの流木がたくさんあり、災害の甚大さを目の当たりにすると、被災された方々が苦勞されながら生活している姿が想起されました。

輪島市での最初の活動場所は、施設の周辺が土砂で埋まり、車一台がようやく通れる分だけ土砂が除けられた状況でした。その施設スタッフは、自身の家も被災しながら、施設利用者を支えるため、平時と変わらぬ対応をしている姿には心打たれるものがありました。

鍼灸ケアでは、スタッフの話をしっかりと聞き、様々な愁訴に対し施術を行いました。腰痛や肩こり、膝痛など筋骨格系の症状から、胃痛、胃もたれ・胸やけ、便秘など消化器系の症状、寝つきが悪い、眠れない、イライラする、気分が落ち込むなどの心の問題が、豪雨災害の後から自覚し始めたこと、多くのスタッフが訴えていました。とても大きなストレス状態にあることが考えられました。鍼灸施

術では、各スタッフの訴えに合わせて、しっかりと時間を取り、丁寧な施術を行うよう心がけました。鍼灸施術を受けたスタッフからは、「心も体も軽くなりました」や「明日からの業務も頑張れそうです」など前向きな言葉を聞くことができ、災害支援活動で少しでも被災者の役に立つことができ、大きなやりがいを感じました。

実際の輪島市の現状を肌で感じ、発災から復興までは長い道のりなると思いました。そして、まだまだ支援が必要だと感じました。輪島市そして奥能登地域の一日も早い復興を祈っています。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

第四部：

各活動へのメッセージ

2.緊急支援活動を支えてくださった団体からのメッセージ

今だからこそ出来ることがあるはず！「子どもの健康と幸せ」を守るぞ！

医療法人高杉会 高杉こどもクリニック/一般社団法人アースチルドレン
理事長/共同代表 高杉 尚志

元日の能登半島地震、それに加えて9月の能登半島豪雨、「なぜまた能登半島なのか！？」と、私自身がやり切れなさを感じています。犠牲になられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に一刻も早く平穏無事な生活が戻ることを願っています。

私達は、岡山県総社市で、「子どもの健康と幸せの実現」をめざして医療法人高杉会高杉こどもクリニックと一般社団法人アースチルドレンで地域活動を行っています。同じ地球上で、同じ日本の国内で生きる私たち、場所は違えどその土地に根付き、自然環境と共に生き、子どもを育

てている気持ちは変わらないと考えています。「子どもの健康と幸せの実現」をめざして、今だからこそ出来ることがあるはず！「子どもの健康と幸せを守るぞ！」との思いです。

直接お手伝いには行けておりませんが、我々の想いを支援として届け、伝えてくれているAMDAの皆さまに感謝いたします。有り難うございます。



能登半島被災地支援への取り組み

NPO法人ネットワーク『地球村』 代表 高木 善之

令和6年初頭に発生した能登半島地震、そして9月の豪雨により、能登半島や周辺地域は甚大な被害を受け、多くの方々が生活の基盤を失い、不安な日々を過ごされています。『地球村』では、皆さまからの温かいご支援を力に、医療支援を続けるパートナー団体AMDAが、地震発生直後から現地入りした医師や看護師と共に、被災者の健康を守るために尽力する活動を支援してまいりました。また、『地球村』自身も被害が大きな市への義援金支援を行い、さらに『地球村』の仲間が継続的に食料や衣類の提供、災害ごみの搬出・運搬など、多岐にわたる支援活動を展開しています。

AMDAの献身的な活動は現地の皆さまにとって大きな支

えであり、その姿勢は私たち『地球村』にとっても大きな励みです。『地球村』は、被災地の皆さまが少しでも安心して日常を取り戻せるよう、引き続き支援を続けてまいります。今後も、被災地の一日も早い復興を支えるために、『地球村』とAMDAは共に手を携え、平和で安心できる未来を築くための活動を続けてまいりたいと願っております。



能登半島地震で被災された皆さまへ

株式会社オカイ・メディカル・ファーマシー 柴倉 典子

令和6年能登半島地震、さらには9月の大雨被害で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。地震からの復旧半ばだった能登半島を襲った豪雨には、ただただ恨めしい気持ちでいっぱいです。

大変な状況だと思いますが、どうか前を向いて頑張ってください。私たちには想像もつかないくらいつらい思いをされていると思うと心が痛みます。ご自身のお体を大切にしてください。

当社では被災者の皆さまと被災地の復興にお役立ただけだと、わずかですが寄付をさせていただきました。

過去の災害と同様に風化を心配する声も聞かれますが、私たちはこれからも変わらずに応援しています。私たちの思いが少しでも力になればと願っております。

皆さまに穏やかな日常が一日も早く戻りますようお願い申し上げます。

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

能登半島の復興を願って

株式会社廣榮堂 代表取締役 武田 浩一

2024年1月1日に発生した能登半島地震、そして同年9月21日に記録的な大雨がもたらしたさらなる被害に対し、心よりお見舞い申し上げます。度重なる自然災害により、皆様の生活が大きく脅かされ、多くの不安やご苦労を抱えながら日々を過ごされていることと存じます。このような厳しい状況の中、皆様が一日も早く平穏で安心した日常を取り戻されることを、心からお祈り申し上げます。

弊社では、微力ながら義援金と岡山の名物「きびだんご」を従業員の心を込めた直筆の手紙と共にお届けさせていただきました。少しでも皆様のお力になればという思いを込め、一つひとつのきびだんごに願いを託しております。被災された皆様が、きびだんごで少しでも笑顔を取り

戻し、元気を出していただければと切に願っております。

これらは、被災地支援に尽力されているAMDA様のご協力を通じてお届けすることができました。AMDA様による迅速かつ誠実な支援活動には、深い敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。日々の献身的な活動に支えられていることに、私たちも励まされております。

最後になりますが、能登半島の皆様がこの困難を乗り越え、少しでも早く元の生活を取り戻される日が訪れることを信じ、これからも支援を続けてまいります。どうかお身体を大切にされ、一日も早い復興をお祈りしております。

AMDA発進、即始動

黒住教・RNN 教主・事務局長 黒住 宗道

岡山発信の諸宗教による協働連合体RNN（人道援助宗教NGOネットワーク）にとって、1996年の発足以来の掛け替えのないパートナーがAMDAです。毎月欠かさず開催しているRNN定例会で、「AMDAが現地入りした場合」を緊急救援募金活動開始（メンバーへの通知）と定めて以来（1998/7/24開催の定例会にて決定）、「AMDA発進＝RNN始動」です。

今年元日の地震発生直後からの緊急支援活動に際しても、速やかに教団本部や教会、寺院に募金箱が設置されて、寄せられた尊い浄財を活用していただきました。被災地の復興の遅れに心を痛めながら募金を継続していた9月21日の豪雨災害に際して、支援活動のさらなる展開の報を受け、あらためて勧募を呼び掛けさせていただいています。

黒住教教主という宗教者として、毎朝の日の出を拝む日拝に始まる祈りが日々の基本ですが、「祈りに基づく行動と行動を伴う祈り」を、仲間たちとともに一層つとめてまいります。被災された方々のご本復を心より祈念します。



命と希望を守る献身的な医療支援

新日本宗教団体連合会 理事長 石倉 寿一

元日に発生した能登半島地震に際し、アムダ（AMDA）は迅速かつ献身的な医療支援活動を展開されました。避難所に派遣されたスタッフの方々が、現地で感染症の拡大を防ぐために尽力し、数多くの命を守ってくださったことに対し、心から敬意を表します。特に、高齢者や子どもたちの間でノロウイルスやインフルエンザ、新型コロナウイルスが広がる中、持ち込まれた薬や衛生管理の徹底により、避難所の生活環境が大幅に改善されたとの報告を伺っています。

現場での医療活動は、物理的なケアを超えて、被災者の皆さまに安心感と希望をもたらされます。中学校の避難所で段ボールベッドを設置し、感染者を隔離するスペースを整備したうえで、24時間体制で医療支援を提供するなど、アムダの献身的な活動が被災者の心の支えとなったことで

しょう。これらの支援は、ただ身体を休める場を提供するだけでなく、心の安らぎを与えるものだったと感じています。

さらに、9月21日に能登半島を襲った豪雨被害に対しても、アムダはすぐさま動き、鍼灸支援活動を通じて被災者の心身のケアに尽力されています。

佐藤拓史代表が記者会見で話された「困っている人がいたら『何かお手伝いできることはありませんか？』と声をかけるのは当たり前。そして、私たちの場合、それが医療です」というお言葉に感銘を受けました。

今後もアムダの皆さまが世界中で行われる人道支援活動を通じて、多くの命を救い、人々の心に寄り添う活動を続けていかれることを心より祈念しております。

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

能登をおもう

高知県黒潮町 情報防災課長 村越 淳

令和6年能登半島地震及び9月の記録的な大雨によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災されたみなさまに心からお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を心よりお祈りいたします。

また、AMDAの迅速かつ被災地に寄り添った活動にたいして敬意を表します。

黒潮町としましても、能登半島地震の支援として避難所支援や被災家屋調査、DWATとして計7名の職員を派遣し、物資としましても、黒潮町缶詰製作所が製造している8大アレルギー不使用の缶詰等を支援させていただきました。

能登半島地震からやっと復旧・復興の光が見え始めた矢

先には記録的豪雨にみまわれ、能登のみなさまの「心が折れた」との声も報道で目にします。

そんな中、いち早く現地入りし、ニーズ調査を行い活動するAMDAは被災者の希望の光になっていることと思います。

南海トラフ地震や台風の常襲地帯に位置する黒潮町としましても、奥能登を中心とする大きな災害は決して「対岸の火事」ではなく「未来の私たちの姿」ととらえ、AMDAのみなさまのお力添えをいただきながら災害への備えを進めてまいります。

引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

新体制になってすぐ 素晴らしい活動でした

長泉寺ボランティア基金会 真言宗御室派 薬園山 長泉寺 住職 宮本 龍門

令和6年能登半島地震において被災されたすべての皆様に衷心よりお見舞いを申し上げますとともに、AMDA様に対し深く敬意を申し上げます。

当方寺院の檀信徒総代会が運営する同基金会は、仏道の実践として「人々の善意の連鎖」を目指し、平成16年9月に発足しました。当方境内に設置している募金箱に檀信徒が日々心を寄せ、募金を集めています。発足より現在まで、RNN人道援助宗教NGOネットワークのメンバーとして国内外の災害救援、並びにウクライナ危機などにおける難民支援に対して寄付を行うほか、東日本大震災や西日本豪雨災害などでは被災現場に赴いてAMDA活動の補佐も実施してまいりました。

今回の能登半島地震におきましても、被災地を心配する多くの檀信徒が心を寄せて下さり、微力ながらAMDA様の活動に寄与することができました。

その救援活動につきましては、被災現場が石川県能登半島という地理・地形的な特殊性を持つ地域であること、さ

らには感染症流行の恐れなど、様々な事情がある中で素晴らしい救援活動をなされたと存じます。特に、菅波茂前理事長から佐藤拓史新理事長へ交代してから国内最初の激甚災害であったにも関わらず、発災直後から約一カ月にわたってAMDA本部と被災地スタッフが強く連携し、現地のニーズを把握しながら迅速かつ確かな医療チームが随時派遣され、避難所における衛生管理や感染症対応、避難者の診療や健康維持に関して多大なる貢献があったことは、佐藤理事長、難波妙副理事長をはじめ、AMDAスタッフ皆様を心から称えたいと思う次第でございます。

一方で、詳記はしませんが、被災地が人口減、過疎化が進む地域であるがゆえの課題も残ったかと存じます。今回、なぜ未だに発災時の景色のままという場所が多いのか？今後、国内で予想される災害においても同様の問題と向き合うことになるかと存じます。引き続き、協力してまいりましょう。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

これからも心強いパートナーとして

生活協同組合おかやまコープ 理事長 田中 照周

今年の元日ほど驚きと心配な年明けは経験がありません。言うまでも無く令和6年能登半島地震の発災によるものです。

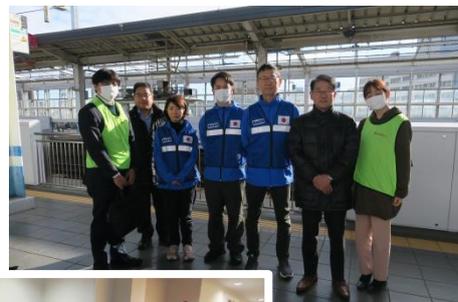
TVで放映される被災地の様子は正月の気分を瞬時に一変させましたし、被災地生協の友人から寄せられるLINEのメッセージには、無事の知らせは程々に直ちに対策会議を始める旨の連絡があり、心配する事しかできず落ち着かない時を過ごしました。

そんな時、翌2日にはAMDA本部から被災地に向けて出発した事、そのためおかやまコープ「AMDA基金」から拋出の確認がありました。迅速な対応に今さらながら感激しましたし、こうした活動をおかやまコープとして支援する事ができて、本当に良かったと思った瞬間です。その後も現地の状況や支援の様子などもご報告頂き、組合員からも共感の声が多数寄せられています。

おかやまコープでも募金の呼びかけやボランティアの派遣など支援活動を継続しており、全国の生協に寄せられた募金は17億円に上り支援では480名を派遣するなど支援の輪が広がっています。

一方、9月21日に被災した能登を再び豪雨が襲うなど、深刻な状況が続いています。おかやまコープでも全国の生協と共に「どこよりも長く、どこよりもきめ細かく」被災

地を支援していきたいと考えています。AMDAの皆さんも早速輪島での鍼灸支援活動を実施されていらっしゃるという事で頼もしい限りです。今後も緊急支援から復興までAMDAの皆さんと支援を重ねていきたいと思えます。



(左)お店で募金を呼びかける組合員
(右) 緊急支援活動に出発するAMDAさんのお見送り

点滴セットを寄贈しました

地方独立行政法人岡山市立総合医療センター (岡山市立市民病院・岡山市立せのお病院)
理事長 松本 健五

この度の石川県能登半島地震により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興、皆様の生活が一日も早く平穏に復することを祈り申し上げます。

岡山市立総合医療センターは、特定非営利活動法人AMDA(以下、AMDA)からの支援要請により、2024年1月10日、点滴(輸液、薬剤、ルート)100セットを寄贈しました。

AMDAは地震発災直後から被災者緊急救援活動を、輪島市立輪島中学校の避難所で行っておられました。体調不良を訴える多数の避難者のために、岡山市立市民病院に点滴の支援要請の電話連絡がありました。避難所で治療を必要とされている方々に一刻も早い迅速な治療を要するとのことで、直ちに点滴セット(輸液、薬剤、ルート)を用意し、AMDAの調整員の方々が電話連絡してきた翌日には、現地へと向かわれました。寄贈した点滴は、被災地である輪島市の避難所で治療に使用されました。その後、「あの点滴がなかったら、ノロウイルス等の感染拡大を止めることは不可能だった」とお聞きし、微力ながらお役に立てて安堵

いたしました。ちなみに、岡山市立市民病院のDMAT(災害派遣医療チーム)は、翌日の1月11日に当院を出発し支援活動を行いました。

私が大学2年生であった1972年の時、AMDA設立のきっかけとなる岡山大学医学部クワイ河医学踏査隊(菅波 茂 隊長)に一隊員として参加しました。それ以来、菅波前代表とは50年を越えるお付き合いとなります。あの頃と何も変わらない、そのままの菅波前代表を今でも尊敬しています。岡山から世界に貢献するAMDAへの支援を今後とも続けたいと思えます。



(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

日本青年会議所医療部会のネットワークを駆使した、能登半島地震への支援活動

日本青年会議所医療部会 2024年度部会長 南 辰也



医療部会は、今年で創立から60年を迎えました。医療に関連する事業に従事するメンバーが約400名所属しており、医療制度の研究や海外での医療支援活動を行っています。今年、日本国内では、旭川で医療従事者を目指す次世代育成のために、地域病院と協力して一日職業体験を実施しました。また、私も参加したカンボジアでの学校健診のように、海外でも医療支援活動を展開しています。

私は精神科の医師ですが、救急にも関心があり、神戸災害医療センターで災害医療の研修を受けています。AMDAが被災地のど真ん中で迅速に対応しているという記録は、医療部会の中では、2018年のご縁もあり脈々と残っており、有事の際にはAMDAへ声をかけようと部会のなかで受け継がれていました。今回も部会のなかからAMDAに協力しようという声があがり、1月3日に能登半島地震支援活動への協力の申し出をいたしました。

医療部会には様々な医療従事者がおり、ネットワークを駆使すれば何かしらの方法で要請に応えられるのが、我々の強みです。1月3日に協力の申し出をしたのち、AMDAから医療部会に支援物資提供依頼をいただきました。2回に分けて物資提供を行い、2回目の物資提供では私

が持って行きました。神戸から東京まで支援物資を取りに行き、その後、金沢でレンタカーを借りて輪島まで向かいました。街灯のない道や、陥没した場所を避けながら、我々の仲間から届いた情報をもとに、なんとかたどり着くことができました。信号は倒れ、ほとんどの建物は崩壊し、深刻な被災状況を目の当たりにして言葉を失いましたが、医療者として、少しでも力になりたいと、強く思いました。医療部会のメンバー全員が同じ気持ちでした。

今回、物資を誰がどうやって届けるかなど、考えなければならぬことがいろいろありましたが、様々な情報を精査して行動し、その結果現場に入ることができ、物資も無事提供できました。これは日本青年会議所医療部会として、足で行動するということがよく出たのかなと思っており、今回の経験を今後活かしていけたらなと考えています。

発災がないことが一番ですが、今後なにかあってお声がけいただいたときに、できることがあればぜひ協力したいと思っています。

届けていただいた漢方のど飴

ふたば漢方薬局 代表薬剤師 緋田 哲治



能登震災の避難所で、水がない状況で感染症が広まっている映像を見て、「薬は十分あるのかな?のど飴なら水なく誰もが手軽に利用できるのに・・・」と思っていました。

そんな1/19夜にAMDA事務局より被災地に麦門冬湯と小青竜湯(咳・鼻炎の漢方)を持っていきたいのだが在庫はありますかと連絡をいただきました。この頃は、漢方に限らず、咳止めや解熱剤などの多くの医薬品の供給が不安定となっていた時期でした。

在庫があったので対応させていただき、その際に何かのお役立たないかと、板藍のど飴(抗菌抗ウイルス作用を

もつ板藍根エキス含有)80粒1箱24袋提供させていただいたところ、すぐに派遣チームがトランクに詰め込んで被災地に持ち込んでくださいました。思いもかけない提供の機会をいただき、微力ながら感染対策の一助となれたのではないかと、とても感謝しています。

災害があった時、いつも一番に現地に入っていられるAMDAの皆さま、スタッフ・被災者の感染対策に、これからもぜひ協力させていただきたいと思っています。

一日も早い復興を願い、みんなの想いを被災地の未来に届けるために

Yahoo!基金 事務局長 鈴木 昭紀

私たち Yahoo!基金は、2006年に当時のヤフー株式会社(現LINEヤフー株式会社)によって設立された非営利の任意団体です。私たちは主に「自然災害や感染症に対する支援」と「ITを活用した社会課題の解決支援」をテーマに活動しております。

自然災害においては、緊急災害支援および復興支援を目的とし、ユーザーの皆さまからお預かりした寄付金を「義援金」や「支援金」として、被災地や支援活動を行う団体にお届けしています。

令和6年1月に発生した能登半島地震では、多くの方が被災し避難所生活を余儀なくされました。災害発生直

後から、被災地における医療支援を中心に活動を行ってきたアムダの皆さまには、心から感謝申し上げます。

9月の豪雨災害により、被災地の状況は依然として厳しく、復興には長期間を要することが予想されます。アムダの皆さまが地域に寄り添い、展開されている活動は、厳しい状況下での被災者の支えとなる貴重なものです。私たち Yahoo!基金としても、その活動を支援することで、被災地の平穏な日常を取り戻す一助となればと考えています。

被災地の一日も早い復旧と復興を心よりお祈り申し上げます。

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

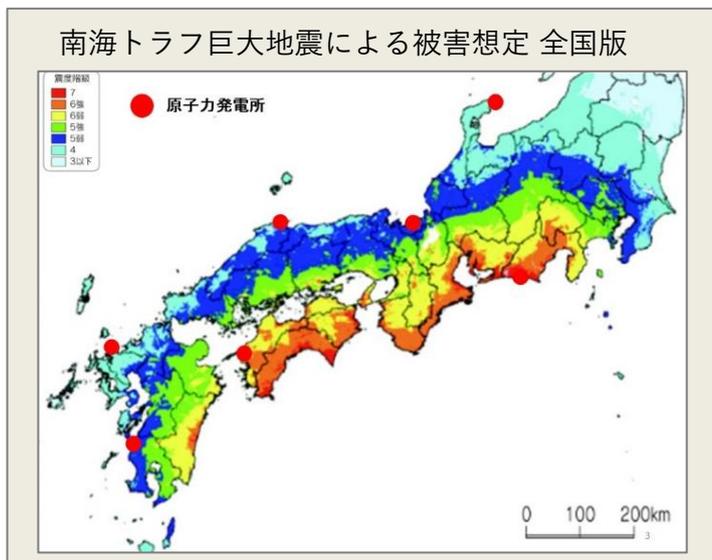
第五部： 南海トラフ・津波に備えて AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム最新概要

AMDA緊急支援活動は、災害が発生してから被災地域に向かう準備を行ない、現地の災害対策医療本部で登録を済ませてから被害状況等の情報収集をAMDA本部と共有して活動場所を検討してまいりましたが、南海トラフ地震の場合は、事前に被害地域や被害想定などが発表されています。

想定されている南海トラフ地震を止めることは出来ませんが、AMDAが出来る事は支援が届きにくい四国の徳島県と高知県への支援体制を事前に準備して、避難所で活動が行える医療チームと被災地域のマッチングを行い、活動がスムーズに行えるようにする事だと考えています。AMDA南海トラフ災害対応プラットフォームとして、2015年より多くの自治体や医療機関、団体、企業の方々と連携を継続しております。

以下に南海トラフ地震被害の想定から四国への支援を決定した経緯、被災地での状況や避難所での症状、医療チームの概要を記載しています。

1. 南海トラフ地震被害想定と徳島県・高知県支援



被害状況（予想）令和元年6月発表

都道府県	死者	建物全壊
東京都	1,100人	1,900棟
静岡県	88,000人	260,000棟
大阪府	3,600人	314,000棟
兵庫県	3,100人	45,000棟
和歌山県	53,000人	171,000棟
岡山県	900人	29,000棟
宮崎県	25,000人	75,000棟

被害状況（予想）令和元年6月発表

徳島県	高知県
死者18,000人（津波による死者 13,000人） 建物の被害：119,000棟	死者30,000人（津波による死者 19,000人） 建物の被害：223,000棟

* テータ引用：内閣府発表(https://www.soumu.go.jp/main_content/000858690.pdf)



地元医師会は膨大な遺体の検視に忙殺され、圧倒的に医療スタッフの不足が予測される

医療支援の必要性が増す



徳島県・高知県を支援

日本の大部分がこのように被災する中で、どこまで日本政府が機能するのか不透明であり、国内および海外からの支援が大都市に集中する可能性がある。加えて四国は島であるため、アクセスが難しく支援が十分に行き届かず孤立する可能性が高いと考える。そこでAMDAは、徳島県・高知県の8か所を支援することを決定した。

2. 予測される被災地の状況

- ① アクセス困難：明石海峡大橋不通、瀬戸大橋不通、しまなみ海道不通、四国山脈山崩れによる道路不通
- ② 死傷者数>医療スタッフ数：圧倒的な不足
- ③ 地元医師会の疲弊：膨大な数の遺体の検視
- ④ 被災地が広域：アクセス、大都市被災などの要因による応援医療スタッフ確保が困難
- ⑤ 医薬品・医療物資の不足：全国的な物流停止
- ⑥ 冬の災害発生：低体温による死亡者の増加
- ⑦ 海外からの医療チーム・支援団体：殺到、混乱
- ⑧ 原発事故の可能性：浜岡（静岡）、伊方（愛媛）
- ⑨ その他：上下水道の停止（衛生管理）

3. 避難所で想定される医療分類

- ① 外傷、低体温
- ② 上気道感染症、胃腸疾患、精神疾患（不眠、神経症）、非衛生症候群（皮膚）、廃用症候群、運動器疾患
- ③ 集団感染症、インフルエンザ、COVID-19、ノロウイルス、ムンプス等ウイルス感染
- ④ 生活習慣病
- ⑤ 巡回診療
- ⑥ その他（エコノミー症候群）

避難所生活に起因

4. AMDA派遣医療チームの概要

- ① 派遣期間：1週間（6泊7日）
- ② 派遣場所：徳島県（阿南市、阿波市・美馬市、牟岐町、美波町、海陽町）、高知県（高知市、須崎市、黒瀬町）
- ③ 募集職種：医師、看護師、薬剤師、介護福祉士、鍼灸師、理学療法士、臨床検査技師ほか
- ④ 予定医療チーム撤収日：災害発生から8週間後
- ⑤ 最大投入人数：1避難所につき、最大20名のAMDA派遣者（調整員を含む）を想定
- ⑥ 対応避難所数：8避難所

※記してある事柄が、状況によって、突然変更になる可能性も大いにあり得ることをあらかじめご了承ください。



高知県で毎年開催されている自治体とAMDAの連絡協議会

7.南海トラフ及び大規模災害に向けた協定一覧

	締結日	組織名
自治体 (19)	2013.09.10	総社市、公立大学法人岡山県立大学(世界の命を救う三者連携協定)
	2014.08.30	丸亀市、総社市(三者協定)
	2014.12.26	高知県
	2015.02.02	高知県高知市
	2015.02.02	高知県須崎市
	2015.02.02	高知県黒潮町
	2015.02.03	徳島県、株式会社阿波銀行(三者協定)
	2015.02.03	徳島県美波町
	2015.04.13	徳島県阿波市(施設使用に関する協定)
	2015.08.12	徳島県美馬市
	2015.10.08	徳島県(国際医療救援活動の支援協定)
	2016.05.31	岡山県備前市
	2016.07.04	岡山県和気町
	2016.12.21	岡山県赤磐市
	2017.05.30	徳島県阿南市
	2017.05.30	徳島県牟岐町
	2017.05.30	徳島県海陽町
	2019.02.12	熊本県益城町
2021.12.27	兵庫県養父市	
医療関係 (16)	2007.12.13	医療法人 和香会
	2007.12.13	医療法人 福嶋医院
	2007.12.17	財団法人 共愛会
	2007.12.17	社会福祉法人 淳風福祉会
	2008.09.01	医療法人社団 仁慈会
	2015.05.22	一般社団法人 徳島県医師会
	2016.05.30	独立行政法人 国立病院機構福山医療センター
	2016.07.05	公益社団法人 岡山県看護協会
	2016.07.06	学校法人 川崎学園
	2016.10.11	社会医療法人 全仁会 倉敷平成病院
	2017.02.01	医療法人創和会 しげい病院
	2017.10.12	公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院
	2018.10.14	公益社団法人 全日本鍼灸マッサージ師会, 公益財団法人 国際医療技術財団(三者協定)
	2019.02.01	鮫島病院(佐賀県)
	2019.02.14	組合立諏訪中央病院(長野県)
	2019.12.01	医療法人芳越会(徳島県)
海外 (3)	2015.03.17	Taiwan Root Medical Peace Corps:台湾の医療NGO
	2017.04.24	欧州日本人医師会
	2017.11.02	Raffles Medical International/China

7.南海トラフ及び大規模災害に向けた協定一覧

	締結日	組織名
企業 (9)	2007.10.26	生活協同組合おかやまコープ
	2011.12.16	十字屋グループ
	2015.02.03	徳島県、株式会社阿波銀行(上記有、三者協定)
	2015.03.14	株式会社ザグザグ
	2015.09.12	両備ホールディングス株式会社
	2017.05.15	ムネ製薬株式会社
	2017.12.26	有限会社 アイ薬局
	2019.07.28	民間救急サービスはやぶさ
	2021.02.28	ダイヤ工業株式会社
NPO等団体 (18)	2008.08.23	特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動
	2009.08.07	人類愛善会
	2012.07.27	特定非営利活動法人 B E R T
	2015.09.12	牛窓ヨットクラブ
	2015.11.11	全国訪問ボランティアナースの会キャンナス
	2016.03.24	一般社団法人 岡山経済同友会
	2016.05.29	特定非営利活動法人 航空医療研究所
	2016.07.06	吉備学区連合町内会
	2017.07.22	公益社団法人 岡山県鍼灸師会
	2017.09.18	岡山流通情報懇話会、一般社団法人 岡山経済同友会 (三者協定)
	2018.10.14	公益社団法人 全日本鍼灸マッサージ師会、 公益財団法人 国際医療技術財団(三者協定)
	2018.12.01	非営利公益法人国際キフ (KIF)
	2019.06.03	公益社団法人 日本鍼灸師会、 公益財団法人 国際医療技術財団 (三者協定)
	2019.08.19	公益社団法人 兵庫県柔道整復師会
	2020.03.05	岡山県商工会議所連合会
2020.07.03	特定非営利活動法人あゆみ	
2020.08.28	公益社団法人 岡山県柔道整復師会	
2021.09.21	日本労働組合総連合会岡山県連合会	
教育機関 (7)	2011.06.17	学校法人 明治東洋医学院 明治国際医療大学
	2013.09.10	総社市、公立大学法人岡山県立大学 (上記有、三者協定)
	2015.06.29	学校法人 就実学園
	2016.07.06	学校法人 川崎学園 (上記有)
	2017.08.25	学校法人 朝日医療大学校
	2019.03.25	学校法人平成医療学園 宝塚医療大学
	2024.06.06	学校法人創志学園 IPU・環太平洋大学

支援して下さった団体一覧

1. 主な支援団体名

(30万円以上ご支援ならびに支援物資をご提供くださった団体*敬称略 五十音順・令和6年9月30日まで)

自治体

- ・岡山県総社市
- ・岡山県美咲町
- ・高知県黒潮町

薬局関係

- ・株式会社 オカイ・メディカル・ファーマシー
- ・ふたば漢方薬局

企業

- ・株式会社 廣榮堂
- ・株式会社 三栄化成商事
- ・株式会社 トマト銀行
- ・ゲンゼ株式会社 ラブアース倶楽部
- ・生活協同組合おかやまコープ
- ・妹尾産業有限会社
- ・パルシステム生活協同組合連合会
- ・両備ホールディングス株式会社

医療機関

- ・医療法人 高杉会 高杉こどもクリニック
- ・地方独立行政法人 岡山市立総合医療センター

団体

- ・一隅を照らす運動総本部地球救援事務局
- ・NPO法人 ネットワーク『地球村』
- ・NPO法人 ピーク・エイド
- ・黒住教
- ・公益財団法人 新日本宗教団体連合会
- ・宗教法人 薬園山 長泉寺
- ・J.S.Foundation
- ・日本青年会議所医療部会
- ・茅ヶ崎中央ロータリークラブ
- ・本門佛立宗 四国布教区
- ・Yahoo!基金

2. 募金活動協力学校一覧 (*敬称略 五十音順・令和6年9月30日まで)

- ・IPU・環太平洋大学
- ・岡山市立京山中学校
- ・学校法人 みつ朝日学園 朝日塾中等教育学校
- ・倉敷市立倉敷南小学校
- ・倉敷市立万寿東小学校
- ・公立大学法人 岡山県立大学
- ・津山市立中正小学校 P T A
- ・AMDA中学高校生会



3. その他寄付いただいた団体一覧 (*敬称略 五十音順・令和6年9月30日まで)

- ・1m2 stand + store
- ・一般財団法人 渋谷長寿健康財団
- ・一般社団法人 ポリパンスマイル協会
- ・医療法人 健心会 鮫島病院
- ・医療法人社団 かとう内科並木通り診療所
- ・エクセルパック・カバヤ株式会社
- ・NPO法人 日本多文化交流協会
- ・学校法人 山口学園 ECC社会貢献・国際交流センター
- ・株式会社 J A 岡山
- ・株式会社 ビクパソネット
- ・株式会社 まつもとコーポレーション
- ・くるみダンスファクトリー
- ・合同会社 共栄堂
- ・桜が丘東西さくら祭り実行委員会
- ・三徳園友の会
- ・ジャパンベサニーミッション ニューライフキリスト教会
- ・宗教法人 法光山 妙勝寺
- ・大保協商事株式会社
- ・ツナガルライブ in やかげ交流会館
- ・津山ブックセンター有限会社
- ・天台岡山第四部佛教青年会
- ・天台宗 本性院
- ・天台宗 岡山教区宗務所
- ・日蓮宗 太生山一心寺
- ・日本労働組合総連合会 岡山県連合会
- ・P C らいふ株式会社
- ・Fun-y hair
- ・フジックス株式会社
- ・Bellissima Japan株式会社
- ・ミディアムレア プロジェクト
- ・宮脇書店 総社店 (有限会社ヒロシゲ文庫)
- ・みんなでつくる春の文化祭参加者
- ・メモリーお客様御一同
- ・山口カレーの会
- ・有限会社 のんき
- ・有限会社 弥生商店
- ・蓮華寺
- ・和賀家

このほかにも、多くの皆様に今回ご支援をいただいております。心より御礼申し上げます。

時系列でみる活動の動き

地震被災者緊急支援活動	1月1日	午後4時10分石川県能登地方を震源とする最大震度7の地震が発生
	1月2日	AMDA本部職員を含む2人を第1次派遣チームとして現地に派遣 石川県保健医療福祉調整会議に参加し情報収集を開始
	1月3日	能登医療圏活動拠点本部（公立能登総合病院）にて活動登録行う
	1月4日	高速道路の通行止め、道路の陥没や隆起、その他悪天候や余震の影響によって大規模な渋滞発生 大規模災害時協力協定を結んでいる長野県の組合立諏訪中央病院（以降諏訪中央病院）より派遣された第1陣医療チームと合流
	1月5日	輪島市役所で行われた保健医療福祉調整本部会議へ参加
	1月6日	避難所調査を実施 巡回診療・福祉避難所の必要性などの情報収集を行う 医薬品などを積んだ車両にて、AMDA第2次派遣チームが岡山を出発
	1月7日	嘔吐下痢やコロナウイルス等の感染症の流行が避難所で確認される 輪島市立輪島中学校（以降輪島中学校）を拠点にAMDAが医療支援活動を行うことが決定
	1月8日	輪島中学校での救護所活動を開始 岡山からAMDA第3次派遣チームを派遣
	1月9日	避難者数は542人で、輪島中学校での最大避難者数 AMDA第4次派遣チーム到着
	1月11日	避難所で段ボールベッド必要者の聞き取り調査実施
	1月13日	諏訪中央病院からの医療チーム第2陣を派遣
	1月15日	AMDA第5次派遣チームが岡山と各居住地から出発し合流
	1月17日	AMDA第6次派遣チームが合流、 1次避難所の輪島中学校から2次避難所へ移動される方もあり、避難所内の避難者数は少しずつ減少傾向
	1月18日	AMDA第7次派遣チームが岡山から合流
	1月19日	高齢の避難者から順に段ボールベッドの設置がすすめられた
	1月21日	諏訪中央病院から医療チーム第3陣を派遣
	1月22日	AMDA第8次派遣チームが岡山と各居住地から出発
	1月23日	避難所内でラジオ体操が行われた後、健康ストレッチを開始
	1月24日	諏訪中央病院からの医療チーム第4陣を派遣 救護所への来所者数は20人前後と減少
	1月26日	災害高血圧症が心配されるため、 輪島市の協力を得て施設内に血圧計を3台設置
	1月28日	諏訪中央病院からの第5陣医療チームが合流 医療・福祉調整本部救護所医療班との話し合いのもと、 地元医療の一本化に伴いAMDAの救護所活動は2月3日をもって終了決定
1月29日	救護所での診察数が10人前後、避難所内の感染者数は6人	
1月30日	地元医療、保健師を含む福祉関係者への情報共有なども行い、地元の医療、福祉につなぐ取り組みも開始	
2月1日	発災から1か月、震災の発生した同時刻に全員で黙とう 諏訪中央病院から医師1人が合流	
2月3日	地元の医療機関が保険診療を徐々に再開し、加えて輪島中学校 避難所と輪島病院を結ぶ巡回バスが5日から運行開始になるため AMDAの活動は診療以外の支援活動に移行することになった	
2月5日	輪島中学校で開設していた救護所を閉鎖	
2月15日	岡山のAMDA本部より調整員2人が石川へ向け出発。白山市を訪問	
2月16日	石川県内及び輪島中学校を訪問	
地震復興支援活動	4月25日	輪島中学校訪問
	7月10日	輪島中学校、輪島市教育委員会を訪問、輪島中学校の復興支援として掃除や机の移動などを行うボランティア活動をAMDAで行うことが決定
	8月6日	AMDAと連携協定を締結しているIPU・環太平洋大学のサッカー部員による輪島中学校内で清掃活動実施 輪島中学校のサッカー部員とのサッカー交流を行う
豪雨被災者緊急支援活動	9月21日	線状降水帯による記録的な大雨の影響で奥能登地域に水害が発生
	9月23日	現地の被害状況と支援の内容を判断するため、AMDA職員2人が岡山より出発
	9月24日	輪島市医療福祉調整会議に活動登録を行う
	9月25日	被災者を支える支援者の支援を行うということでAMDAから鍼灸師派遣をし、災害鍼灸を行うことが決定
	9月27日	AMDA本部より、AMDA災害鍼灸プログラムメンバーである鍼灸師2人が現地へ向かう
	9月28日	「グループホーム ひなたぼっこ」にて鍼灸施術
	9月29日	「養護老人ホーム ふるさと能登」にて鍼灸施術
	9月30日	「地域密着型特別養護老人ホーム 輪島荘」にて鍼灸施術
	10月1日	「養護老人ホーム ふるさと能登」にて鍼灸施術 能登豪雨被災者緊急支援活動を終了

職種別派遣者一覧

合計48名（名前/職種/所属 *敬称略 情報は派遣時のもの）

医師 *派遣順

- ・齋藤 穰/医師/諏訪中央病院
- ・頼藤 貴志/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・佐藤 拓史/医師/AMDA理事長
- ・鈴記 好博/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・池田 大岳/医師/諏訪中央病院/国保依田窪病院
- ・玉井 道裕/医師/諏訪中央病院
- ・酒井 太郎/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・長谷川 太郎/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・堀田 和子/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・萩谷 英大/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・植木 一陽/医師/諏訪中央病院
- ・渡辺 慶介/医師/諏訪中央病院
- ・安西 兼丈/医師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・中村 考志/医師/諏訪中央病院
- ・星野 諒/医師/諏訪中央病院
- ・胡田 健一郎/医師/諏訪中央病院
- ・永田 豊/医師/諏訪中央病院
- ・貝塚 真知子/医師/諏訪中央病院

看護師 *派遣順

- ・宮澤 英典/看護師/諏訪中央病院
- ・山村 容加/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・横谷 勇紀/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・江森 敦子/看護師/諏訪中央病院
- ・岡野 亜香/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・堀内 美由紀/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・伊藤 さちこ/看護師/諏訪中央病院
- ・菅原 久美子/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・中山 秀明/看護師/諏訪中央病院
- ・東 千織/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・藤本 智子/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・長谷川 舞/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・神徳 備子/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク

薬剤師 *派遣順

- ・谷口 あゆみ/薬剤師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・西村 亜希子/薬剤師/AMDA緊急救援ネットワーク

作業療法士

- ・林 耕平/作業療法士/諏訪中央病院

理学療法士

- ・杉田 勇/理学療法士/諏訪中央病院

調整員 *派遣順

- ・大西 彰/調整員/AMDA職員/
AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム
合同対策本部長
- ・林 篤志/調整員/鍼灸師/
AMDA災害鍼灸プログラムメンバー
- ・松尾 昌/調整員/臨床工学技士/諏訪中央病院
- ・西村 輝/調整員/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・安森 泰龍/調整員/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・三宅 孝士/調整員/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・難波 妙/調整員/AMDA副理事長
- ・竹原 旺佑/調整員/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・平野 晃/調整員/柔道整復師/AMDA緊急救援ネットワーク
- ・金高 摩耶/調整員/AMDA職員
- ・小川 直美/調整員/看護師/AMDA職員
- ・榎田 倫道/調整員/看護師/AMDA職員
- ・山口 大輔/調整員/鍼灸師/
AMDA災害鍼灸プログラムメンバー

能登半島地震復興支援活動参加者一覧 合計20名（名前/所属 *敬称略 情報は派遣時のもの）

- ・坂手 雅斗/IPU・環太平洋大学サッカー部/コーチ
- ・井ノ口 彰悟/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・宇田 尚立/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・内山 陽太/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・江上 竜汰/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・大江 凌駕/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・杉森 心相/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・塚越 柊太/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・綱島 基起/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・富山 慈温/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・友成 翼/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・中村 勇太/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・橋本 翔人/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・平野 剛輝/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・松瀬 大河/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・松村 直紀/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・松本 風馬/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・森江 颯斗/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・森口 修都/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生
- ・若尾 以心/IPU・環太平洋大学サッカー部/学生

あとがき

AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム 合同対策本部 本部長 大西 彰

令和6年能登半島地震発生から1年が経過しました。

この報告書は、令和6年能登半島地震被災者緊急支援活動、能登半島地震復興支援活動、能登豪雨被災者緊急支援活動を通じて、皆様からの温かいご支援に支えられ、AMDAから多くの医療者を含む支援者が、輪島に派遣され、地元の方々との交流が出来たことを物語っています。

私は、能登半島地震の発災時に輪島中学校の救護所に入りました。避難所に関係する方々（輪島中学校の教員、輪島市職員、避難者代表、避難者、AMDAからの派遣者）と今出来ることを協力しながら過ごした日々が思い出されます。



復興支援では中学校の片付けに参加しました。避難所で活動していた当時の面影がまだ一部残ってはいましたが、復興に向けて進み出していることに心が躍りました。

その安心もつかの間、豪雨災害にみまわれ度重なる災害により、やるせない気持ちでした。以前、避難所生活をされていた方にお会いし、明るい笑顔をいただき、地域の中で買い物に行けない方の代わりに買い物やお世話をされていることを聞き、人々の支えあう心の暖かさに感銘を受けました。

AMDAの活動コンセプトの中に、「開かれた相互扶助」があります。知らない人同士が、国や文化を越えて助け合うこととしてとらえています。AMDAでは2015年から南海トラフ地震に備えて、AMDA南海トラフ災害対応プラットフォームを立上げて、自治体や医療機関、各種団体、企業の方との調整を行い、過去の災害などから学び、準備を進めてきています。時を超えた相互扶助の考えもあり、今回の輪島に携わった人と人の繋がりによる助け合う気持ちも、このAMDA南海トラフ災害対応プラットフォームでは、大切にしていきたいと感じています。

結びに、被災地の皆さまの一日も早い復興をお祈りするとともに、ご支援をいただいたすべての方々の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。





AMDA The Association of Medical Doctors of Asia
特定非営利活動法人アムダ

〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町 3-31-1
[TEL] 086-252-7700 [FAX] 086-252-7717
[Mail] member@amda.or.jp